

祝谷畠中遺跡 3次調査 祝谷大地ヶ田遺跡 8次調査

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2025

松山市教育委員会
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

いわいだにはたけなか
祝谷畠中遺跡3次調査

いわいだにおおちがた
祝谷大地ヶ田遺跡8次調査

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書



2025

松山市教育委員会
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター



卷頭図版 1. 祝谷大地ヶ田遺跡 8 次調査完掘状況



卷頭図版 2. 祝谷 11 号墳 2 号石室出土遺物

序　　言

本書は、個人住宅の建設に伴う本発掘調査として国庫補助を受けて実施した祝谷畠中遺跡3次調査、祝谷大地ヶ田遺跡8次調査の発掘調査報告書です。

これらの2遺跡は、松山平野東北部の祝谷地区にある道後城北遺跡群に所在しています。同遺跡群内では縄文時代から古墳時代の遺跡が数多く発見されています。なかでも、弥生時代中期から後期にかけて大規模な集落が形成され、瀬戸内地域を代表する拠点的集落が存在していたことが明らかとなっています。

祝谷畠中遺跡3次調査では、弥生時代の竪穴建物や溝、土坑を検出しました。これらは畠中地区で環濠と想定されている大溝に囲まれた集落内の構造を考えるうえで貴重な手がかりとなるものです。

また、祝谷大地ヶ田遺跡8次調査では、弥生時代の貯蔵穴や古墳時代の横穴式石室を検出し、調査地周辺の貯蔵穴群や古墳群の広がりが明らかとなりました。

こうした発掘調査成果は、松山平野東北部の弥生時代の集落や古墳時代の墳墓の様相を解明し、当時の歴史景観を復元するうえで貴重な資料となるものです。

最後に、発掘調査及び報告書刊行に際しご協力いただきました地権者をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げます。

令和7年3月

松山市教育長

前田 昌一

例　　言

1. 本書は、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センターが国庫補助を受け、平成26年度と同29年度に道後城北遺跡群内にて実施した個人住宅建設に伴う本発掘調査の調査成果をまとめた調査報告書である。
2. 遺構は、呼称名を略号化して記述した。
竪穴建物：S B、溝：S D、土坑：S K、柱穴：S P
3. 本書で使用した標高値は海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした座標北で世界測地系に準拠した。
4. 本書で報告した遺構埋土及び土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』（2019）に準拠した。
5. 本書掲載の遺構図や実測図の縮分は、縮分値をスケール下に記した。
6. 報告書作成に伴う遺物の復元・実測・製図及び遺構の製図は、整理担当者である河野 史知の指導のもと、二宮 八咲、原 富美、渡部 美佐緒、紺田 明日香が担当した。
7. 本書掲載の遺構写真は、調査担当者の河野と大西 朋子が撮影し、遺物写真の撮影及び写真図版作成は河野が担当した。
8. 調査における国土座標軸測量は、セントラルエンジニアリング株式会社（祝谷畠中遺跡3次調査）と株式会社エクセル調査設計（祝谷大地ヶ田遺跡8次調査）に業務を委託した。
9. 本書の執筆・編集は河野が担当し、浄書は二宮が行った。
10. 本書で作成した図面・記録類及び出土品は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査・整理及び編集刊行組織	2
第2章 遺跡の概要	4
第1節 遺跡の立地	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 祝谷畠中遺跡3次調査	9
第1節 調査の経緯	9
第2節 層位	11
第3節 遺構と遺物	14
第4節 小結	22
第4章 祝谷大地ヶ田遺跡8次調査	25
第1節 調査の経緯	25
第2節 層位	27
第3節 遺構と遺物	31
第4節 小結	59
第5章 祝谷大地ヶ田遺跡8次調査出土の古墳人骨	69
第6章 調査の成果と課題	77

挿図目次

第2章 遺跡の概要

第1図 松山平野の地形概要図	4
第2図 周辺遺跡分布図	6

第3章 祝谷畠中遺跡3次調査

第3図 祝谷畠中遺跡3次調査周辺遺跡分布図	9
第4図 調査区配置図	10
第5図 1区東壁・北壁土層図	11
第6図 2区西壁・東壁・南壁土層図	12
第7図 遺構配置図	13
第8図 SB101測量図	14
第9図 SB101出土遺物実測図	15
第10図 SD101・102測量図・出土遺物実測図	16
第11図 SD103測量図	17
第12図 SK101測量図	
第13図 SK101出土遺物実測図	18
第14図 柱穴測量図(1区)	
第15図 SD201測量図・出土遺物実測図	19
第16図 SD202測量図	20
第17図 SK201測量図	
第18図 鋤跡測量図	21
第19図 柱穴測量図(2区)(1)	
第20図 柱穴測量図(2区)(2)	22

第4章 祝谷大地ヶ田遺跡8次調査

第21図 周辺遺跡分布図	26
第22図 調査地区割図	27
第23図 北壁・南壁土層図	28
第24図 東壁・西壁土層図	29
第25図 遺構配置図	30
第26図 SK1測量図	31
第27図 SK1出土遺物実測図	32
第28図 SK2測量図	33
第29図 SK2出土遺物実測図	
第30図 SK3測量図	34

第31図 SK4測量図・出土遺物実測図	34
第32図 SK5測量図	35
第33図 SK6測量図	
第34図 SK6出土遺物実測図	36
第35図 SK7測量図	
第36図 SK8測量図・出土遺物実測図	37
第37図 SK9測量図	38
第38図 SK10測量図	
第39図 SK11測量図	39
第40図 SK11出土遺物実測図	
第41図 SK12測量図	40
第42図 SK12出土遺物実測図	
第43図 SK13測量図	41
第44図 SK14測量図・出土遺物実測図	
第45図 柱穴出土遺物実測図	42
第46図 1号石室平面図	43
第47図 1号石室展開図	44
第48図 1号石室床面状況図	45
第49図 1号石室遺物出土状況図	46
第50図 1号石室出土遺物実測図(1)	47
第51図 1号石室出土遺物実測図(2)	48
第52図 1号石室出土遺物実測図(3)	49
第53図 2号石室平面図	50
第54図 2号石室床面状況図	51
第55図 2号石室展開図	52
第56図 2号石室出土遺物・埋葬者配置状況図	53
第57図 2号石室出土遺物実測図(1)	54
第58図 2号石室出土遺物実測図(2)	55
第59図 2号石室出土遺物実測図(3)	56
第60図 2号石室出土遺物実測図(4)	57
第61図 2号石室出土遺物実測図(5)	58

第5章 祝谷大地ヶ田遺跡8次調査出土の古墳人骨

第62図 遺跡の位置(1/25,000)	70
第63図 人骨の残存図(アミかけ部分)	75

第6章 調査の成果と課題

第64図 祝谷大地ヶ田遺跡3~8次調査区配置図	78
-------------------------	----

表目次

第1章 はじめに

表 1 調査地一覧	1
-----------------	---

第2章 遺跡の概要

表 2 祝谷畠中遺跡・祝谷大地ヶ田遺跡の遺跡一覧	7
--------------------------------	---

第3章 祝谷畠中遺跡3次調査

表 3 墓穴建物一覧	23
表 4 溝一覧	
表 5 土坑一覧	
表 6 柱穴一覧	
表 7 SB101 出土遺物観察表 土製品	24
表 8 SD102 出土遺物観察表 土製品	
表 9 SK101 出土遺物観察表 土製品	
表 10 SD201 出土遺物観察表 土製品	

第4章 祝谷大地ヶ田遺跡8次調査

表 11 土坑一覧	60
表 12 SK1 出土遺物観察表 土製品	61
表 13 SK2 出土遺物観察表 土製品	
表 14 SK4 出土遺物観察表 土製品	
表 15 SK6 出土遺物観察表 土製品	62
表 16 SK8 出土遺物観察表 土製品	
表 17 SK8 出土遺物観察表 石製品	
表 18 SK11 出土遺物観察表 土製品	
表 19 SK12 出土遺物観察表 土製品	
表 20 SK14 出土遺物観察表 土製品	
表 21 柱穴出土遺物観察表 土製品	63
表 22 1号石室出土遺物観察表 土製品	
表 23 1号石室出土遺物観察表 装身具	64
表 24 1号石室出土遺物観察表 金属製品	
表 25 2号石室出土遺物観察表 土製品	65
表 26 2号石室出土遺物観察表 装身具	
表 27 2号石室出土遺物観察表 金属製品	67

第5章 祝谷大地ヶ田遺跡8次調査出土の古墳人骨

表 28 資料数 (Table 1. Number of materials)	71
表 29 出土人骨一覧 (Table 2. List of skeletons)	
表 30 年齢区分 (Table 3. Division of age)	

写真図版目次

卷頭図版 1. 祝谷大地ヶ田遺跡8次調査完掘状況

卷頭図版 2. 祝谷10号墳2号石室出土遺物

写真 1 調査区全景

写真 2 11号墳2号石室出土状況

写真 3 下顎骨 (The mandible)

写真 4 大腿骨 (The Femur)

写真 5 頭蓋側面 (Lateral view of the skull)

写真 6 歯 (The teeth)

図版 1 1. 調査地全景 (西より)

2. 遺構検出状況 (西より)

3. 1区遺構検出状況 (北より)

図版 2 1. 2区遺構検出状況 (北東より)

2. 1区東壁土層 (西より)

3. 2区東壁土層 (西より)

図版 3 1. SB101 焼土検出状況 (南より)

2. SB101 遺物出土状況 (北西より)

3. SK101 完掘・ベルト土層堆積状況 (南西より)

図版 4 1. 1区・2区完掘状況 (東より)

2. 1区完掘状況 (北より)

3. SB101 完掘状況 (北より)

図版 5 1. 2区完掘状況 (北東より)

2. SD202 完掘状況 (北東より)

3. 調査後全景 (南東より)

図版 6 1. 出土遺物 (SB101:1~6, SK101:8~10)

図版 7 1. 調査前全景 (西より)

2. 遺構検出状況 (西より)

3. 遺構検出状況 (南より)

図版 8 1. 遺構検出状況 (東より)

2. 1号石室検出状況 (西より)

3. 1区・2区完掘状況 (東より)

- 図版 9 1. 調査風景（北より）
2. 1号石室堆積土層（東より）
3. 1号石室床面検出状況（西より）
- 図版 10 1. 1号石室遺物出土状況（西より）
2. 1号石室玉出土状況（北西より）
3. 1号石室基底面検出状況（北西より）
- 図版 11 1. 1号石室玄門部の内側（北より）
2. 1号石室墓道部半掘状況（南より）
3. 2号石室遺物出土状況（西より）
- 図版 12 1. 2号石室遺物出土状況（北より）
2. 金属製品出土状況（北西より）
3. 2号下顎付近検出状況（西より）
- 図版 13 1. 2号石室人骨検出状況（西より）
2. 2号石室床面検出状況（北より）
3. 2号石室基底面検出状況（東より）
- 図版 14 1. 遺構完掘状況（西より）
2. 遺構完掘状況（南東より）
3. 遺構完掘状況（北東より）
- 図版 15 1. 1号石室完掘状況（西より）
2. 1号石室完掘状況（北より）
3. 2号石室完掘状況（西より）
- 図版 16 1. 周溝遺構完掘状況（西より）
2. 2号石室完掘状況（北東より）
3. 2号石室完掘状況（南西より）
- 図版 17 1. SK1 完掘状況（南東より）
2. 周溝・SK5 完掘状況（北より）
3. SK2 完掘状況（北より）
- 図版 18 1. SK5 遺構完掘状況（東より）
2. SK6 遺構完掘状況（北より）
3. SK8 遺物出土状況（南西より）
- 図版 19 1. SK11・12、SP6 完掘状況（南西より）
2. 調査地と尾根部（北西より）
3. 調査後全景（南西より）
- 図版 20 1. 出土遺物（SK1：1・3・6～9、SK2：13～15・17）
- 図版 21 1. 出土遺物（SK4：18、SK6：19～22、SK8：23・24、SK11：25、SK12：26～30、SK14：32・33）
- 図版 22 1. 出土遺物（柱穴：34・38、1号石室：41～43・44・46～51）
- 図版 23 1. 出土遺物（1号石室）
- 図版 24 1. 出土遺物（2号石室）
- 図版 25 1. 出土遺物（2号石室）
- 図版 26 1. 出土遺物（2号石室）

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

本書掲載の2遺跡は、個人住宅建築に伴う本発掘調査である。遺跡が所在する祝谷地区には低位丘陵が広がり、これまでに集落遺跡や古墳などが発見されている。

祝谷畠中遺跡3次調査は祝谷地区の南端部に位置し、埋蔵文化財包蔵地「No.56 祝谷畠中遺跡」内に所在する。2014（平成26）年11月25日、松山市祝谷二丁目142番1、142番2（以下、申請地という。）における個人住宅建築のための造成工事に伴う埋蔵文化財確認申込書が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課という。）に提出された。申請地周辺の永谷川左岸域には祝谷畠中遺跡や土居窪遺跡、同右岸域には祝谷西山遺跡などが存在し、とりわけ祝谷畠中遺跡では弥生時代前中期から中期中葉頃の大溝が検出されている。これらのことから、文化財課は申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するために2014（平成26）年11月26日に試掘調査を実施し、弥生時代以降の柱穴や弥生土器を検出した。

祝谷大地ヶ田遺跡8次調査は、祝谷地区の中央部に位置し、埋蔵文化財包蔵地「No.55 祝谷大地ヶ田遺跡」内に所在する。2017（平成29）年8月14日、松山市祝谷六丁目1024番3及び1023番における個人住宅建築に伴う埋蔵文化財確認申込書が文化財課に提出された。申請地周辺の祝谷大地ヶ田遺跡では7次にわたり発掘調査が実施されており、弥生時代前期から中期の土坑群や古墳時代中期の前方後円墳、古墳時代後期の横穴式石室をもつ古墳群が検出されている。なかでも祝谷六丁場遺跡では、丘陵部において、弥生時代後期の埋納された平形銅剣が出土しており、松山平野でも注目される地域である。これらのことから、文化財課は申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するために2017（平成29）年6月22日、試掘調査を実施し、弥生時代から古墳時代にかけての溝、土坑、柱穴などや弥生土器、須恵器を検出した。

その後、この2件の試掘調査の結果に基づき、愛媛県教育委員会から申請者に対し埋蔵文化財を保護できない部分について発掘調査が指示されたため、申請者と文化財課との間で遺跡の取り扱いについて協議が行われ、失われる遺跡を記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は松山市が国庫補助の適用を受け、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターという。）が文化財課の指導・監督のもと実施した。各調査の所在地や調査面積等は表1に記す。

表1 調査地一覧

遺跡名	所在地	面積 (m ²)	屋外調査
祝谷畠中遺跡3次調査	松山市祝谷二丁目142番1、142番2	約90	2015（平成27）年1月19日～同年1月30日
祝谷大地ヶ田遺跡8次調査	松山市祝谷六丁目1024番3及び1023番	約160	2018（平成30）年2月1日～同年2月28日

第2節 調査・整理及び編集刊行組織

本書掲載の2遺跡は、平成26年度に祝谷畠中遺跡3次調査、平成29年度に祝谷大地ヶ田遺跡8次調査として屋外調査を実施した。報告書作成に伴う整理作業は、埋文センターと文化財課との間で委託契約が締結され、令和5年度と令和6年度に実施した。令和5年度は報告書作成に伴う出土品の整理や実測、遺構図や土層図等の原図作成作業を行った。令和6年度は、実測図や遺構図等のデジタルトレース、報告書掲載用の遺物写真撮影や写真図版作成、本文原稿の執筆や図版の割付及び報告書編集業務を行った。

(1) 調査組織

〔平成26年度〕(平成26年4月1日現在)

松山市教育委員会	教育長	山本 昭弘	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
事務局	局 長	舛田 二郎	理事長 中山 紘治郎
	企画官	隅田 完二	事務局 局 長 中西 真也
	企画官	津田 慎吾	次長兼総務部部長 紺田 正彦
文化財課	課 長	若江 俊二	施設利用推進部 部 長 玉井 弘幸
	主 査	楠 寛輝	埋蔵文化財センター所長兼考古館館長 田城 武志
			調査・研究担当リーダー 山之内 志郎
			調査・研究担当リーダー 橋本 雄一
			普及・啓発担当リーダー 梅木 謙一
			(調査担当) 主 任 河野 史知
			(写真担当) 嘴 託 大西 朋子

〔平成29年度〕(平成29年4月1日現在)

松山市教育委員会	教育長	藤田 仁	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
事務局	局 長	津田 慎吾	理事長 中山 紘治郎
	次 長	家串 正治	事務局 局 長 中西 真也
	次 長	杉本 威	次長兼総務部部長 橘 昭司
文化財課	課 長	若江 俊二	文化振興部 部 長 渡部 広明
	主 幹	越智 茂樹	埋蔵文化財センター 所 長 村上 卓也
			考古館館長 梅木 謙一
			(調査担当) 主 任 河野 史知
			(写真担当) 嘴 託 大西 朋子

(2) 整理組織

〔令和5年度〕(令和5年4月1日現在)

松山市教育委員会	教育長	前田 昌一	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
事務局	局 長	鷺谷 浩三	理事長 本田 元広
	次 長	河野 直充	事務局 局 長 片山 雅央
	次 長	石原 英明	次長兼総務部部長 宇高 徹二
	次 長	横山 憲	施設管理部 部 長 仙波 義道
	次 長	大石 和可子	埋蔵文化財センター所長兼考古館館長 梅木 謙一
文化財課	課 長	岸 洋三	主 察 吉岡 和哉
	副主幹	楠 寛輝	(整理担当)嘱託 河野 史知

(3) 編集・刊行組織

〔令和6年度〕(令和6年4月1日現在)

【刊行組織】

松山市教育委員会	教育長	前田 昌一
事務局	局 長	横山 憲
	次 長	野口 信隆
	次 長	白石 秀一
	次 長	好光 慎吾
文化財課	課 長	岸 洋三
	主 幹	楠 寛輝

【編集組織】

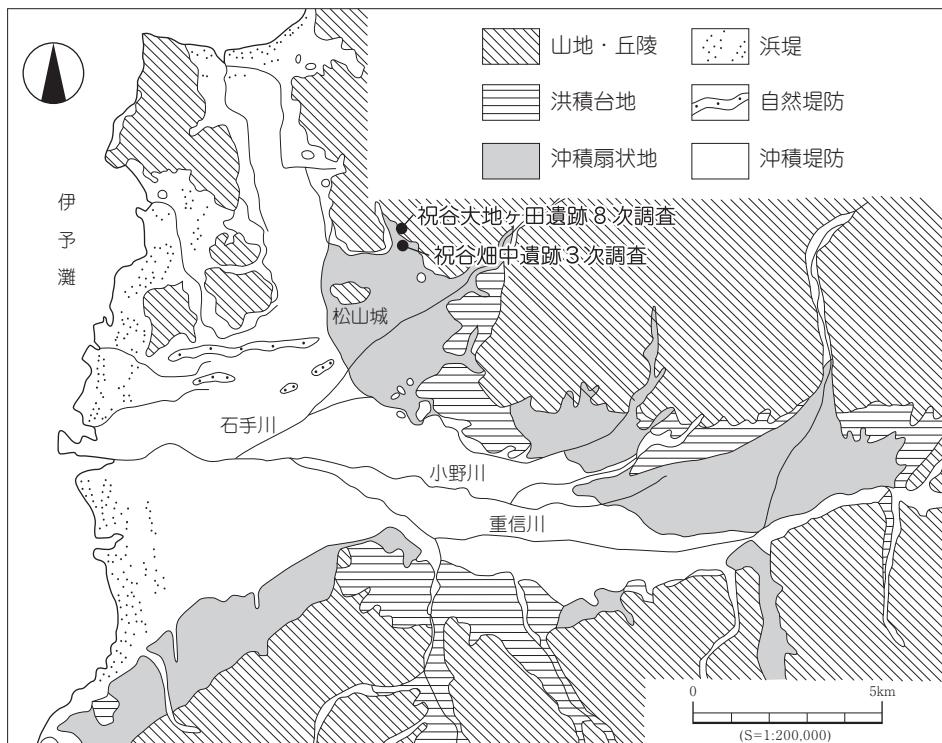
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
理事長 本田 元広
事務局 局 長 横本 勝己
次長兼総務部部長 宇高 徹二
施設管理部部長兼事業振興部部長 仙波 義道
埋蔵文化財センター所長兼考古館館長 梅木 謙一
主 幹 吉岡 和哉
(編集担当)嘱託 河野 史知

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立地

松山平野は愛媛県の中央部、高縄半島の西南麓に位置する。高縄半島には東三方ヶ森、北三方ヶ森、高縄山からなる高縄山地が形成されており、西は伊予灘、北は斎灘に面し、伊予灘に向かって扇状に開けた沖積平野である。平野を流れる河川のうち、石手川は山地を浸食開析し、山麓部から平野に出たのちに土砂礫を堆積させながら沖積扇状地を形成している。

本書で報告する祝谷畠中遺跡3次調査と祝谷大地ヶ田遺跡8次調査が所在する祝谷地区は、高縄山地に源を発した永谷川と、その支流である丸山川・市の谷川などの小河川によって形成された開析谷と小規模な河岸段丘からなり、その範囲は最大幅約1.3km、奥行き約2kmである。祝谷畠中遺跡3次調査地は丸山川左岸の沖積扇状地、祝谷大地ヶ田遺跡8次調査地は丸山川左岸の丘陵先端部に立地する（第1図）。



第1図 松山平野の地形概要図

第2節 歴史的環境（第2図）

祝谷地区は松山平野東北部にあり、道後温泉周辺から勝山と御幸寺山に挟まれた東西約2.8km、南北約2.5kmの範囲に広がる松山平野有数の遺跡群である道後城北遺跡群に属している。ここでは道後城北遺跡群を中心に時代毎に概観する。

（1）旧石器時代

丸山川左岸の丘陵部標高120mの祝谷丸山遺跡から細石核や細石刃などが採集されているが、明確な遺構は確認されていない。

（2）縄文時代

文京遺跡24次調査において前期末の土器が包含層中より出土している。また、後期には同11次調査で屋外炉が確認されているほか、24次調査、27次調査、30次調査などでは該期の土器や焼土、炭化物の集中が確認されている。また、城北地区にある道後城北RNB遺跡からは、縄文時代後期前葉と晚期後葉の包含層を検出し、持田本村遺跡、持田町三丁目遺跡や道後今市遺跡10次調査からは縄文晚期の土坑を検出している。一方、祝谷地区の土居窪遺跡からは後期から晚期にかけての土器が出土している。

（3）弥生時代

前期では文京遺跡4次調査（東中学校構内）にて竪穴住居が検出されているほか、岩崎遺跡からは環濠と思われる大型溝や土坑群が確認されている。また、持田町三丁目遺跡からは土壙墓群や土器棺墓群で構成される墓域が確認されるなど、集落様相が明らかになりつつある。前期末から中期にかけて祝谷畠中遺跡から大規模な大溝をもつ集落が形成され、竪穴住居から弥生土偶が出土している。また、土居窪遺跡からは鍬・櫛状木器や建築部材などの木製品が出土している。祝谷地区の丘陵上にて平形銅剣の埋納土坑が発見された祝谷六丁場遺跡や祝谷大地ヶ田遺跡3～7次調査では約400基に及ぶ貯蔵穴群の広がりが確認されている。勝山の東丘陵上の東雲神社遺跡では土坑から一括遺物が出土している。中期後半から後期にかけて文京遺跡を中心に大規模な集落が展開されるようになり、竪穴住居が密集する居住区と貯蔵穴や高床式倉庫群、さらに居住区東側には超大型の掘立柱建物や竪穴住居、方形檜などからなる集落中枢部が存在している。

（4）古墳時代

松山北高等学校遺跡2次調査では前期の竪穴建物が検出され、松山大学構内遺跡2次調査や持田町三丁目遺跡では多数の竪穴建物が検出されている。中期から後期にかけては松山大学構内遺跡にて竪穴建物や溝、土坑など多数の遺構や遺物が確認されている。一方、丘陵部では中期から後期の古墳が広く分布しており祝谷古墳群や御幸寺山古墳群、常信寺山古墳群などがあり、道後地区では桜谷古墳群や石手寺古墳群が存在する。永谷川上流の両岸に祝谷古墳群があり、右岸に祝谷1～5号墳、左岸に祝谷6～11号墳の2カ所に分かれる。中期古墳の祝谷9号墳は、前方後円墳で周濠外壁を葺石で覆う特異な古墳である。祝谷1号墳は2号墳と同じ墳丘をもち、ともに横穴式石室である。3～5号墳は竪穴式石室構造で1・2号墳に先行する古墳である。祝谷6～8号墳は横穴式石室構造で、6号墳からは円頭大刀の柄頭が出土し、7号墳からは複数の小像を配した装飾付須恵器が出土している。

(5) 古代

白鳳期には湯之町廃寺跡や内代廃寺跡が確認されており、石手寺は神亀5（728）年に聖武天皇の勅願で創建されたと伝えられている。道後温泉の東隣の道後湯月町遺跡にて池跡を検出し、飛鳥時代から平安時代の土器や瓦が多数出土している。岩崎遺跡では奈良時代後半の区画溝や平安時代の掘立柱建物が検出されている。



A 祝谷畠中遺跡3次調査

B 祝谷大地ヶ田遺跡8次調査

- | | | | |
|------------------|-------------|----------------|----------------|
| ① 土居窓遺跡 | ② 祝谷畠中遺跡 | ③ 祝谷畠中遺跡2次調査 | ④ 祝谷本村遺跡 |
| ⑤ 祝谷大地ヶ田遺跡1～9次調査 | ⑥ 祝谷丸山遺跡 | ⑦ 祝谷六丁場遺跡 | ⑧ 祝谷遺跡 |
| ⑨ 祝谷アイル遺跡 | ⑩ 御幸寺山古墳群 | ⑪ 祝谷古墳群 | ⑫ 濑戸風峠古墳群 |
| ⑬ 常信寺山古墳群 | ⑭ 桜谷古墳群 | ⑯ 湯之町廃寺 | ⑯ 湯之町廃寺 |
| ⑰ 道後鷺谷遺跡 | ⑮ 道後湯月町遺跡 | ⑯ 道後冠山遺跡 | ⑯ 道後冠山遺跡 |
| ㉑ 湯築城跡 | ㉒ 内代廃寺 | ㉗ 道後町遺跡 | ㉗ 岩崎遺跡 |
| ㉕ 持田町遺跡 | ㉖ 持田町三丁目遺跡 | ㉘ 持田本村遺跡 | ㉙ 道後今市遺跡9次調査 |
| ㉙ 道後今市遺跡10次調査 | ㉗ 道後城北RNB遺跡 | ㉙ 文京遺跡4次調査 | ㉙ 文京遺跡11次調査 |
| ㉩ 文京遺跡18次調査 | ㉘ 文京遺跡24次調査 | ㉚ 文京遺跡25次調査 | ㉚ 文京遺跡27次調査 |
| ㉛ 文京遺跡30次調査 | ㉙ 松山大学構内遺跡 | ㉙ 松山大学構内遺跡2次調査 | ㉛ 松山大学構内遺跡3次調査 |
| ㉛ 松山北高等学校遺跡 | ㉚ 東雲神社遺跡 | ㉛ 若草町遺跡1次調査 | ㉛ 若草町遺跡2次調査 |
| ㉕ 若草町遺跡3次調査 | | | |

第2図 周辺遺跡分布図

(6) 中世

鎌倉時代から戦国時代の伊予国の守護、河野氏の居城である湯築城は、中央部の丘陵部を中心として二重の濠と土塁で囲まれた平山城で、二重に巡らされた堀、土塁、礎石建物などが確認されている。文京遺跡18次・25次調査では自然流路埋没後に11世紀から13世紀にかけての水田址を3面確認した。道後今市遺跡9次調査では水田址のほか、13～14世紀を主体とする掘立柱建物も検出している。

表2 祝谷畠中遺跡・祝谷大地ヶ田遺跡の遺跡一覧

遺跡名	次数	種別	主な遺構等	主な遺物	主な時代
祝谷畠中遺跡	1次	集落	竪穴住居跡・大溝・土坑・柱穴	弥生土器・土製品・石器	弥生時代前期～中期
	2次	集落	溝・柱穴	土師器・須恵器・瓦器	古代
			溝	土師器・瓦器	古代末～中世
	3次	集落	竪穴建物・溝	弥生土器	弥生時代中期
			溝・土坑・鋤跡	土師器・陶磁器・瓦	中世～近世
祝谷大地ヶ田遺跡	1次	遺物堆積地	遺物包含層(2面)	弥生土器	弥生時代中期～古墳時代
	2次	集落	溝・性格不明遺構	弥生土器・土製品	弥生時代中期～古墳時代
	3次	集落	土坑(貯蔵穴44基)	弥生土器	弥生時代中期
		古墳	横穴式石室(祝谷6号墳)	須恵器・鉄製品・装飾品	古墳時代後期
	4次	集落	土坑(貯蔵穴82基)・溝・柱穴	弥生土器	弥生時代中期
		古墳	横穴式石室(祝谷7・8号墳)	須恵器・鉄製品・装飾品	古墳時代後期
	5次	集落	土坑(貯蔵穴43基)	弥生土器・土製品	弥生時代中期
		古墳	周濠(祝谷7号墳の一部)		古墳時代後期
	6次	集落	土坑(貯蔵穴185基)	弥生土器・石器	弥生時代中期
		古墳	前方後円墳(祝谷9号墳)	埴輪・装飾品	古墳時代中期・後期
	7次	集落	土坑(貯蔵穴58基)・柱穴	弥生土器・石器	弥生時代中期
		古墳	周濠(祝谷10号墳)		古墳時代後期
	8次	集落	貯蔵穴(1基)・土坑	弥生土器	弥生時代中期
		古墳	横穴式石室・周溝(祝谷11号墳)	須恵器・鉄製品・装飾品	古墳時代後期
	9次	集落	溝・土坑(貯蔵穴1基)	弥生土器・ガラス玉(約40点)	弥生時代中期
			溝・性格不明遺構	土師器・須恵器	古墳時代中期～後期 古代～中世

【参考文献】

- 長井 数秋 1986 「丸山遺跡」『愛媛県史 資料編考古』愛媛県史編さん委員会
- 吉田 広ほか 2004 『文京遺跡 24 次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2001・2002年度－愛媛大学埋蔵文化財調査報告 XI
- 宮本 一夫 1990 『文京遺跡第8・9・11次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査報告 II
- 吉田 広ほか 2005 『文京遺跡 27 次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2003年度－愛媛大学埋蔵文化財調査報告 XIII
- 宮内 慎一 2014 「道後城北 RNB 遺跡」『道後城北遺跡群Ⅲ』松山市埋蔵文化財調査報告書第 169 集
- 宮内 慎一 2022 『持田本村遺跡』松山市文化財調査報告書第 210 集
- 真鍋 昭文ほか 1995 『持田町 3 丁目遺跡』愛媛県埋蔵文化財発掘調査報告書第 58 集
- 多田 仁ほか 1994 『道後今市遺跡 X』愛媛県埋蔵文化財発掘調査報告書第 53 集
- 岡本 健児 1961 「愛媛県土居窪遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編
- 宮内 慎一 1999 『岩崎遺跡』松山市文化財調査報告書第 71 集
- 宮崎 泰好 1991 『祝谷六丁場遺跡』松山市文化財調査報告書第 24 集
- 真鍋 昭文 2002 『土居窪遺跡 2 次・祝谷畠中遺跡・祝谷本村遺跡 2 次』愛媛県埋蔵文化財発掘調査報告書第 101 集
- 梅木 謙一 2001 『東雲神社遺跡』松山市文化財調査報告書第 79 集
- 真鍋 昭文ほか 1995 『愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書 2』愛媛県埋蔵文化財発掘調査報告書第 55 集
- 宮内 慎一 1995 『松山大学構内遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書第 49 集
- 梅木 謙一 1991 『松山大学構内遺跡』松山市文化財調査報告書第 20 集
- 長井 数秋ほか 1992 『松山市史 第 1 卷』松山市史料集編集委員会
- 吉岡 和哉ほか 2014 「祝谷大地ヶ田遺跡 4 次調査」松山市文化財調査年報 26
- 小笠原 善治 2017 「祝谷大地ヶ田遺跡 5・6・7 次調査」松山市文化財調査年報 29
- 森 光晴 1980 「祝谷古墳の発展経過と遺構」『松山市史料集 第一巻考古編』松山市
- 作田 一耕 2024 『祝谷 9 号墳』松山市文化財調査報告書第 213 集
- 吉本 拡 1986 「湯之町廃寺」「内代廃寺」『愛媛県史 資料編考古』
- 宮内 慎一 2008 『道後湯月町遺跡・道後湯之町遺跡』松山市埋蔵文化財調査報告書第 123 集
- 中野 良一 1998 『湯築城跡』愛媛県埋蔵文化財発掘調査報告書第 66 集
- 吉田 広 2009 『文京遺跡 VI - 文京遺跡 25 次調査 -』愛媛大学埋蔵文化財調査報告 XX
- 田崎 博之 2007 『文京遺跡 V - 文京遺跡 18 次調査報告 -』愛媛大学埋蔵文化財調査報告 XVI
- 梅木 謙一 1994 「道後今市遺跡 9 次調査」『道後城北遺跡群Ⅱ』松山市文化財調査報告書第 37 集

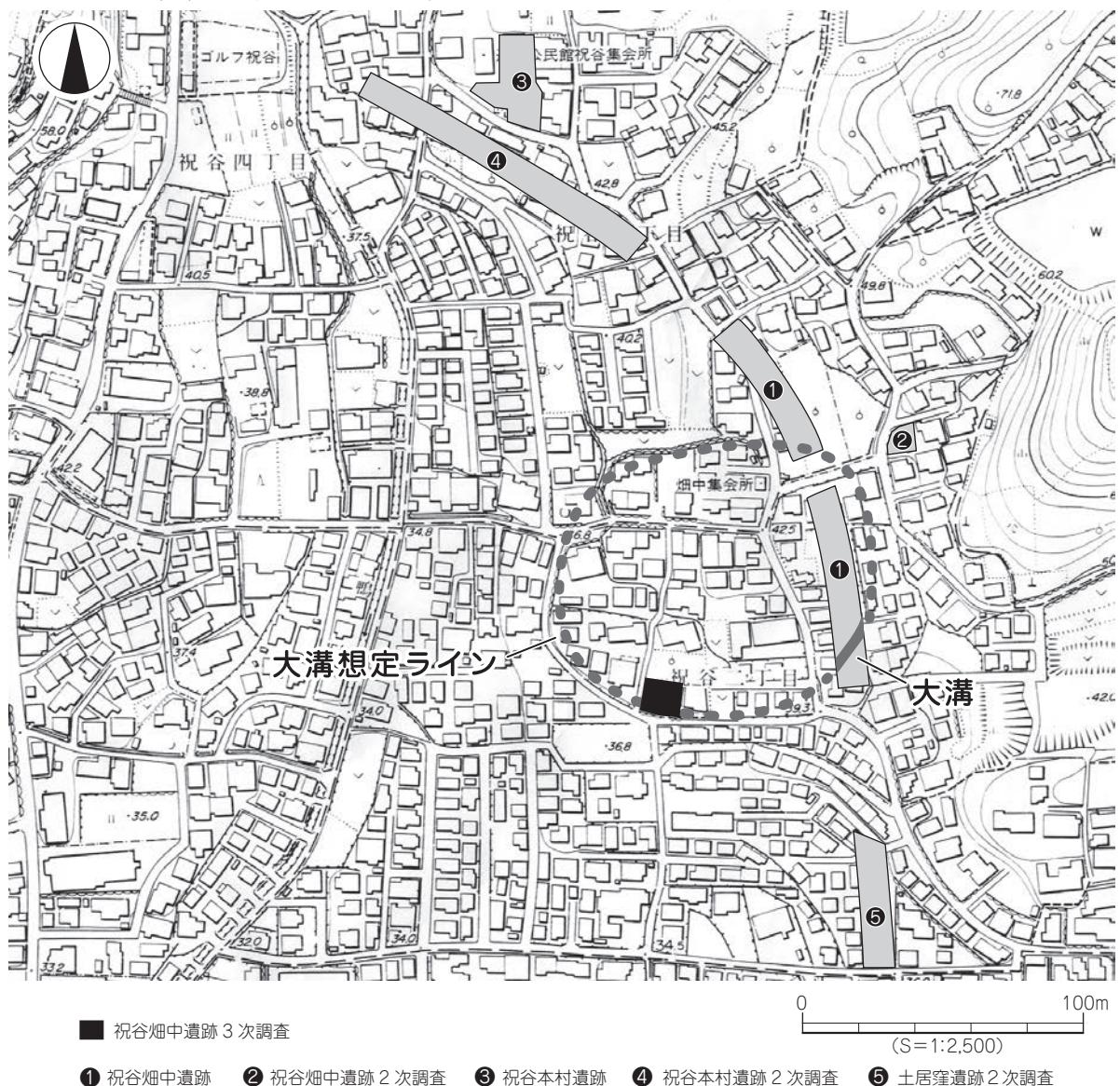
第3章 祝谷畠中遺跡3次調査

第1節 調査の経緯

2015（平成27）年1月19日より、屋外調査を開始した。調査地は東西に長い形状をなし、調査対象範囲は調査地の中央から北側部分の約90m²であり、北側を廃土置場とした。また、調査区は2地区（1区・2区）に分け実施した（第4図）。以下、調査工程を略記する。

1月19日（月）：本日より屋外調査を開始する。発掘機材（水中ポンプ・発電機など）の搬入を行い、防護柵の設置や調査区の設定を行う。1区西側より重機にて表土掘削を開始する。

1月20日（火）：重機にて調査区の表土掘削を行い、同日終了する。



第3図 祝谷畠中遺跡3次調査周辺遺跡分布図

祝谷畠中遺跡 3 次調査

- 1月 21 日（水）：床面を精査し、遺構を検出する。遺構の検出状況の写真撮影を行い、遺構の掘り下げを開始する。
- 1月 22 日（木）：委託業者による世界測地系に基づく基準点の設置を行い、調査区にグリッド杭を設置する。
- 1月 23 日（金）：遺構断面や遺構平面などの測量を開始する。
- 1月 27 日（火）：遺構の掘り下げを終了し、遺構の完掘状況の写真撮影を行う。
- 1月 28 日（水）：遺構の測量を終了する。
- 1月 29 日（木）：重機による調査区の埋戻しを行い、同日終了する。
- 1月 30 日（金）：発掘機材の搬出を行い、本日にて屋外調査を終了する。
- 2月 2 日（月）：本日より、埋蔵文化財センターにて出土遺物の洗浄・復元作業、及び図面・写真類の整理作業を開始し、調査概要報告書の作成を行う。

調査名：祝谷畠中遺跡 3 次調査

調査場所：松山市祝谷二丁目 142 番 1、142 番 2

調査面積：約 90m²

調査期間：2015（平成 27）年 1 月 19 日（月）～同年 1 月 30 日（金）

調査担当：公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター 河野 史知



第 4 図 調査区配置図

第2節 層 位 (第5・6図、図版2)

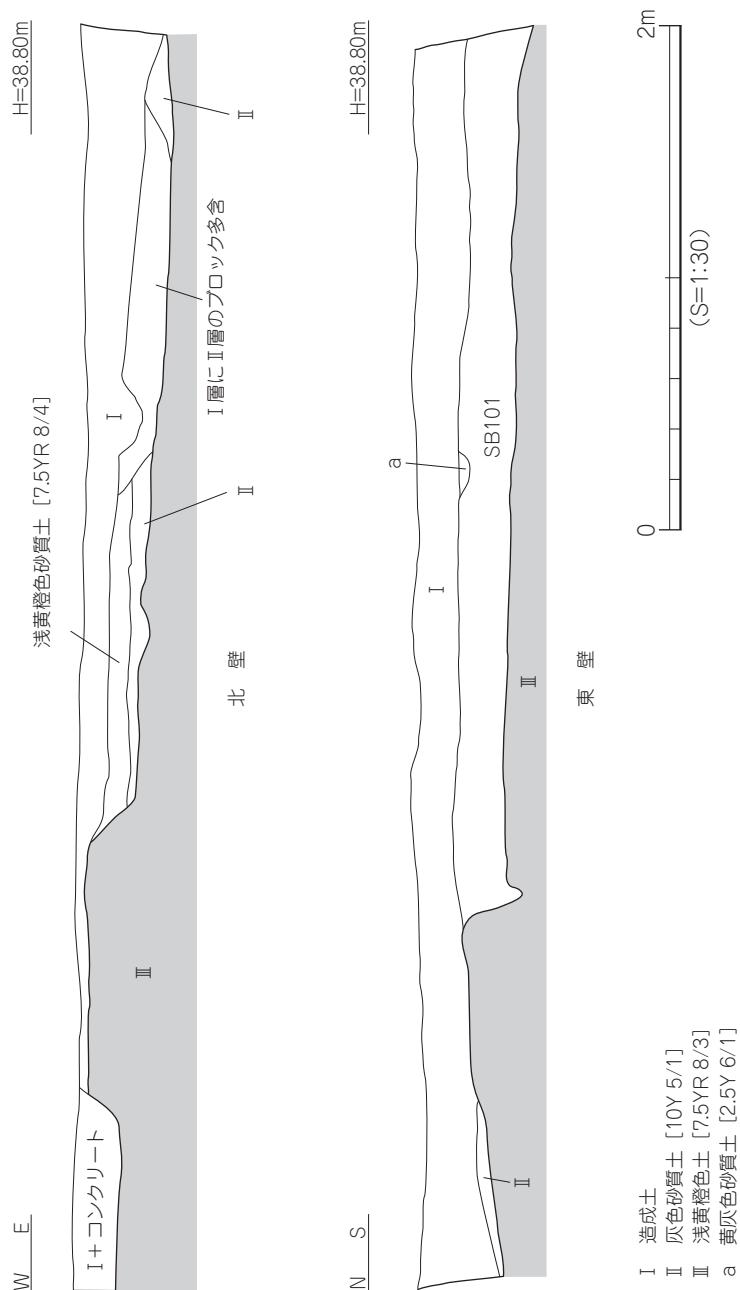
調査地は、扇状地上の標高38.6mに位置している。調査以前は宅地として利用されていた。調査で確認した土層は、以下の3種類（I～III層）である。

第I層：造成土で、調査区全域に堆積し、層厚4～32cmを測る。

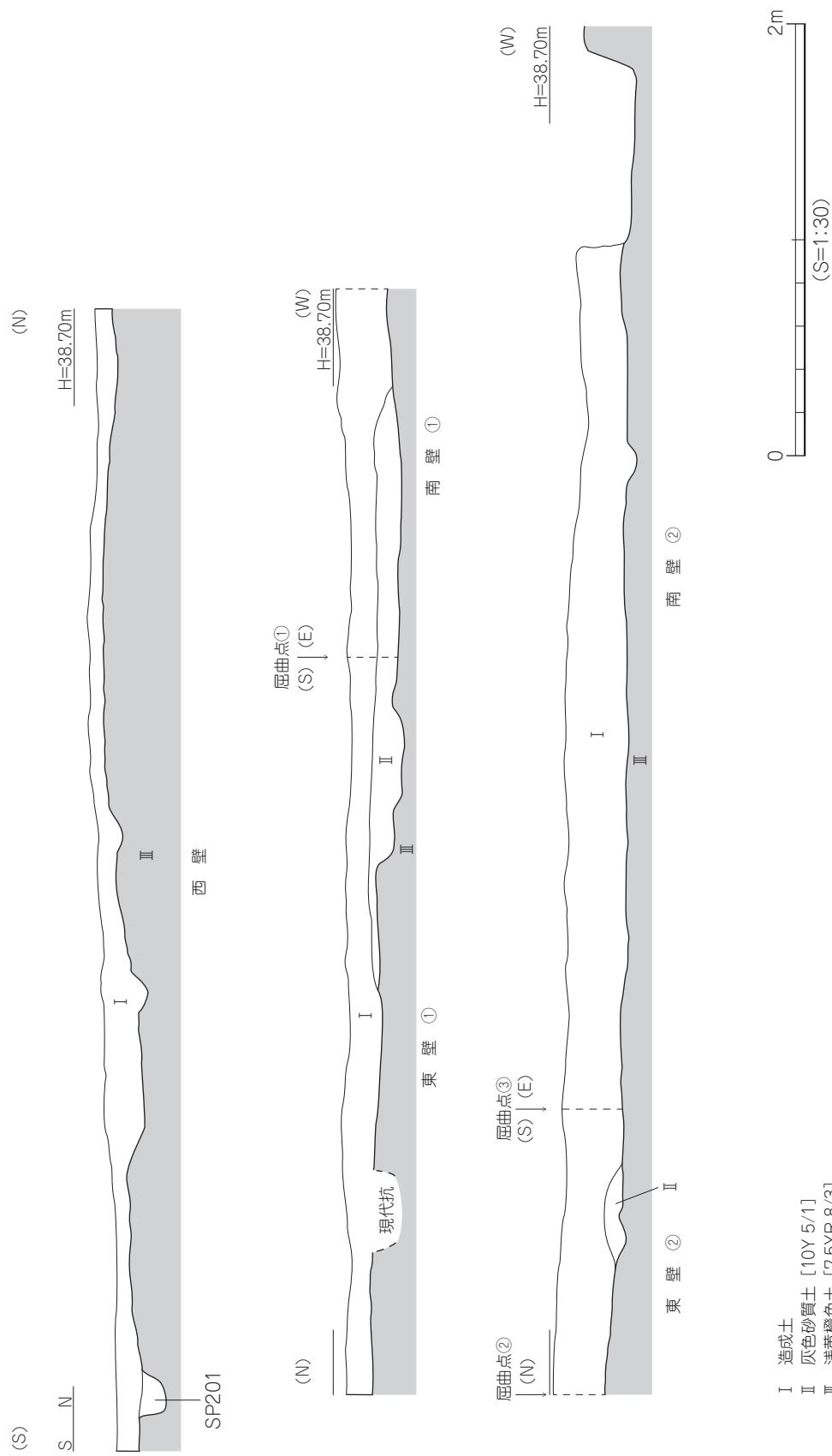
第II層：灰色砂質土 [10Y 5/1] で、1区の東壁端・2区の東南隅に層厚2～16cmを測る。

第III層：浅黄橙色土 [7.5YR 8/3] で、この上面にて遺構を検出した。調査区全域に堆積する。

なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へ向けてA・B、東から西に向けて1・2・3・4とし、A1・A2・…・B4区といったグリッド名を付した（第7図）。



第5図 1区東壁・北壁土層図



第6図 2区西壁・東壁・南壁土層図

層 位



第7図 遺構配置図

第3節 遺構と遺物

調査では、弥生時代から中世までの遺構と遺物を検出した。検出した遺構は、堅穴建物 1 棟、溝 5 条、土坑 2 基、柱穴 13 基、鋤跡 2 条である。遺物は弥生土器、土師器、陶器が出土した。なお、遺物の出土量は遺物収納箱 ($44 \times 60 \times 7\text{cm}$) 1 箱分である。ここでは、時代毎の遺構別に説明する。

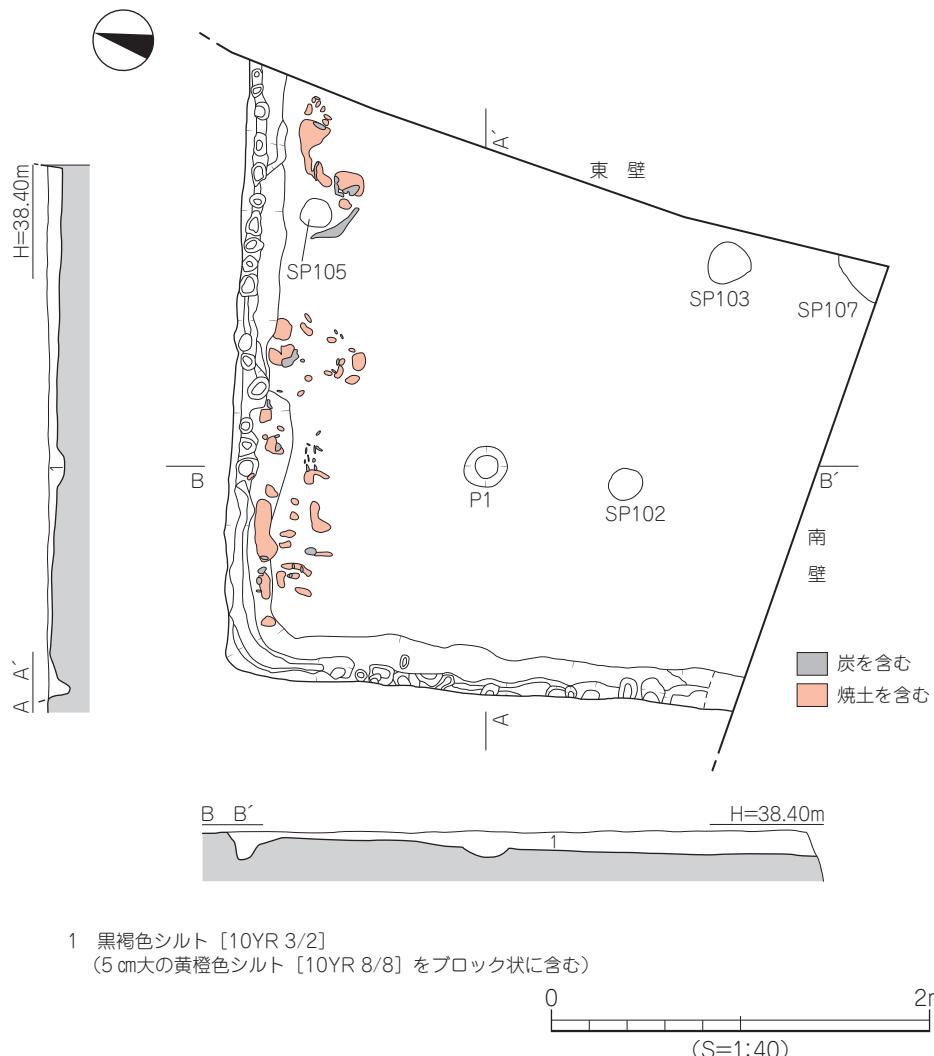
1. 1 区の調査

堅穴建物 1 棟、溝 3 条、土坑 1 基、柱穴 7 基を第Ⅲ層上面にて検出した。

(1) 堅穴建物

SB 101 (第 8 図、図版 3・4)

1 区東南部の A1 ~ B2 区に位置する。建物北側は SK101 と重複し、SB101 が先行する。東・南端は調査区外に延びる。平面形態は方形を呈する。検出規模は東西 3.23 m、南北 2.70m、深さ 14cm を測るが、周辺の土層観察より本来の東西規模は 4.70 m と推測する。主柱穴は西北部の 1 本 (P1) を



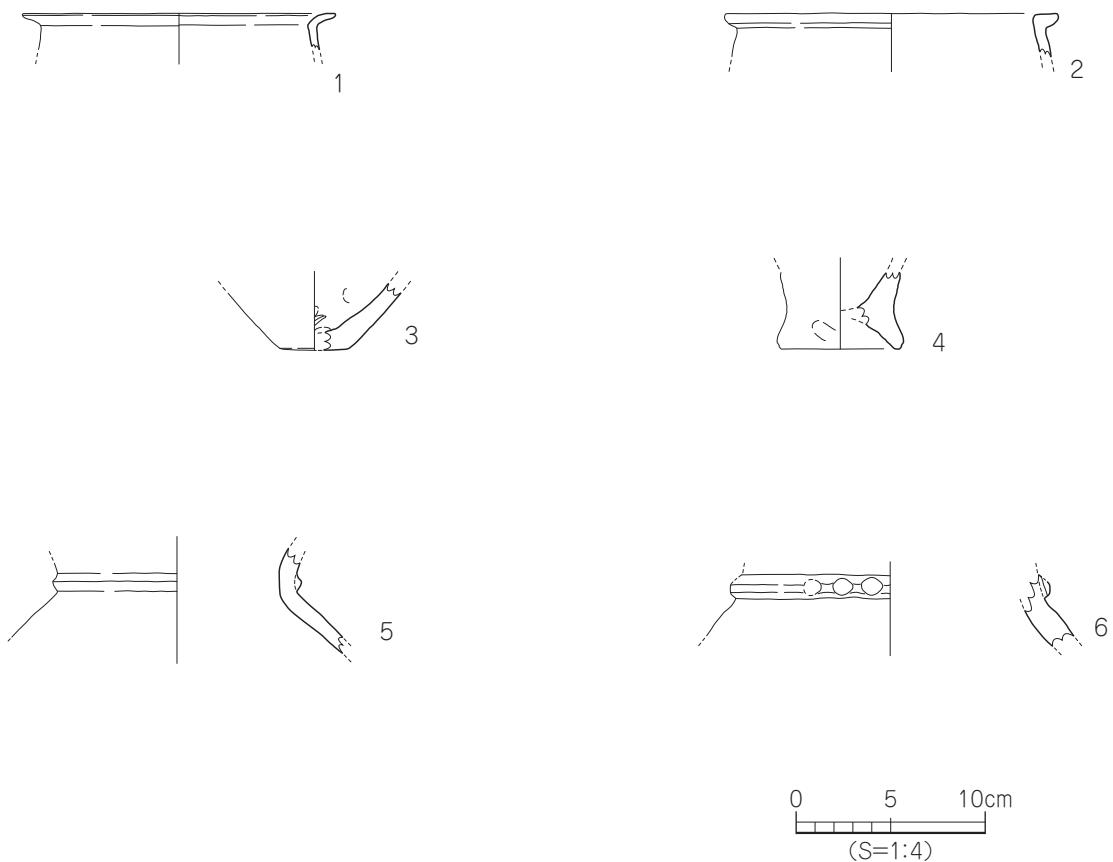
第 8 図 SB101 測量図

検出した。P1 の平面形態は円形で、規模は直径 20.4cm で床面よりの深さ 5cm を測る。内部施設は、周壁溝、貼り床を検出した。周壁溝は壁体に沿ってほぼ全周しており、幅 0.17 ~ 0.28 m、深さ 7 ~ 13cm を測る。この周壁溝を形成する多数の小穴の基底部は垂直よりも、やや外方に傾斜が見られ、周壁溝の内側にはやや内傾する面をもつ。床面全体には貼り床を伴っており、建物内の埋土は黒褐色シルト [10YR 3/2] である。北側の床面や周壁溝内には焼土に炭化材を含んだ層が部分的にみられる。遺物は北側の床面直上から弥生土器の甕・壺の破片が出土した。

出土遺物（第9図、図版6）

1 ~ 6 は弥生土器である。1 ~ 4 は甕で、1 の口縁部は大きく外反する。2 の口縁部は外方に拡張され平らな面をもち、内外面ともにナデ調整が施される。4 は上げ底で括れをもち、内外面ともにナデ調整が施され、括れ部に指頭痕が残る。3 は平底の底部から内湾気味に立ち上がり、内面にナデ調整が施される。5・6 は壺の頸部付近で、5 は断面三角形状の貼付凸帯が巡る。6 は貼付凸帯に押圧文が施される。

時期：出土した弥生土器の特徴から弥生時代中期中葉頃とする。



第9図 SB101 出土遺物実測図

(2) 溝

SD 101 (第 10 図、図版 4)

1 区西側の A2 ~ B2 区に位置する。東端は SB101 と重複し、SD101 が後出し、西端は調査区外に延びる。南東方向から北西方向の N-60° -W を指向し、SD102 の北側に並行する。規模は検出長 2.00 m、幅 0.68 ~ 0.93 m、深さ 2 ~ 10cm を測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐灰色シルト [10YR 6/1] である。溝床の比高差は殆どない。遺物は土師器の小片が僅かに出土した。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土が SD102 と同一なことから中世とする。

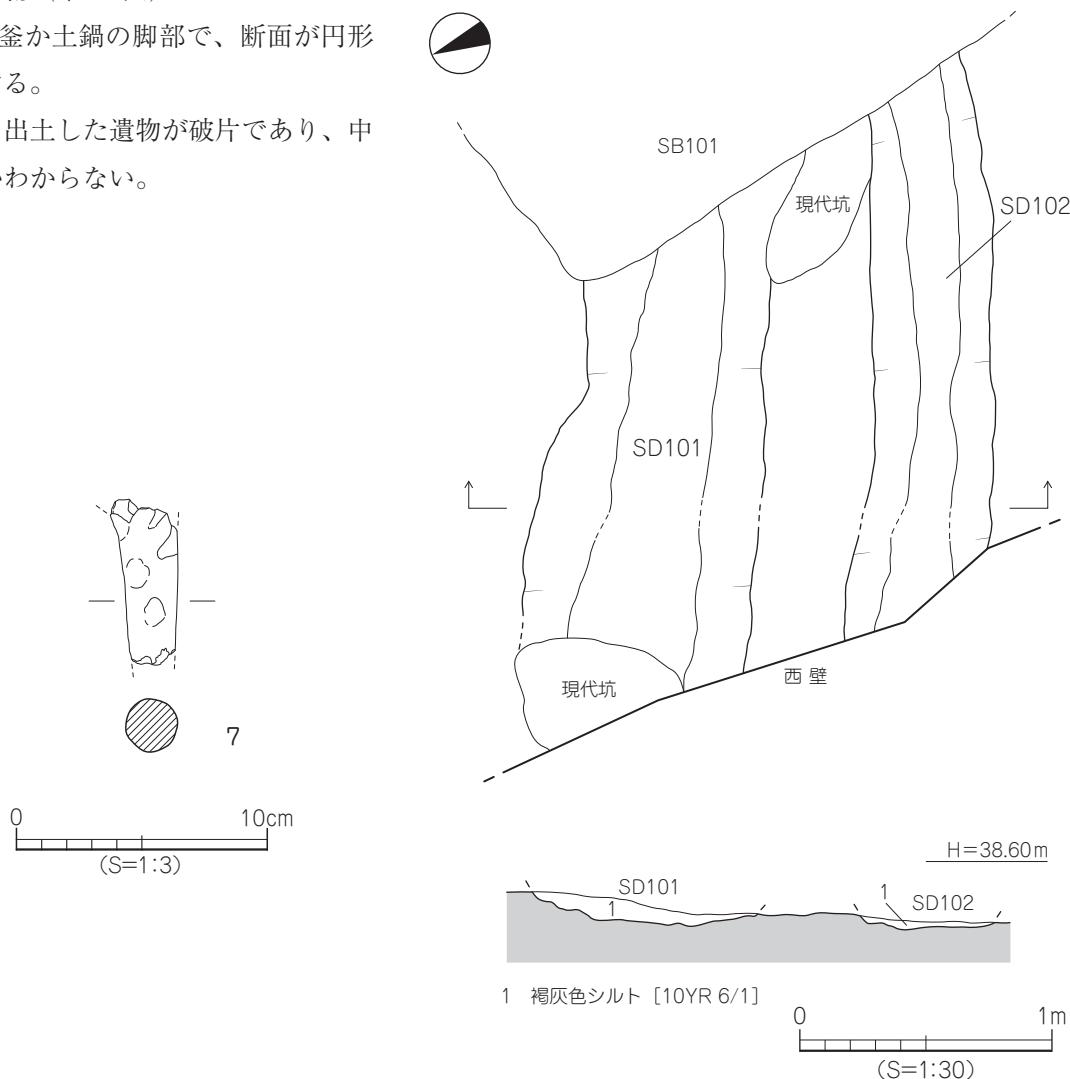
SD 102 (第 10 図、図版 4)

1 区西側の B2 区に位置する。東端は SB101 と重複し、SD102 が後出し、西端は調査区外に延びる。南東方向から北西方向の N-70° -W を指向し、SD101 の南側に並行する。規模は検出長 2.10 m、幅 0.43 ~ 0.53 m、深さ 2 ~ 3cm を測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐灰色シルト [10YR 6/1] である。溝床の比高差は、西から東へ 5cm 傾斜する。遺物は土師器片が出土した。

出土遺物 (第 10 図)

7 は土釜か土鍋の脚部で、断面が円形状を呈する。

時期：出土した遺物が破片であり、中世としかわからない。



第 10 図 SD101・102 測量図・出土遺物実測図

SD 103 (第 11 図、図版 4)

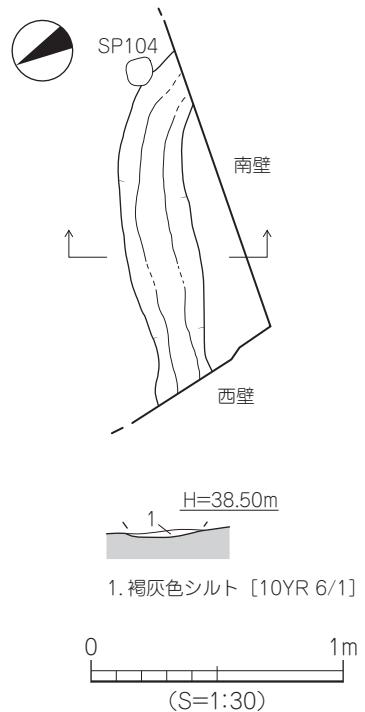
1 区西南隅の B2 区に位置し、東西端は調査区外に延びる。南東方向から北西方向の N-70°-W を指向し、東端は南に湾曲する。規模は検出長 1.30 m、幅 0.21 ~ 0.28 m、深さ 2cm を測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐灰色シルト [10YR 6/1] である。溝床の比高差はない。出土遺物はない。

時期：埋土が SD102 と同一なことから中世とする。

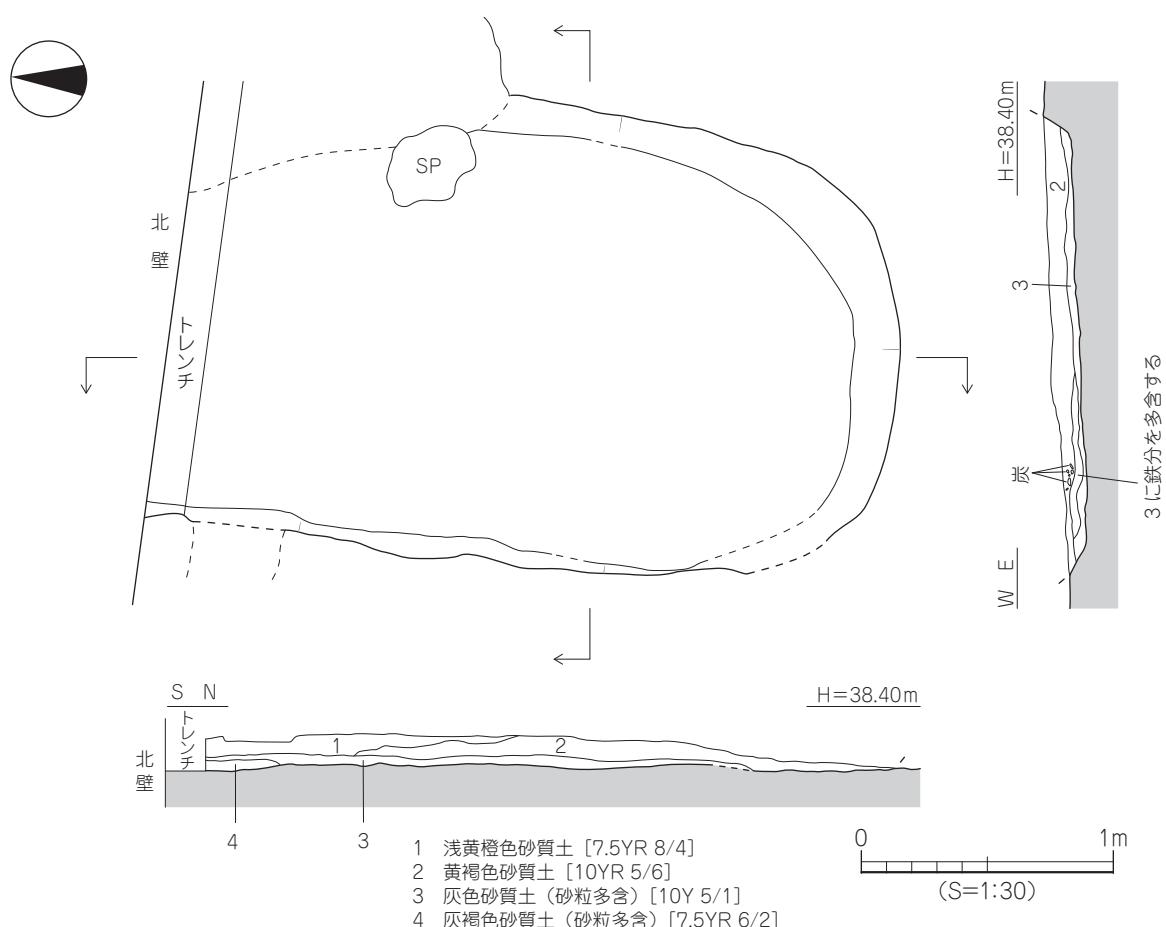
(3) 土坑

SK101 (第 12 図、図版 3・4)

1 区中央部北側の A1 ~ B2 区に位置する。重複する SB101 に後出し、北側は調査区外に延びる。平面形態は橢円形、断面形態は逆台形状を呈し、基底面は平坦である。規模は長軸 2.90m、短軸 1.84m、深さ 12cm を測る。埋土は四層に分かれ、上層が浅黄橙色砂質土 [7.5YR 8/4]、中層は黄褐色砂質土 [10YR 5/6]、下層は灰色砂質土 [10YR 5/1]、最下層は灰褐色砂質土 [7.5YR 6/2] である。出土遺物は弥生土器・土師器・陶器・磁器・瓦・貝殻の小片が少量出土した。



第 11 図 SD103 測量図

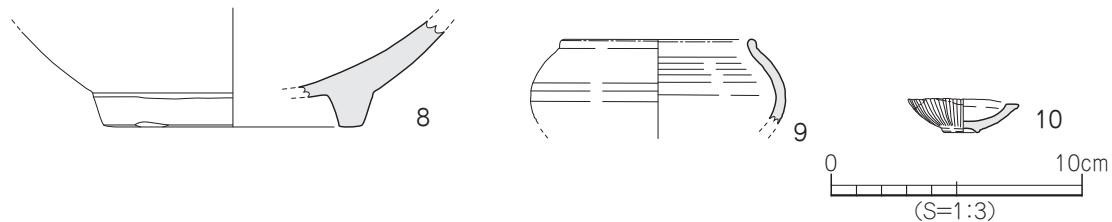


第 12 図 SK101 測量図

出土遺物（第 13 図、図版 6）

8 は陶器鉢の底部で、断面逆台形状の削り出し高台をもち、高台内と畳付きを除いた内外面に施釉が施される。9 は陶器の土瓶。内湾する上胴部に口縁端部は上方に短く延び、丸く納まる。口縁端部を除いた内外面は施釉される。10 は白磁皿のミニチュアである。

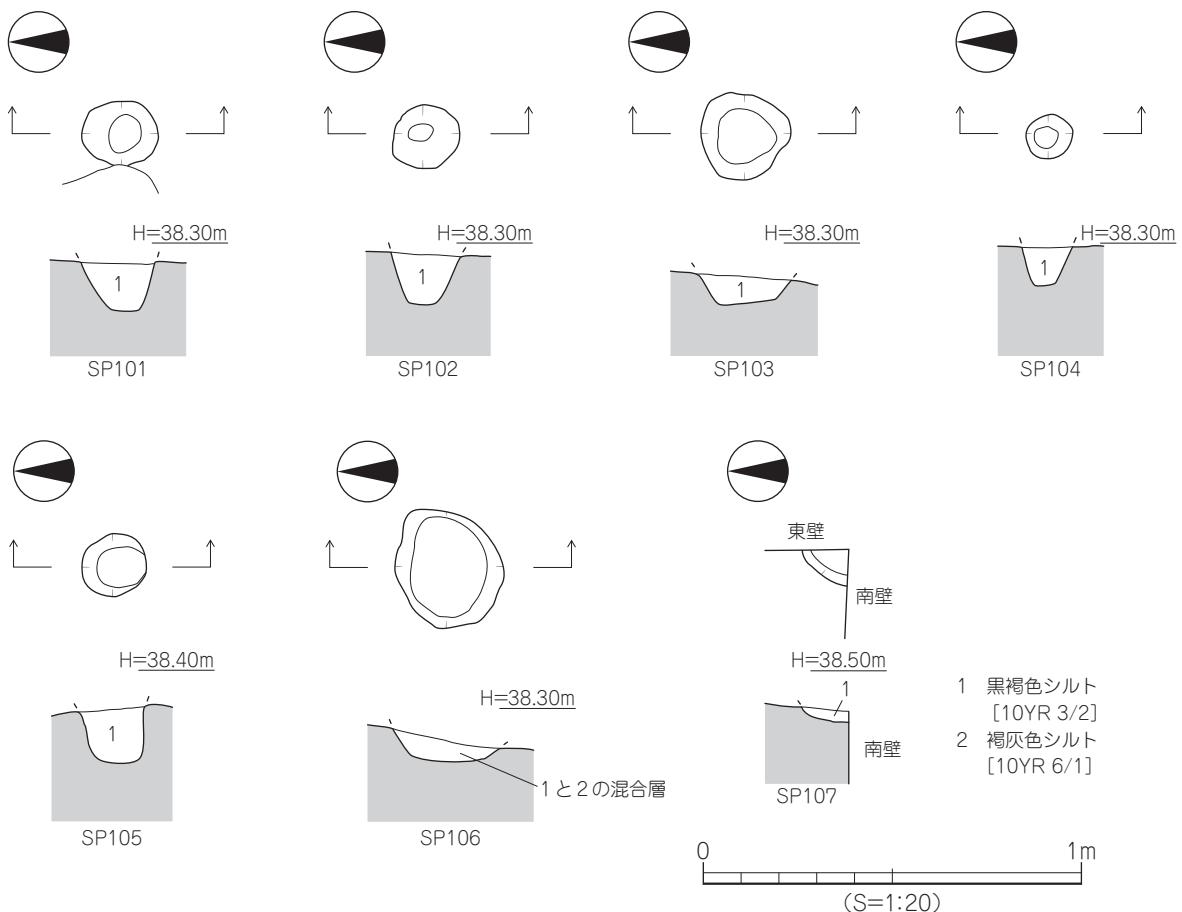
時期：出土した陶磁器から概ね近世とする。



第 13 図 SK101 出土遺物実測図

(3) 柱穴（第 14 図）

7 基の柱穴（SP101～107）を検出した。平面形態は円形～橢円形を呈しており、規模は直径 0.12 ～ 0.32 m、深さ 3 ～ 14cm を測る。埋土は黒褐色シルト [10YR 3/2] と褐灰色シルト [10YR 6/1] がある。柱穴内からの遺物は弥生土器の小片が僅かに出土した。



第 14 図 柱穴測量図（1 区）

2. 2区の調査

溝4条、土坑1基、柱穴6基を第II層上面にて検出した。

(1) 溝

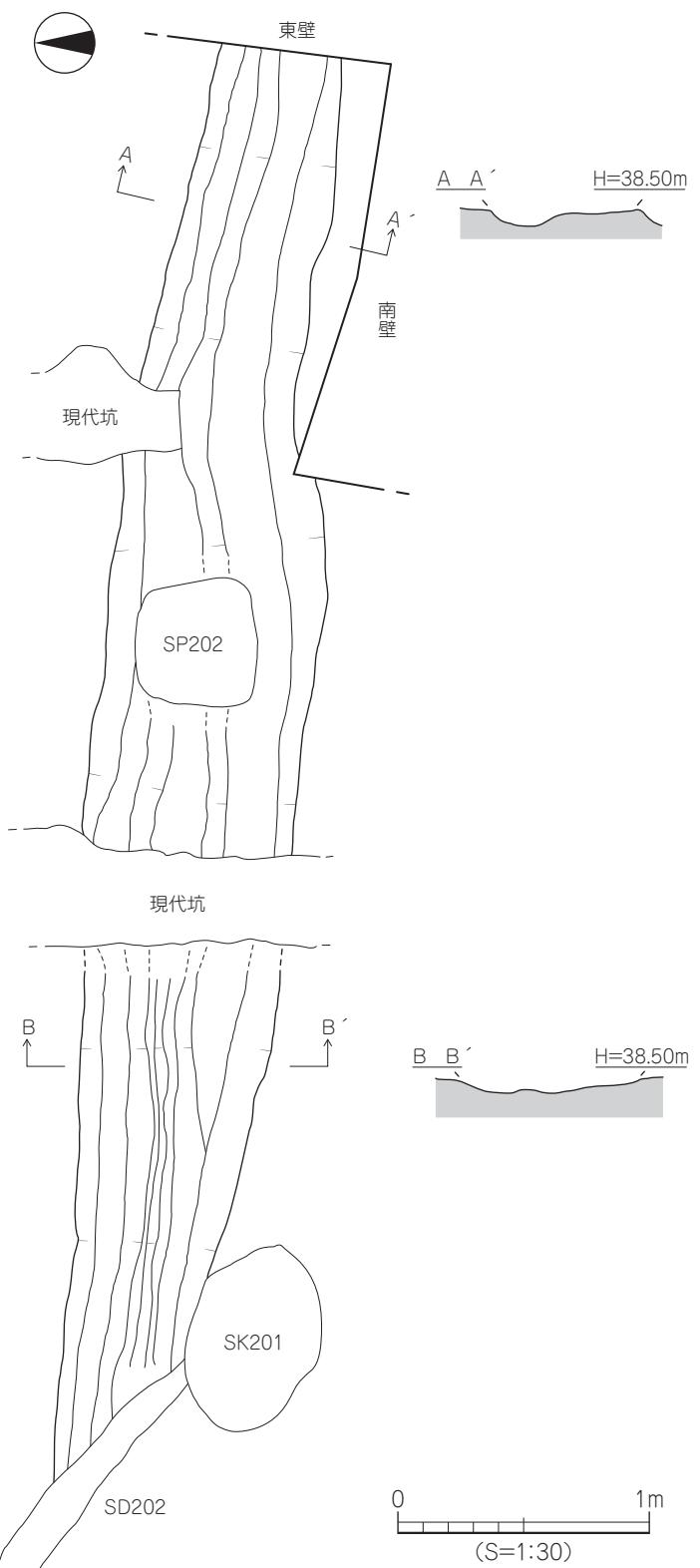
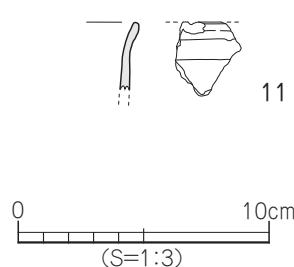
SD 201 (第15図、図版5)

2区中央部のA2～B3に位置する。SD202・SP202と重複し、SD202に後出し、SP202に先行する。東端は調査区外に延びる。東方向から西方向のN-83°-Wを指向する。規模は検出長5.76m、幅0.50～0.83m、深さ3～5cmを測る。溝の断面形態は逆凸レンズ状を呈し、埋土は褐灰色シルト[10YR 6/1]である。溝床の比高差は、西から東へ3cm傾斜する。遺物は土師器・陶器・磁器の小片が僅かに出土した。

出土遺物

11は陶器碗の口縁部で、やや外反し、内外面に施釉がある。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土がSD102と同一なことから中世とする。

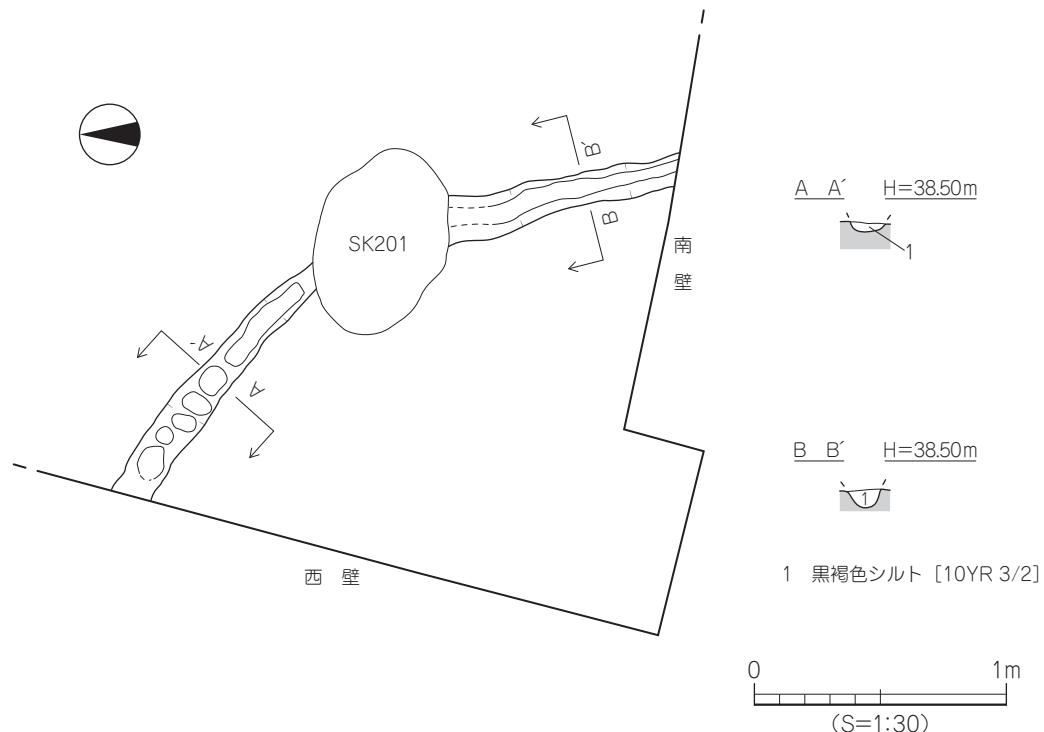


第15図 SD201測量図・出土遺物実測図

SD 202 (第 16 図、図版 5)

2 区西南端の A3 ~ B3 区に位置する。重複する SK201 に先行し、東西端は調査区外に延びる。弧状に湾曲しており、断面形態は U 字状を呈する。溝の規模は検出長 2.65 m、上場幅 0.09 ~ 0.16 m、深さ 3 ~ 6cm を測り、溝床の比高差は殆どない。埋土は黒褐色シルト [10YR 3/2] で、遺物は弥生土器の小片が少量出土した。

時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土が SB101 と同一なことから弥生時代中期中葉とする。



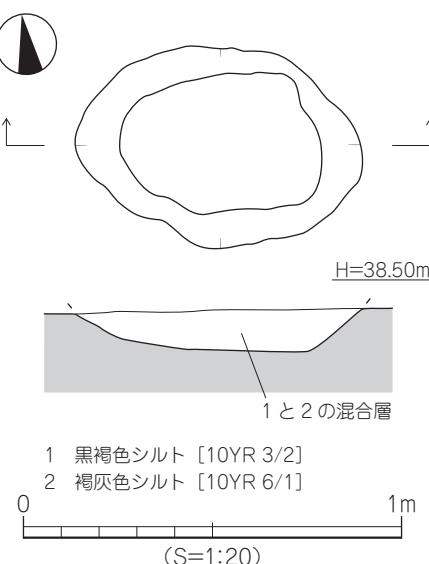
第 16 図 SD202 測量図

(2) 土坑

SK 201 (第 17 図、図版 5)

2 区西南部の A3 ~ B3 区に位置し、重複する SD 202 に後出する。平面形態は橢円形、断面形態は皿状を呈し、基底面は平坦である。規模は長軸 0.75m、短軸 0.53m、深さ 11cm を測る。埋土は黒褐色シルト [10YR 3/2] と褐灰色シルト [10YR 6/1] の混合層である。土坑内からは弥生土器・土師器の小片が僅かに出土した。

時期：出土した遺物が小片であり、中世以降としかわからない。



第 17 図 SK201 測量図

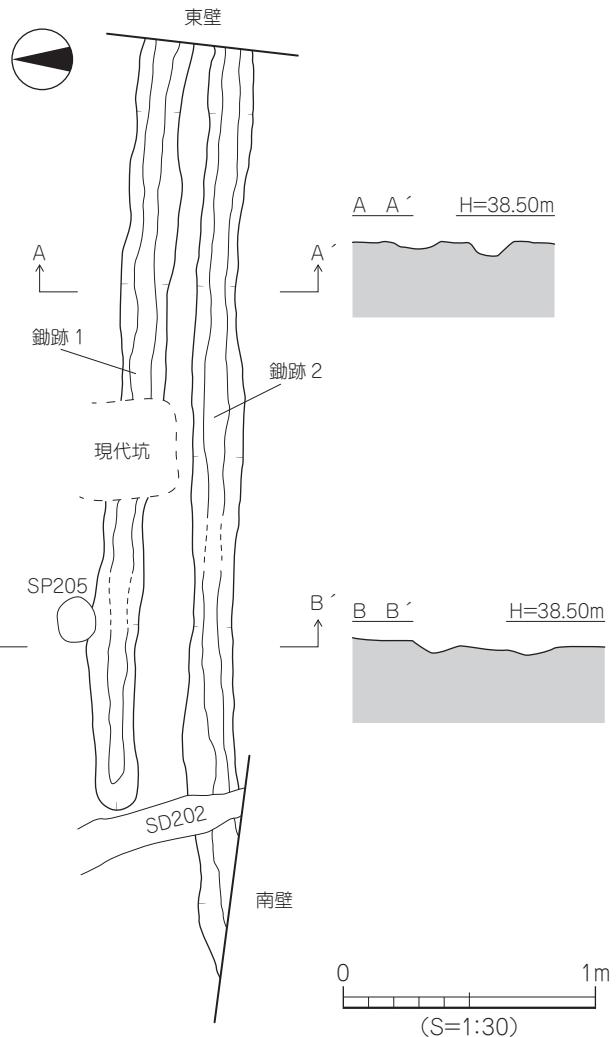
(3) 鋤跡 (第 18 図、図版 5)

2 区南側の B3 区に位置する。鋤跡 2 は SD202 と重複し、鋤跡 2 が後出し、東端は調査区外に延びる。鋤跡 1・2 とも東西方向に並行しており、N-83°-W を指向する。鋤跡 1 は東端が調査区外に延びており、規模は検出長 3.08 m、幅 0.16 ~ 0.22 m、深さ 3 ~ 5cm を測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐灰色シルト [10YR 6/1] である。遺物は土師器の小片が僅かに出土した。鋤跡 2 は東西端は調査区外に延びており、規模は検出長 3.70 m、幅 0.16 ~ 0.22 m、深さ 3 ~ 5cm を測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐灰色シルト [10YR 6/1] である。遺物は土師器の小片が僅かに出土した。

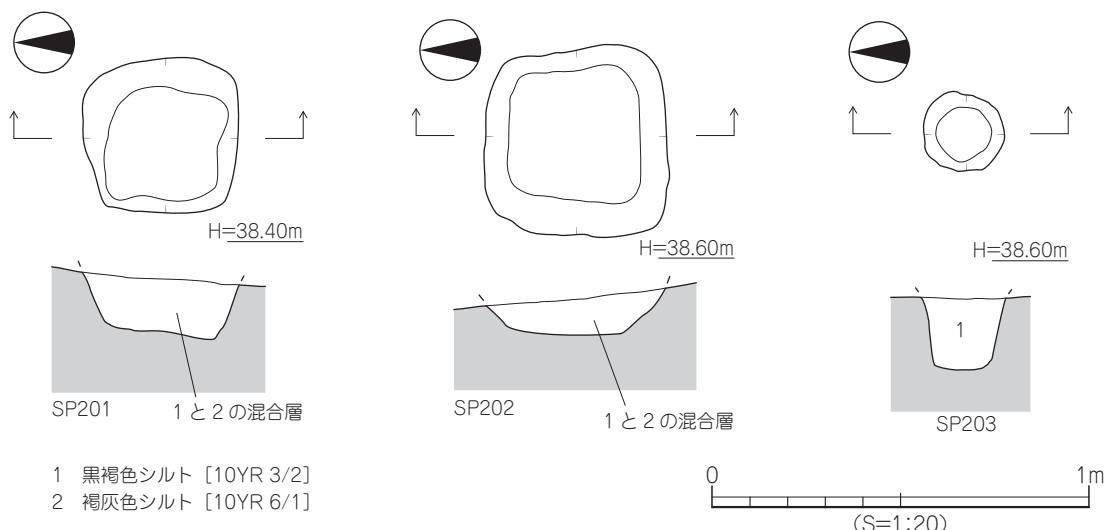
時期：時期決定しうる遺物に乏しく、埋土が SD102 と同一なことから中世とする。

(4) 柱穴 (第 19・20 図)

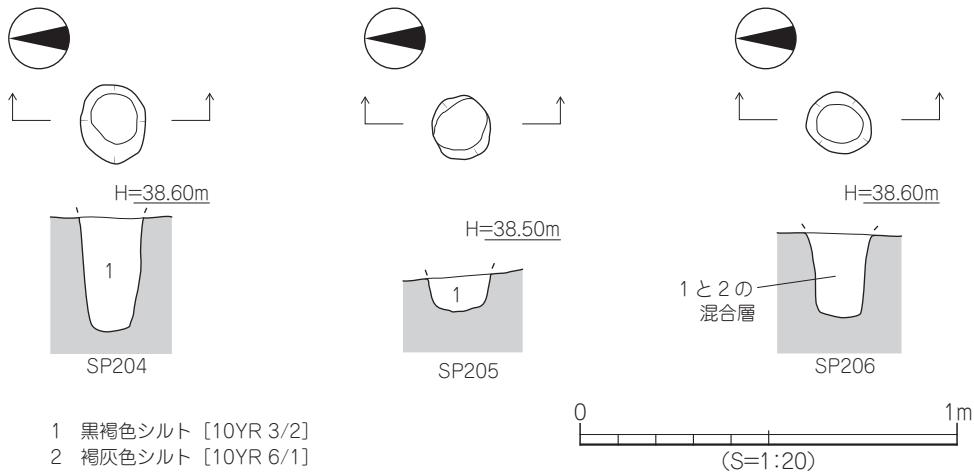
6 基の柱穴 (SP201 ~ 206) を検出した。平面形態は円形～隅丸方形を呈しており、規模は直径 0.15 ~ 0.51 m、深さ 9 ~ 30cm を測る。埋土は黒褐色シルト [10YR 3/2] と褐灰色シルト [10YR 6/1] がある。柱穴内からの遺物は弥生土器や陶器の小片が僅かに出土した。



第 18 図 鋤跡測量図



第 19 図 柱穴測量図 (2 区) (1)



第 20 図 柱穴測量図 (2 区) (2)

第 4 節 小 結

今回の調査は、弥生時代から中世にかけての集落の範囲や構造の解明を主目的として行った。調査の結果、弥生時代から近世の遺構や遺物を確認した。以下、内容を説明する。

(1) 地形

本調査地は扇状地上の緩斜面に立地しており、遺構の検出面は後世の削平によりほぼ平らな面を呈しているが、調査地の南側では北から南へ緩傾斜している。北東約 80 m に位置する畠中遺跡で弥生時代前期末から中期初頭に掘られ中期中葉に埋め戻された大溝がある。この大溝は周辺の地形などから範囲が東西約 120 m、南北約 100 m と推定され、本調査地はこの大溝に囲まれた南縁辺部に位置することが想定されている。

(2) 弥生時代

竪穴建物、溝、土坑、柱穴などを検出し、周辺遺跡で見つかっている丘陵上に展開する集落が当地にまで展開していることが確認できた。SB101 は周壁溝を伴う構造で、その周壁の杭は建物の外側にやや傾斜して打ち込まれていた。また、北壁部分を中心に床面から検出された焼土や炭化材からは、建物内が焼けた痕跡と推定できる。SD202 はその形状や溝の南側の検出面がやや平らなことから、円形の竪穴建物の可能性をもつ。調査地から北東約 80 m の畠中遺跡では弥生時代前期末から中期中葉にかけての大溝が検出されている。この大溝は南に接する道路の下を巡っていることが想定されており、大溝で囲まれる集落推定エリアでも地形の低い南端部分であり、竪穴建物は集落の縁辺部に位置していたことがわかった。

(3) 中世以降

溝や鋤跡は、緩やかに傾斜する地形ラインに沿う様に東西方向に延びている。これらは傾斜面における農耕の痕跡を示すもので、調査地周辺の中世の農村集落の構造を考える上で貴重な資料である。

今回の調査では、弥生時代と中世の集落跡を検出し、当時の集落構造を解明する資料が得られ、これらは石手川中流域北岸の微高地上に展開する集落範囲や構造を考える上で貴重な資料となるものである。

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地区欄 グリッド名を記載。

規模欄 () は現存値を示す。

出土遺物欄 遺物名称を略記した。

例) 弥→弥生土器、土→土師器、陶→陶磁器

(2) 遺物観察表

法量欄 () : 復元推定値

胎土欄 胎土欄は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤色土粒→赤色酸化土粒

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~3) → 「1~3mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について

◎→ 良好 ○→ 良

表3 壁穴建物一覧

壁穴(SB)	区	地区	平面形	規模 長径×短径×壁高(m)	埋土	内部施設	出土遺物	時期	備考
101	1	A1~B2	方形	(3.23) × (2.70) × 0.14	黒褐色シルト	周壁溝・貼り床	弥	弥生時代中期中葉	東・南側は調査区外に延びる

表4 溝一覧

溝(SD)	区	地区	断面	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
101	1	A2~B2	レンズ状	(2.00) × 0.68~0.93 × 0.02~0.10	褐灰色シルト	土	中世	西端は調査区外に延びる
102	1	B2	レンズ状	(2.10) × 0.43~0.53 × 0.02~0.03	褐灰色シルト	土	中世	西端は調査区外に延びる
103	1	B2	レンズ状	(1.30) × 0.21~0.28 × 0.02	褐灰色シルト	なし	中世	東西端は調査区外に延びる
201	2	A2~B3	逆凸レンズ状	5.76 × 0.50~0.83 × 0.03~0.05	褐灰色シルト	土・陶	中世	東端は調査区外に延びる
202	2	A3~B3	U字状	(2.65) × 0.09~0.16 × 0.03~0.06	黒褐色シルト	弥	弥生時代中期中葉	両端は調査区外に延びる

表5 土坑一覧

土坑(SK)	区	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
101	1	A1~B2	楕円形	逆台形状	(2.90) × 1.84 × 0.12	浅黄橙色砂質土ほか	弥・土・陶・瓦・貝	近世	北端は調査区外に延びる
201	2	A3~B3	楕円形	皿状	0.75 × 0.53 × 0.11	黒褐色シルトと褐灰色シルトの混合層	弥・土	中世以降	SD202を切る

表6 柱穴一覧

(1)

柱穴(SP)	区	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
101	1	A1	楕円形	逆台形状	0.20 × 0.17 × 0.13	黒褐色シルト	なし		
102	1	B1	円形	逆台形状	0.18 × 0.17 × 0.13	黒褐色シルト	弥	SB101に切られる	
103	1	B1	楕円形	逆台形状	0.24 × 0.22 × 0.08	黒褐色シルト	なし	SB101に切られる	
104	1	B2	円形	逆台形状	0.13 × 0.12 × 0.10	黒褐色シルト	弥		
105	1	A・B1	円形	方形状	0.17 × 0.16 × 0.14	黒褐色シルト	なし	SB101に切られる	

祝谷畠中遺跡 3 次調査

柱穴一覧

(2)

柱穴 (S P)	区	地区	平面形	断面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	備 考
106	1	A1	楕円形	皿状	0.32 × 0.29 × 0.06	黒褐色シルトと褐灰色シルトの混合層	なし	
107	1	B1	楕円形?	皿状	(0.12) × (0.09) × 0.03	黒褐色シルト	なし	SB101に切られ、東南部は調査区外に延びる
201	2	B4	隅丸方形	逆台形状	0.41 × 0.41 × 0.15	黒褐色シルトと褐灰色シルトの混合層	弥・陶	
202	2	A3	隅丸方形	皿状	0.51 × 0.48 × 0.11	黒褐色シルトと褐灰色シルトの混合層	弥	SD201を切る
203	2	A3	円形	逆台形状	0.22 × 0.21 × 0.19	黒褐色シルト	弥	鋤跡に切られる
204	2	A3	楕円形	逆台形状	0.21 × 0.17 × 0.30	黒褐色シルト	弥	
205	2	B3	円形	逆台形状	0.17 × 0.16 × 0.09	黒褐色シルト	弥	
206	2	A3	楕円形	逆台形状	0.17 × 0.15 × 0.22	黒褐色シルトと褐灰色シルトの混合層	弥	鋤跡を切る

表 7 SB101 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口径 (16.5) 残高 1.9	やや内傾する頸部から口縁部は外方に屈曲する。	ナデ	ナデ	黒褐色 黄灰色	石・長 (1~3) ○		6
2	甕	口径 (17.6) 残高 2.3	口縁部は外方に拡張され、端部は平らな面をもつ。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ○		6
3	甕	底径 (4.2) 残高 3.4	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	マメツ	ナデ	暗茶褐色 暗褐色	石・長 (1~4) 金 ○		6
4	甕	底径 (6.3) 残高 4.0	上げ底で括れをもつ。	ナデ	ナデ	橙色 褐灰色	石・長 (1~3) ○		6
5	壺	残高 5.6	弥生土器の頸部。断面三角形状の凸帯が貼りつく。	マメツ	マメツ	乳橙色 乳橙色	石・長 (1~3) 金 ○		6
6	壺	残高 3.8	弥生土器の頸部。凸帯に押圧文が施される。	マメツ	マメツ	茶色 茶色	石・長 (1~4) 赤色土粒 ○		6

表 8 SD102 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
7	土釜か 土鍋	残高 6.5	土釜か土鍋の三足脚部。断面円形の脚は下方に延びる。	ナデ	—	赤褐色	石・長 (1~3) 金・赤色土粒 ○		

表 9 SK101 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
8	鉢	底径 (10.2) 残高 4.2	底部。断面逆台形状の高台をもち、内外面には施釉が施される。	施釉	施釉	暗褐色 灰黄色	密 ○		6
9	土瓶	胴径 (10.2) 残高 3.4	内湾する上胴部に口縁端部は上方に短く延び、丸く納まる。	施釉	施釉	赤黒色	密 ○		6
10	ミニ チュア	口径 4.4 器高 1.3 底径 1.4	断面逆台形状の高台をもち、胴部は内湾する。	一部施釉	施釉	灰白色	密 ○		6

表 10 SD201 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
11	碗	残高 2.9	口縁部はやや外反し、端部は尖り気味である。	施釉	施釉	灰白色	密 ○		

第4章 祝谷大地ヶ田遺跡8次調査

第1節 調査の経緯

2018（平成30）年2月1日より、屋外調査を開始した。調査対象範囲は約160m²である。以下、調査工程を略記する。

- 2月1日（木）：本日より屋外調査を開始する。下草刈や発掘機材の搬入を行う。
- 2月2日（金）：下草刈と調査区の設定を行う。
- 2月5日（月）：重機による表土掘削を開始すると同時に壁面の精査を開始する。
- 2月7日（水）：床面を精査し、遺構の検出作業を開始する。1号石室の石室上半を掘り下げる。
- 2月8日（木）：石室の全容を調査する為、重機にて1号石室の西・北側を調査地境まで拡張する。
床面精査により2号石室を検出する。遺構検出写真撮影を行う。
- 2月9日（金）：遺構の掘り下げを開始する。1号石室内を玉石直上までの掘り下げを行う。2号石室内の玉石直上までの掘下げを行う。
- 2月13日（火）：1号石室の玉石直上までの掘り下げを終了する。2号石室の北側を調査する為に人力で北壁の拡張を行う。
- 2月15日（木）：1号石室の主軸を設定し、墓道部の断ち割りと測量を開始する。
- 2月16日（金）：2号石室の玉石上の遺物検出状況の写真撮影と測量を行い、遺物を取り上げる。
- 2月19日（月）：1号石室の玉石の検出状況の写真撮影を行い、ベルトを設定し玉石の除去を行う。
2号石室の主軸を設定し、ベルトを設定し玉石を除去する。
- 2月20日（火）：1号石室の貼床を除去し、墓壙の基底面を検出。2号石室の墓壙の掘り下げを行う。
- 2月22日（木）：1号・2号石室と他の遺構の掘り下げを終了する。
- 2月23日（金）：遺構の完掘写真撮影を行った後、文化財課の完了検査を受ける。
- 2月26日（月）：重機による埋戻しを開始する。
- 2月27日（火）：重機による埋戻しや発掘機材の撤去を終了する。
- 2月28日（水）：出土遺物の洗浄を行い、本日にて発掘調査を終了する。
- 3月5日（月）：本日より、埋蔵文化財センターにて出土遺物の注記・復元作業、石室内床面の土ふるい及び測量図面や写真類の整理作業を開始し、調査概要報告書の作成を行う。

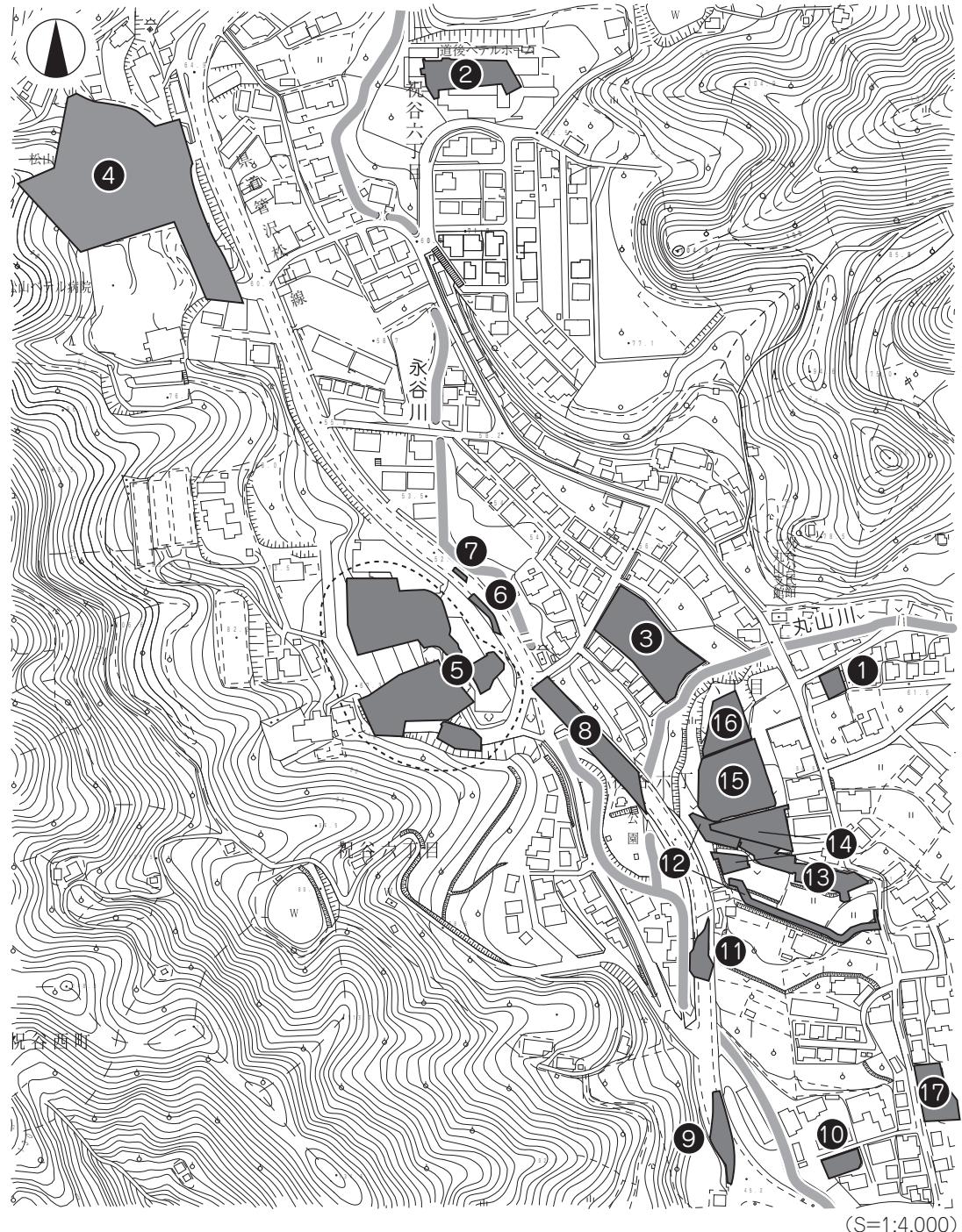
調査名：祝谷大地ヶ田遺跡8次調査

調査場所：松山市祝谷六丁目1024番3及び1023番

調査面積：約160m²

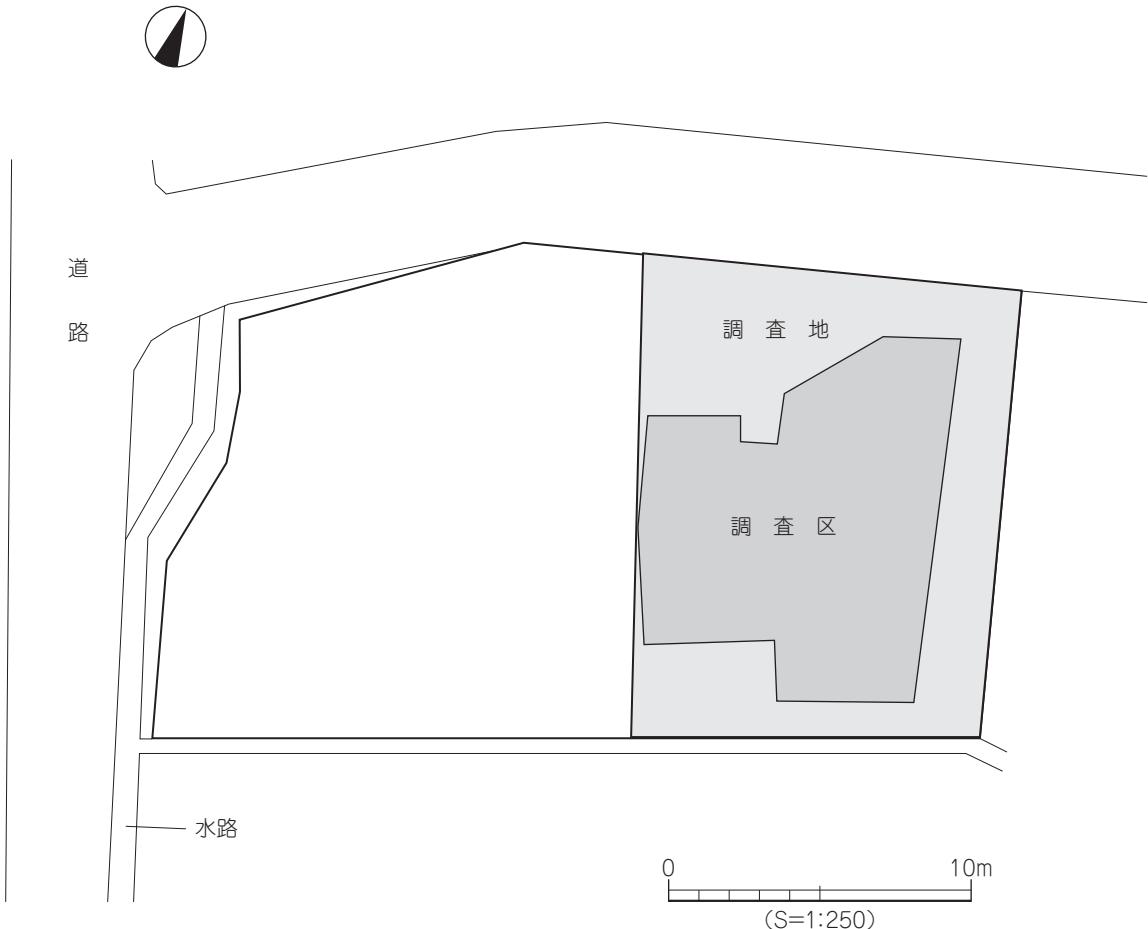
調査期間：2018（平成30）年2月1日（木）～同年2月28日（水）

調査担当：公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター 河野 史知



- | | | | |
|--------------|--------------|--------------|-----------------|
| ① 祝谷大地ヶ田遺跡8次 | ② 祝谷アイリ遺跡 | ③ 祝谷アイリ遺跡2次 | ④ 祝谷1~5号墳（祝谷遺跡） |
| ⑤ 祝谷六丁場遺跡1次 | ⑥ 祝谷六丁場遺跡2次 | ⑦ 祝谷丸山遺跡1次 | ⑧ 祝谷丸山遺跡2次 |
| ⑨ 祝谷西山遺跡 | ⑩ 祝谷大地ヶ田遺跡1次 | ⑪ 祝谷大地ヶ田遺跡2次 | ⑫ 祝谷大地ヶ田遺跡3次 |
| ⑬ 祝谷大地ヶ田遺跡4次 | ⑭ 祝谷大地ヶ田遺跡5次 | ⑮ 祝谷大地ヶ田遺跡6次 | ⑯ 祝谷大地ヶ田遺跡7次 |
| ⑰ 祝谷大地ヶ田遺跡9次 | | | |

第21図 周辺遺跡分布図



第 22 図 調査地区割図

第 2 節 層 位 (第 23・24 図)

調査地は、丘陵裾部の標高 59 m に立地する。調査で確認した土層は、以下の 5 種類 (I ~ V 層) である。

第 I 層：土色・土質の違いにより、2 種類に分層される。

第 I ①層 - 造成土 (真砂土)

第 I ②層 - 灰色砂質土 [10Y 7/1]

第 II 層：灰オリーブ色土 [5Y 4/2] が調査区南部に堆積し、層厚 16 ~ 35cm を測る。

第 III 層：暗褐色土 [10YR 3/4] が調査区西南部の傾斜面に堆積し、層厚 10 ~ 35cm を測る。

第 IV 層：黒褐色土 [7.5YR 3/1] (しまりが強い) が調査区東北部に堆積し、層厚 10 ~ 15cm を測る。

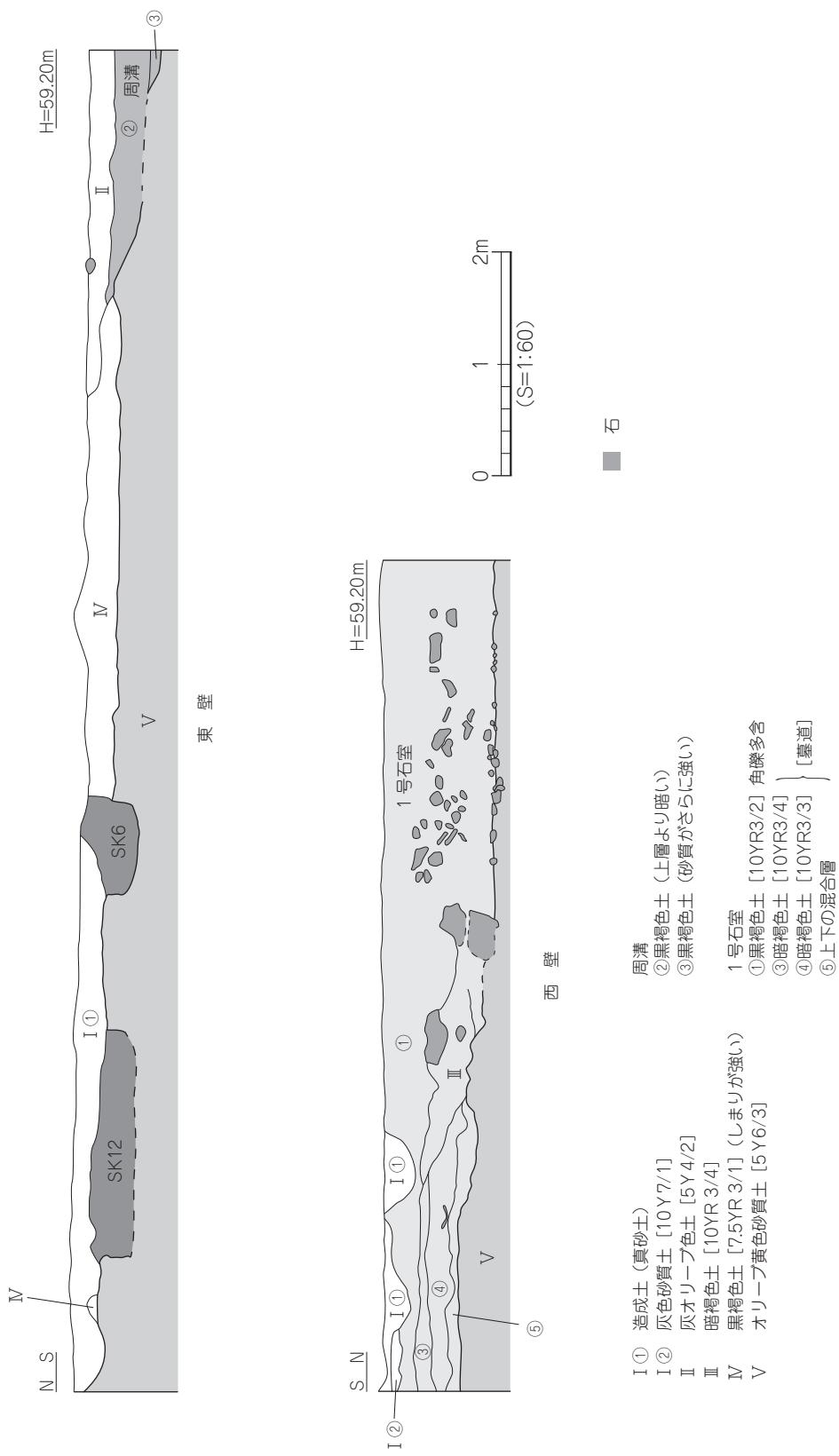
第 V 層：オリーブ黄色砂質土 [5Y 6/3] で、本層上面が最終の遺構検出面となる。

なお、調査にあたり調査地内を 2m 四方のグリッドに分けた。グリッドは西から東へ向けて A・B・…、北から南に向けて 1・2・3・… とし、A1・A2・…・B4 区などのグリッド名を付した。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。

祝谷大地ヶ田遺跡 8 次調査

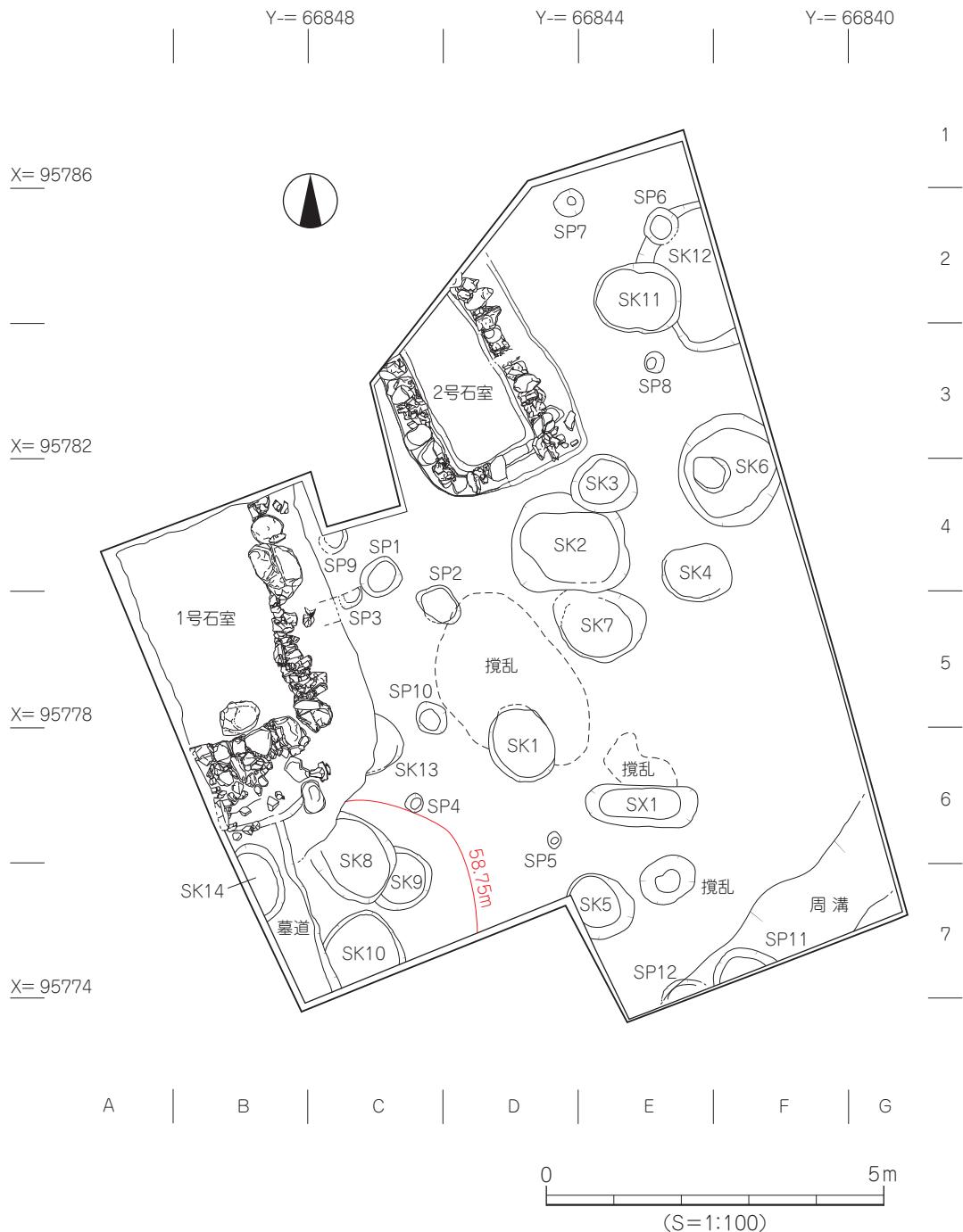


層位



第24図 東壁・西壁土層図

祝谷大地ヶ田遺跡 8 次調査



第 25 図 遺構配置図

第3節 遺構と遺物

調査では、第V層上面にて、土坑14基、柱穴12基、石室2基、周溝1条を検出した。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、石製品、鉄製品、装身具などが出土し、遺物収納用箱(22×44×60cm)約4箱分の出土量である。ここでは、時代毎の遺構別に説明する。

1. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、土坑14基(SK1～SK14)、柱穴12基(SP1～SP12)を検出した。

(1) 土坑

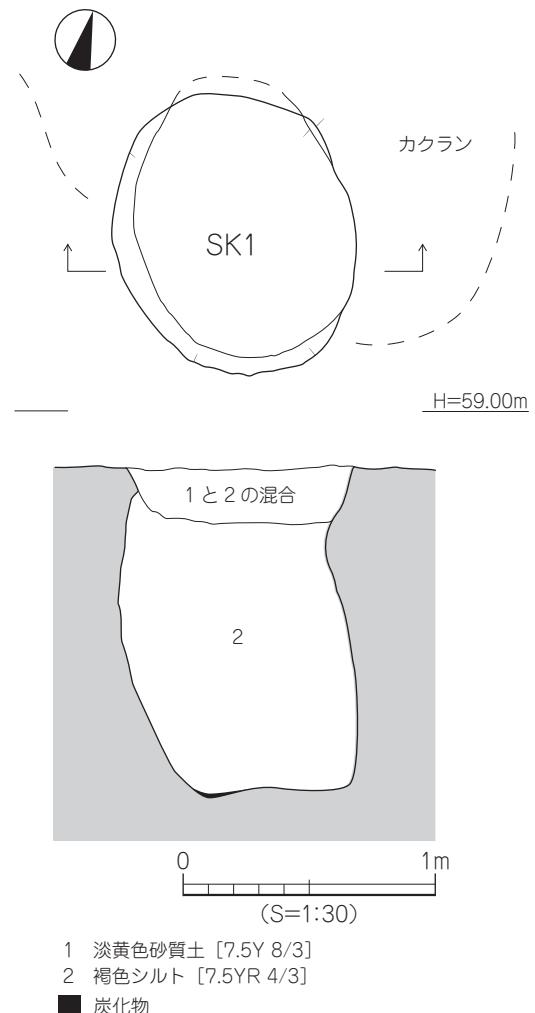
SK1(第26図、図版17)

調査区中央部のD5～D6区に位置する。土坑上位は攪乱により削平されている。平面形態は橢円形をなし、規模は東西検出長1.28m、南北検出長0.95m、深さは最深部で1.25mを測る。断面形態は袋状をなす。土坑基底面はほぼ平坦であるが床面の西側に浅い凹みをもつ。基底面付近には1～2cm大の炭化物が僅かに散在しており、とくに凹み部には薄く堆積する。埋土の上位は淡黄色砂質土[7.5Y 8/3]と褐色シルト[7.5YR 4/3]の混合層、中位から基底面にかけては褐色シルト[7.5YR 4/3]の単層である。土坑内からは、弥生土器に混じり縄文土器片が出土した。

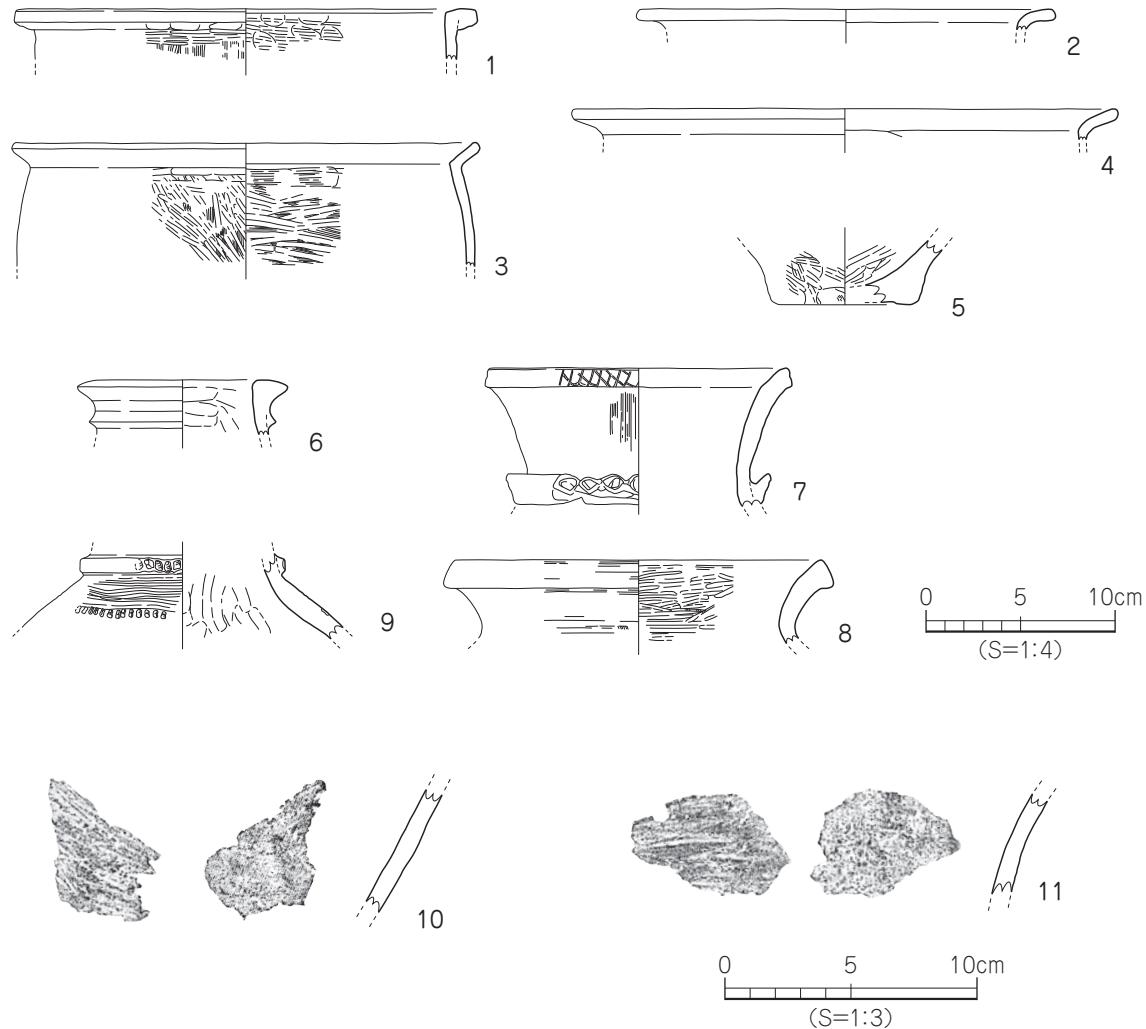
出土遺物(第27図、図版20)

1～9は弥生土器。1～5は甕で、1は逆L字形の口縁端部は「コ」字状をなす。2・4は大きく外反する折り曲げ口縁部の端部は丸みをもつ。3は「く」字状の口縁部の端部は丸みをもつ。5は平底の底部である。6～9は壺で、6はやや内傾する口縁部の肥厚した端部の下方には断面三角形状の貼付凸帯が巡る。7は口縁端部に貝殻腹縁による斜格子文、頸部の貼付凸帯には指頭圧痕がある。8は口縁端部は平らな面をなし、下方はやや肥厚する。9は肩部に12条の沈線文とその下に竹管文をもち、頸部の貼付凸帯には刺突文を施す。10・11は混入品の縄文土器の深鉢で、10は外面にケズリ調整、内面にはミガキ・ナデ調整を施す。

時期：出土した弥生土器の特徴から弥生時代中期中葉とする。



第26図 SK1測量図



第27図 SK1出土遺物実測図

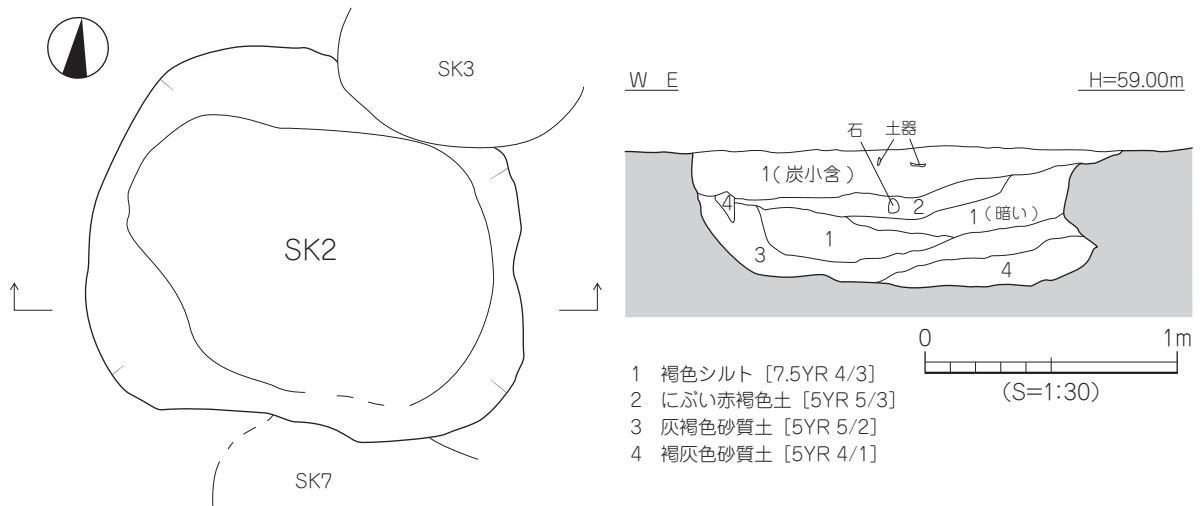
SK2 (第28図、図版17)

調査区中央部のD4～E4区に位置する。土坑南端は重複するSK7に後出し、土坑北端はSK3に先行する。平面形態は橢円形をなし、規模は東西検出長1.74m、南北検出長1.34m、深さは最深部で55cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、凹凸をもつ土坑基底面の東端付近がやや抉れる。埋土は4層に分層され、上層から中層にかけ褐色シルト [7.5YR 4/3] を主体に上層には礫を小含しており、下層は灰褐色砂質土 [5YR 5/2]、褐灰色砂質土 [5YR 4/1] が堆積する。土坑内からは、弥生土器片が出土した。

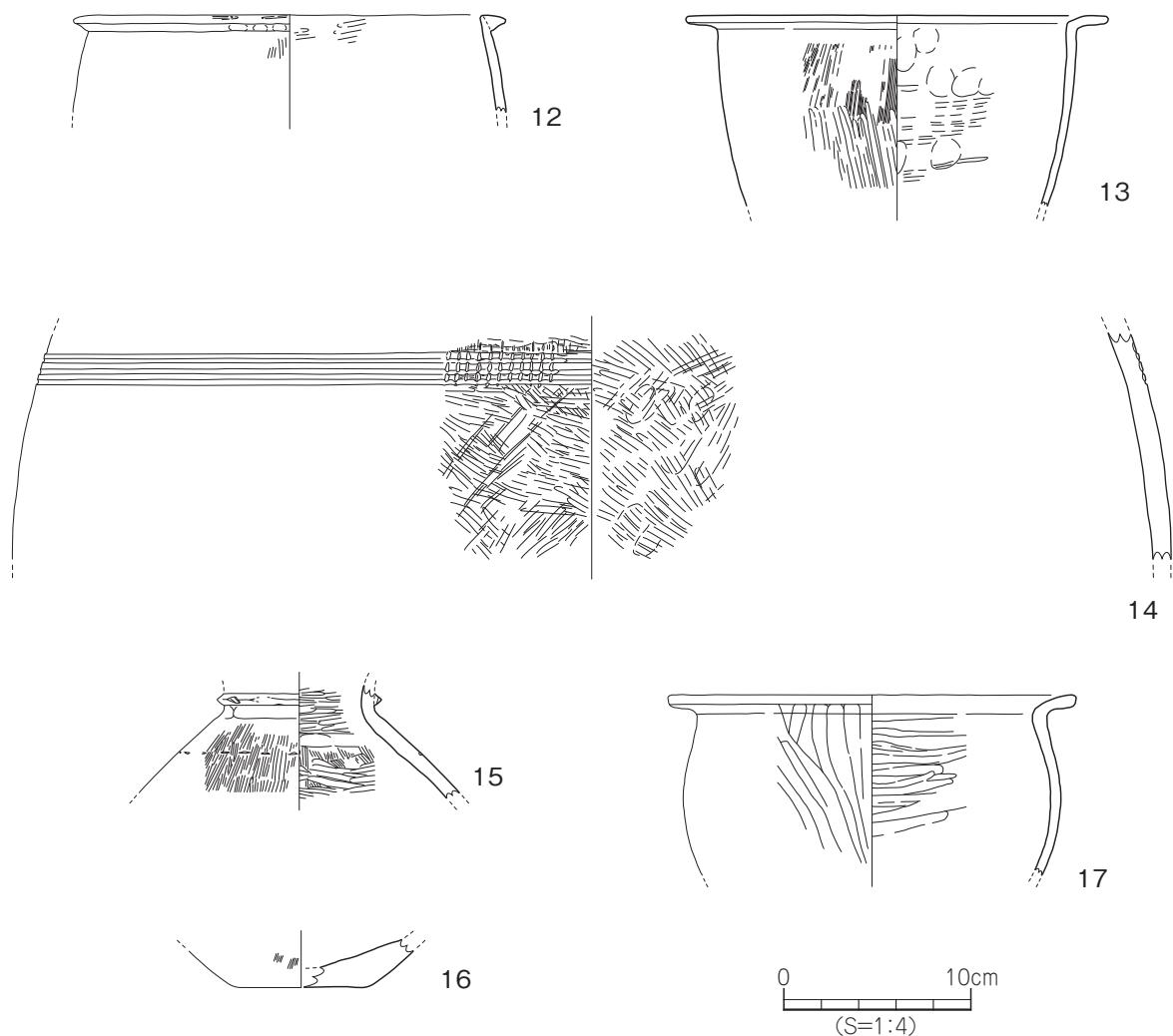
出土遺物 (第29図、図版20)

12～17は弥生土器。12・13は甕である。12は口縁端部に断面三角形状の貼付口縁がつく。13は逆L字形の口縁。端部は丸みをもつ。14～16は壺である。14は上胴部に4条の沈線文とその一部に格子状の沈線文を施す。推定胴径61.4cmを測る。15は頸部の断面三角形状の貼付凸帯に押圧痕がある。16は平底の底部である。17は鉢で、大きく外反する折り曲げの口縁部をもつ。

時期：出土した弥生土器の特徴から弥生時代中期中葉とする。



第 28 図 SK2 測量図

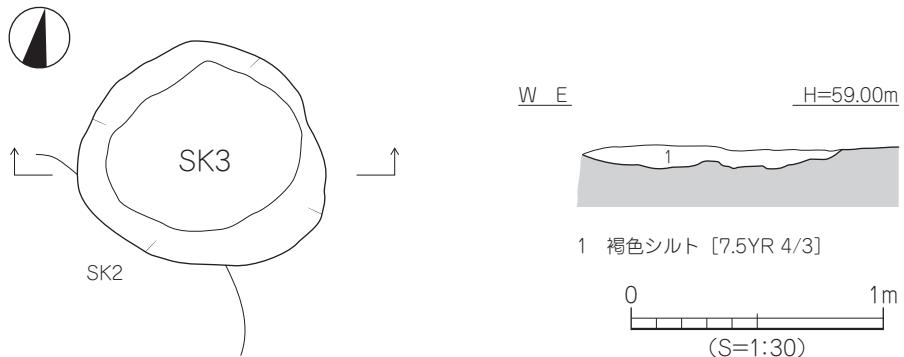


第 29 図 SK2 出土遺物実測図

SK3 (第 30 図、図版 14)

調査区東北部の D4 ~ E4 区に位置する。土坑南端は SK2 と重複し、SK3 が後出する。平面形態は橢円形をなし、規模は東西検出長 0.99m、南北検出長 0.86m、深さは最深部で 10cm を測る。断面形態はレンズ状を呈し土坑基底面に凹凸がみられる。埋土は褐色シルト [7.5YR 4/3] の単層が堆積する。土坑内からは、弥生土器片が僅かに出土した。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、SK2 との重複関係から、弥生時代中期中葉以降とする。



第 30 図 SK3 測量図

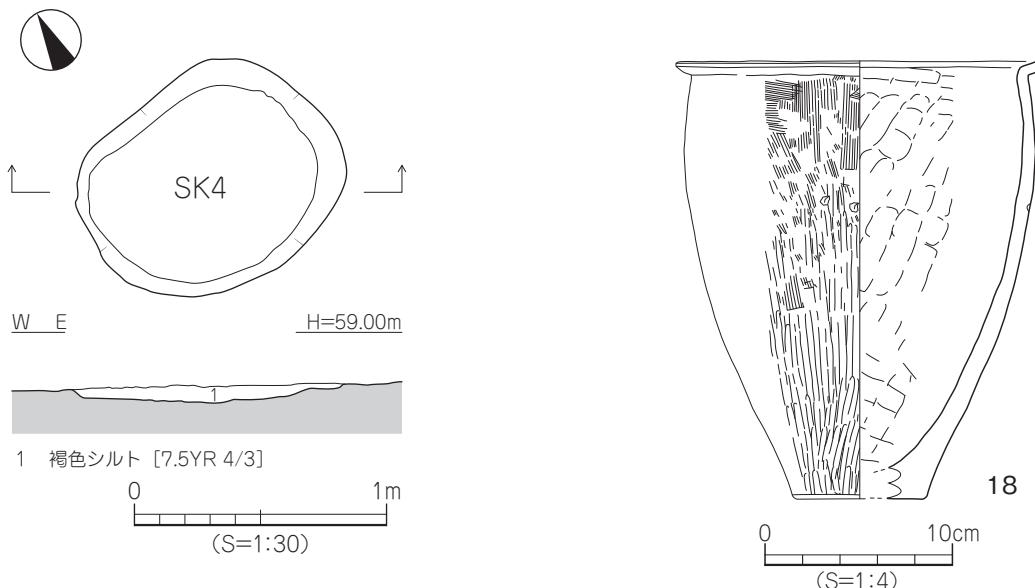
SK4 (第 31 図、図版 14)

調査区北東部の E4 ~ F4 区に位置する。平面形態は橢円形をなし、規模は東西検出長 1.03m、南北検出長 0.83m、深さは最深部で 7cm を測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は褐色シルト [7.5YR 4/3] の単層が堆積する。土坑内からは、弥生土器片が少量出土した。

出土遺物 (第 31 図、図版 21)

18 は弥生土器の甕で、平底の底部から内湾して立ち上がり、口縁端部は外上方にのびる。上胴部外側に焼成前の刺突文が 2 箇所にある。

時期：出土した弥生土器の特徴から弥生時代前期末から中期初頭とする。

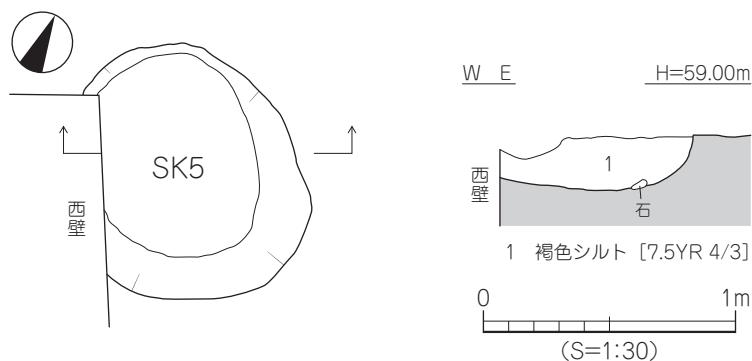


第 31 図 SK4 測量図・出土遺物実測図

SK5 (第32図、図版18)

調査区南東部のD7～E7区で検出した土坑で、土坑西隅は調査区外に延びる。平面形態は残存状況から橿円形を呈すると思われ、規模は東西検出長1.02m、南北検出長0.90m、深さは最深部で33cmを測る。断面形態は逆台形状をなし、土坑基底面は平らな面をなす。埋土は褐色シルト [7.5YR 4/3] の単層である。土坑内からは、少量の弥生土器片に混じりサヌカイト剥片が出土した。

時期：出土遺物が少量で時期特定は難しいが、埋土がSK2と同一なことから弥生時代中期中葉とする。



第32図 SK5 測量図

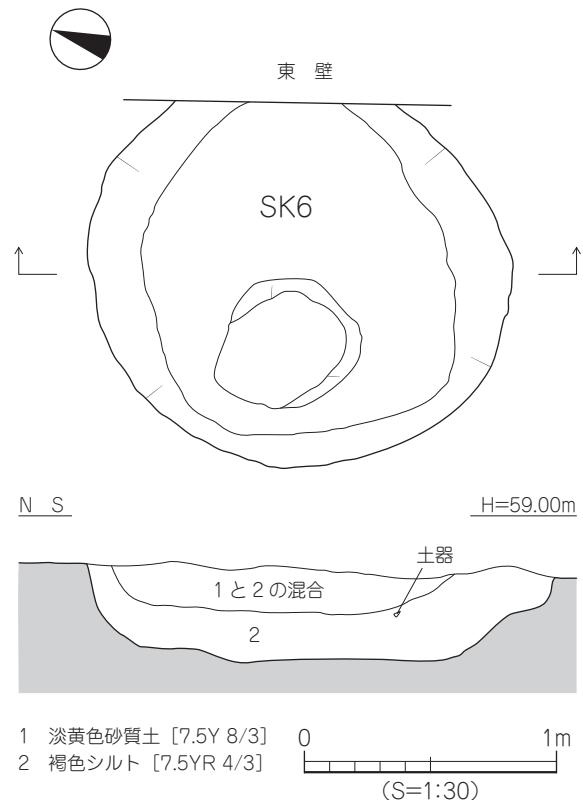
SK6 (第33図、図版18)

調査区北東部のE3～F4区で検出した土坑で、土坑東端は調査区外に延びる。平面形態は橿円形をなし、土坑基底面の西側には浅い橿円形状の凹みがみられる。規模は東西検出長1.56m、南北検出長1.67m、深さは最深部で41cmを測る。断面形態は逆台形状をなし、埋土は2層に分層され、上位が淡黄色砂質土 [7.5Y 8/3] と褐色シルト [7.5YR 4/3] の混合層で、下位は褐色シルト [7.5YR 4/3] である。土坑内からは、弥生土器片が出土した。

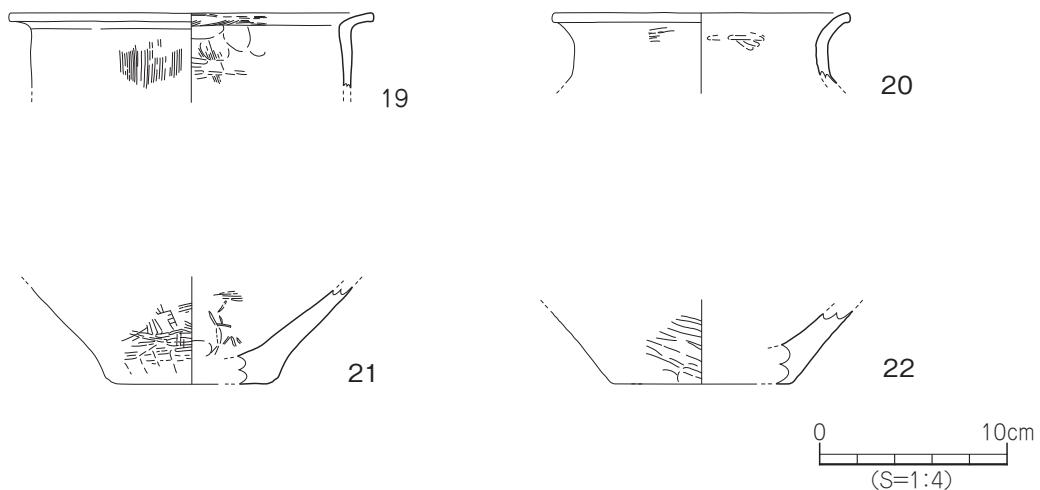
出土遺物 (第34図、図版21)

19～22は弥生土器。19は甕で逆L字形の口縁端部は「コ」字状をなす。20～22は壺である。20は筒状でわずかに伸びる頸部に口縁部は外反し、端部は下方にやや肥厚する。21・22は平底の底部。

時期：出土した弥生土器の特徴から弥生時代中期中葉とする。



第33図 SK6 測量図

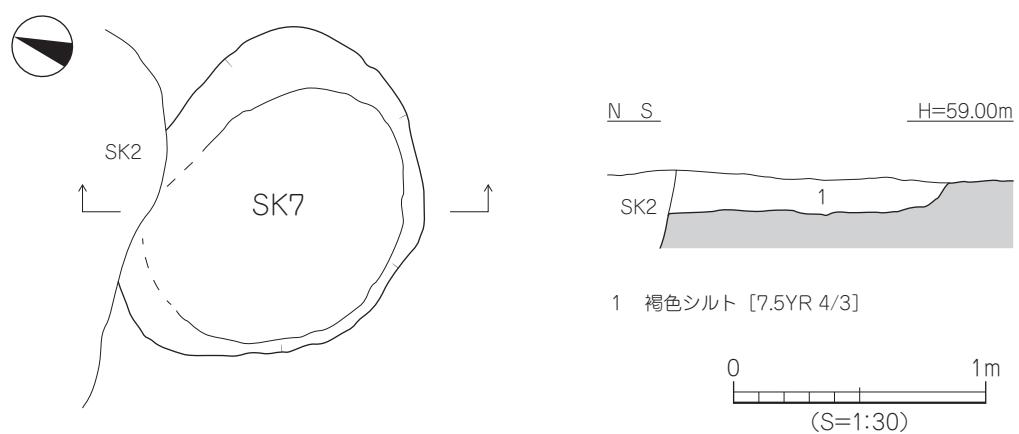


第 34 図 SK6 出土遺物実測図

SK 7 (第 35 図、図版 14)

調査区中央部の D5 ~ E5 区で検出した土坑で、土坑北端は SK2 と重複し、SK7 が先行する。平面形態は橢円形をなし、規模は東西検出長 1.32m、南北検出長 1.05m、深さは最深部で 10cm を測る。断面形態は皿状をなし、土坑基底面はほぼ平坦である。埋土は褐色シルト [7.5YR 4/3] の単層である。土坑内からは、弥生土器片が少量出土した。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、SK2 との重複関係から、弥生時代中期中葉以前とする。



第 35 図 SK7 測量図

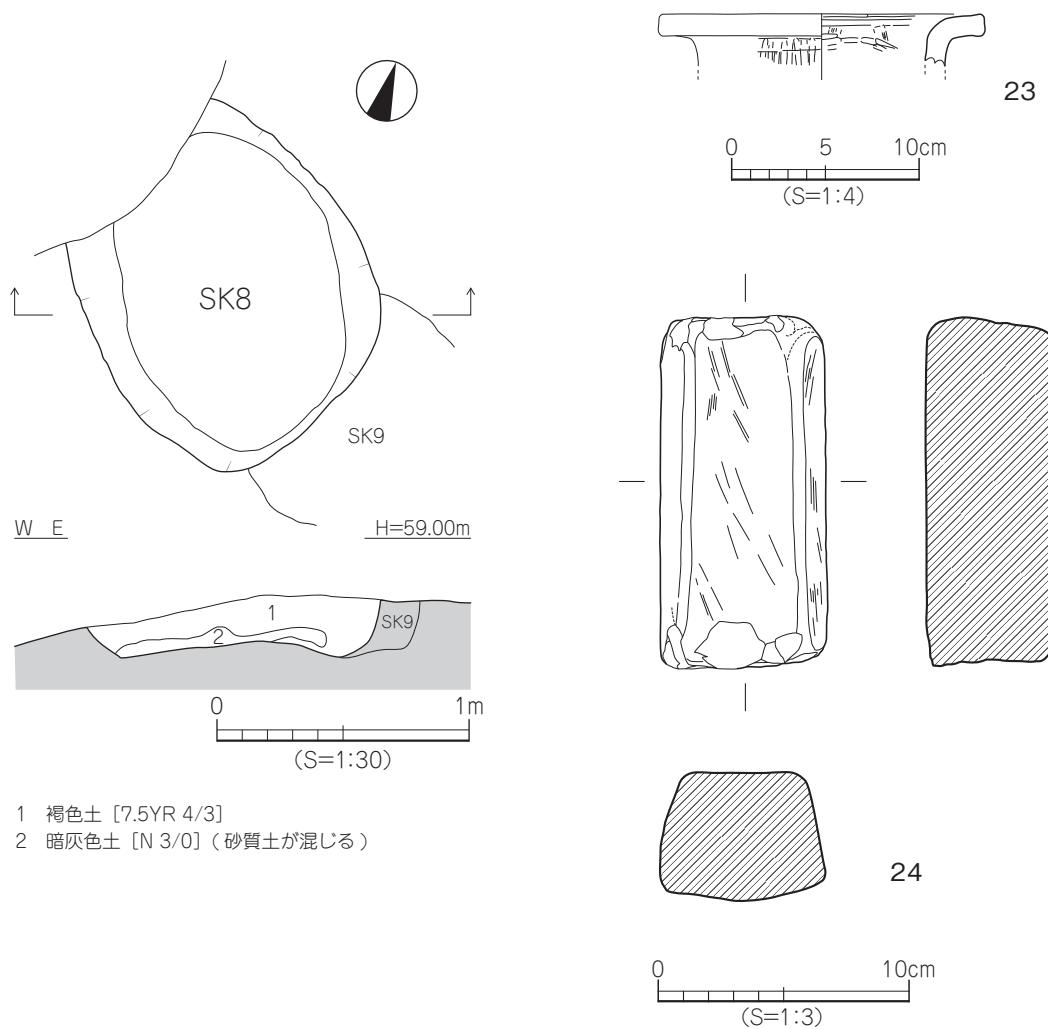
SK8 (第36図、図版18)

調査区西南部のC6～C7区で検出した土坑で、土坑東端は土坑SK9、土坑西端は1号石室と重複しSK8が先行する。残存状況より平面形態は隅丸方形をなすものと思われ、規模は東西検出長1.45m、南北検出長1.11m、深さは最深部で22cmを測る。断面形態は皿状をなすが、土坑基底面の東端部は凹みをもつ。埋土は褐色土 [7.5YR 4/3] に土坑基底面付近にて暗灰色土 [N 3/0] が帯状に堆積する。土坑内からは、少量の弥生土器片に混じり砥石が1点出土した。

出土遺物 (第36図、図版21)

23は弥生土器の壺である。逆L字形の口縁部で端部は「コ」字状をなす。24は砥石の完存品で、両端を除き4面の砥面のうち表面と側面の2面は滑らかな凹面をもつ。表面全体には焼けによる赤みや煤けがある。長さ13.8cm、幅6.6cm、最大厚5.0cm、重さ916.73gを測る。石材は石英粗面岩製。

時期：出土した弥生土器の特徴から弥生時代中期中葉とする。

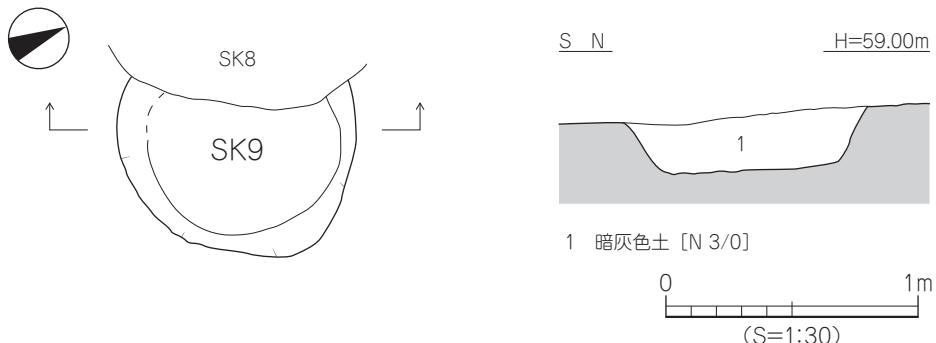


第36図 SK8測量図・出土遺物実測図

SK9 (第37図、図版15)

調査区西南部のC6～C7区で検出した土坑で、土坑西端は重複するSK8に先行する。平面形態は残存状況から橢円形をなすものと思われ、規模は東西検出長1.05m、南北検出長0.94m、深さは最深部で23cmを測る。断面形態は逆台形状をなし、土坑基底面はほぼ平坦である。埋土は暗灰色土〔N3/0〕の単層である。土坑内からは、弥生土器片が僅かに出土した。

時期：出土遺物が僅少で時期特定は難しいが、SK8との重複関係から、弥生時代中期中葉以前とする。

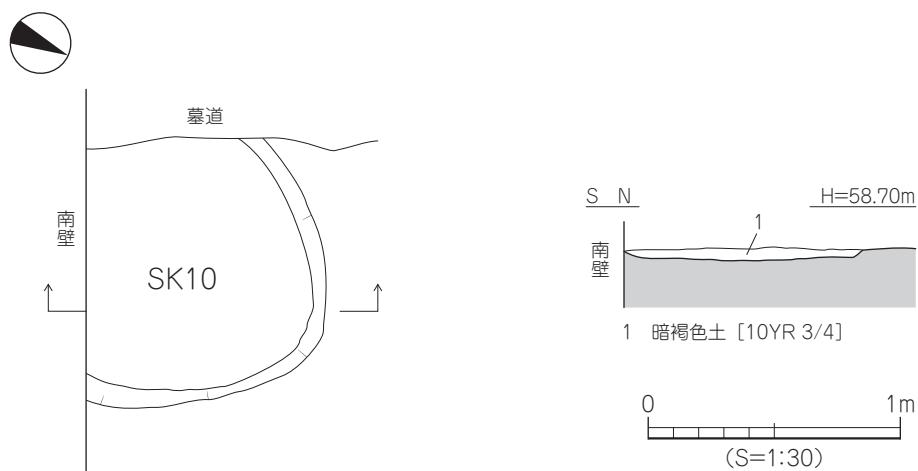


第37図 SK9 測量図

SK10 (第38図、図版15)

調査区南西部のC7区で検出した土坑で、土坑南端は調査区外に延び、土坑西侧は重複する1号石室の墓道部に先行する。平面形態は残存状況から橢円形をなすものと思われ、規模は東西検出長1.02m、南北検出長0.98m、深さは最深部で14cmを測る。断面形態は皿状をなし、埋土は暗褐色土〔10YR 3/4〕の単層である。土坑基底面は平坦である。土坑内からは、弥生土器片に混じりサヌカイト剥片が出土した。

時期：出土遺物が少量で弥生時代としか分からぬ。



第38図 SK10 測量図

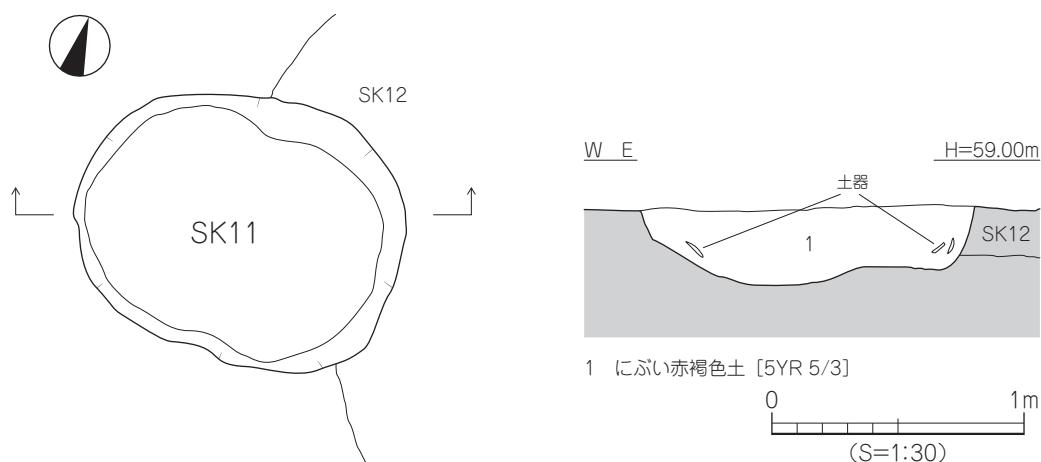
SK 11 (第 39 図、図版 19)

調査区東北部の E2 ~ E3 区で検出した土坑で、土坑東部は重複する SK12 に後出する。平面形態は橢円形をなし、規模は南北検出長 1.04m、東西検出長 1.32m、深さは最深部で 30cm を測る。断面形態は逆台形状をなし、埋土はにぶい赤褐色土 [5YR 5/3] 単層である。土坑基底面は西側に凹みをもつ。土坑内からは、弥生土器片が僅かに出土した。

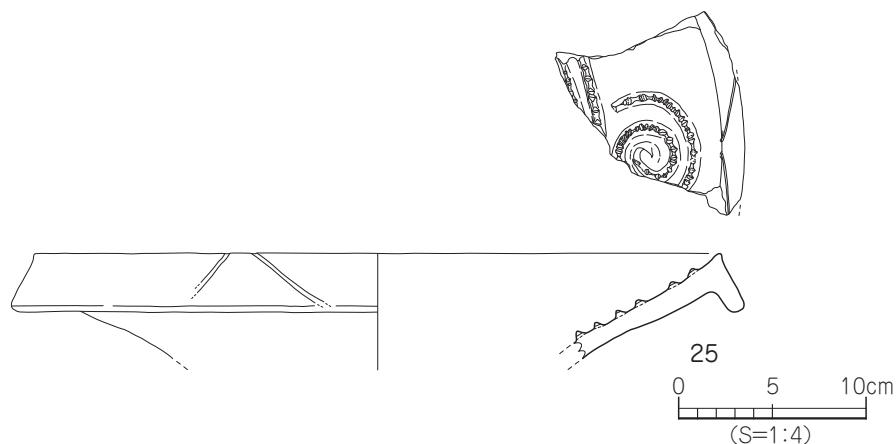
出土遺物 (第 40 図、図版 21)

25 は弥生土器の長頸壺の口縁部である。口縁端部は下方に拡張し端面に「ハ」字状文が施される。口縁部内面には渦巻状の貼付凸帯があり、その内側に平行する 2 条の貼付凸帯をもつ。いずれの貼付凸帯にも刻み目を施す。

時期：出土した弥生土器の特徴から弥生時代中期中葉とする。



第 39 図 SK11 測量図



第 40 図 SK11 出土遺物実測図

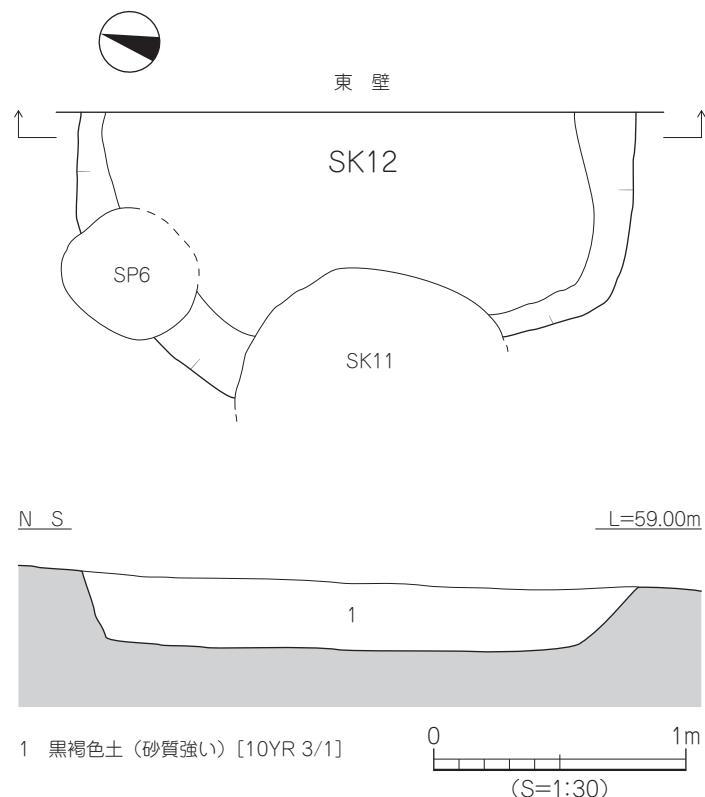
SK12 (第 41 図、図版 19)

調査区東北部の E2 ~ F3 区で検出した土坑で、土坑東端は調査区外に延びる。また、土坑西端は重複する SK11 に先行し、土坑北端は重複する SP6 に先行する。土坑基底面はほぼ平らな面をなす。埋土は黒褐色土 [10YR 3/1] の单層である。土坑内からは、弥生土器片に混じり、縄文土器片が 1 点出土した。

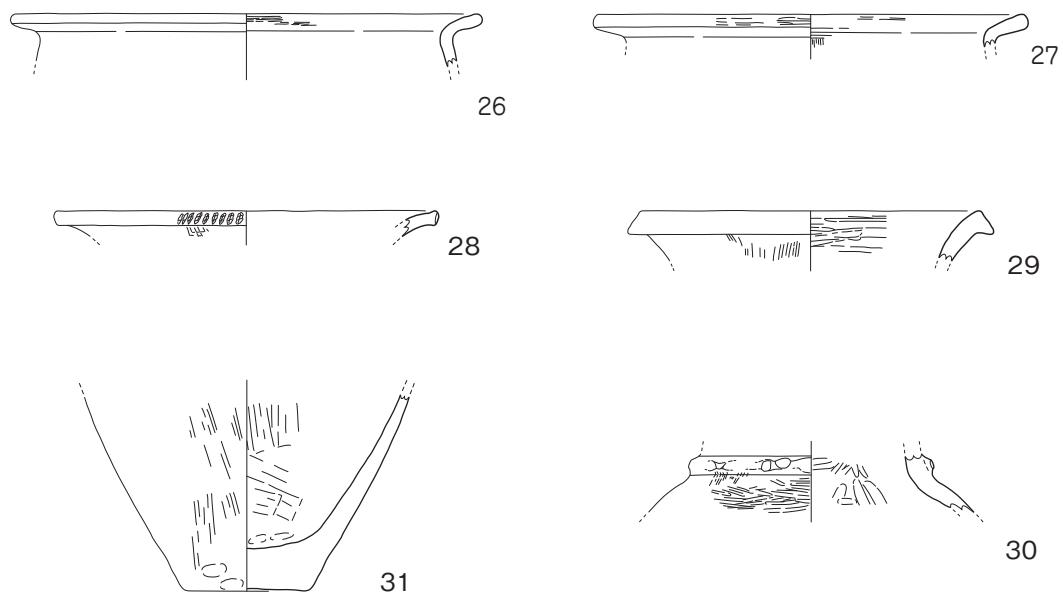
出土遺物 (第 42 図、図版 21)

26 ~ 31 は弥生土器。26 ~ 28 は甕である。26・27 は外反する口縁端部に丸みをもつ。28 は「コ」字状の口縁端部に刻目をもつ。29 ~ 31 は壺である。29 は外反する口縁端部は斜め下方に拡張する。30 は頸部の貼付凸帯に押圧痕がある。31 は平底の底部からやや内湾気味に立ち上がる。

時期：出土した弥生土器の特徴から
弥生時代中期中葉とする。



第 41 図 SK12 測量図

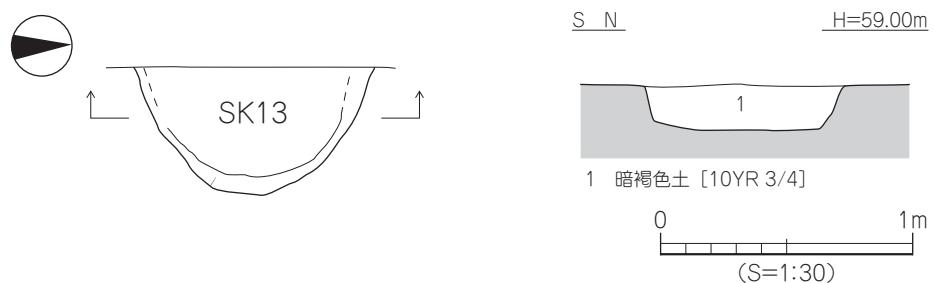


第 42 図 SK12 出土遺物実測図

SK 13 (第 43 図、図版 15)

調査区西部の C5 ~ C6 区で検出した土坑で、土坑西端は重複する 1 号石室に先行する。残存状況から平面形態は橢円形をなすものと思われ、規模は南北検出長 0.94m、東西検出長 0.52m、深さは最深部で 17cm を測る。断面形態は逆台形状をなし、埋土は暗褐色土 [10YR 3/4] の单層である。土坑基底面は平らな面をなす。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、埋土が SK10 と同一なことから弥生時代としか分からぬ。



第 43 図 SK13 測量図

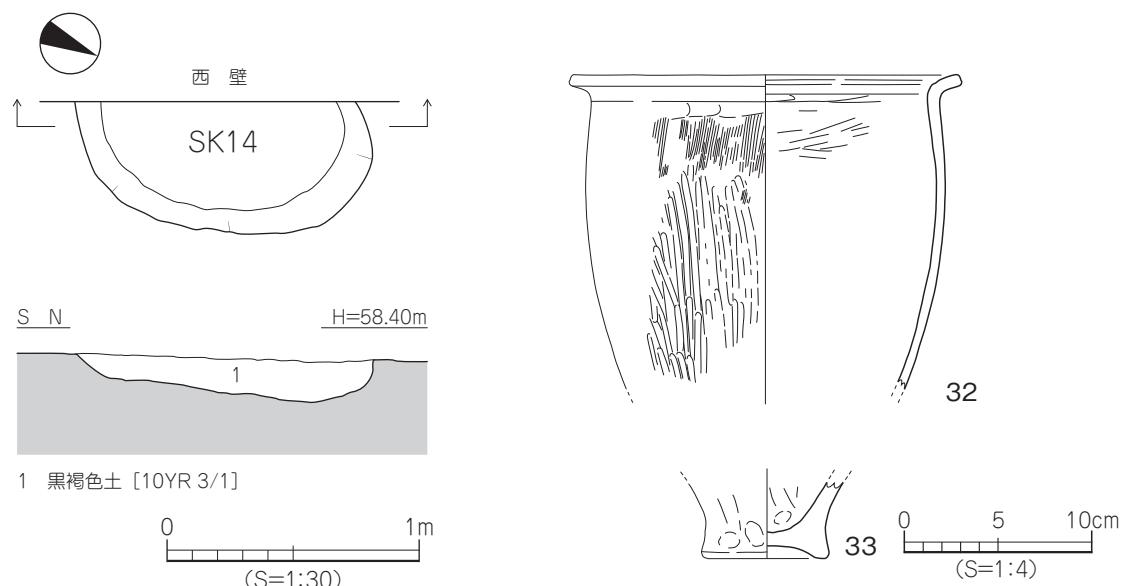
SK 14 (第 44 図、図版 15)

調査区西端の B6 ~ B7 区で検出した土坑で、土坑西端は調査区外に延びる。また 1 号石室の墓道部基底面から検出し、墓道部に先行する。平面形態は橢円形をなすものと思われ、規模は南北検出長 1.18m、東西検出長 0.51m、深さは最深部で 15cm を測る。断面形態はレンズ状をなし、埋土は黒褐色土 [10YR 3/1] の单層である。土坑内からは、弥生土器片が出土した。

出土遺物 (第 44 図、図版 21)

32・33 は弥生土器の甕である。32 は逆 L 字形の口縁で口縁端部は「コ」字状をなす。33 は底部で、くびれをもつ上げ底である。

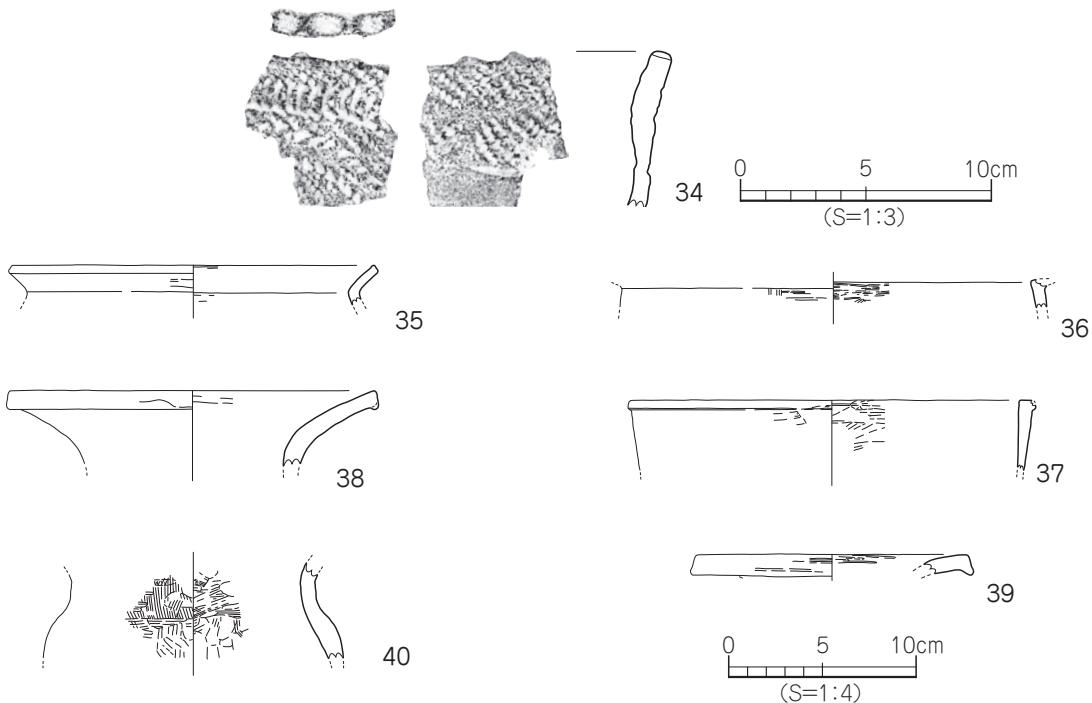
時期：出土した弥生土器の特徴から弥生時代中期後半とする。



第 44 図 SK14 測量図・出土遺物実測図

(2) 柱穴 (第 45 図、図版 22)

12 基の柱穴 (S P 1 ~ 12) を検出した。平面形態は円形～橍円形を呈しており、規模は直径 11 ~ 26cm、深さ 11 ~ 24cm を測る。埋土は褐色シルト [7.5YR 4/3]、黒褐色シルト [10YR 3/2] で柱穴内からの遺物は縄文土器や弥生土器の小片が僅かに出土した。



第 45 図 柱穴出土遺物実測図

2. 古墳時代の遺構と遺物

古墳（祝谷 11 号墳）の石室 2 基（1 号石室・2 号石室）と周溝の一部を検出した。

(1) 位置と現況

祝谷古墳群は永谷川右岸の祝谷 1 ~ 5 号墳と左岸の祝谷 6 ~ 11 号墳に分かれ、永谷川を挟んだ別々の丘陵に分布し、500m 程の距離がある。近接する 6 ~ 10 号墳は河岸段丘上の標高 50 ~ 55 m、範囲は東西約 90 m、南北 150 m に分布する。11 号墳は 10 号墳から東に距離約 60m の位置で、6 ~ 10 号墳を見下ろせる位置に立地する。調査地周辺の地形は後背の丘陵から丸山川が 6 ~ 11 号墳の北側を西流し、10 号墳付近で大きく湾曲して南流し、6 号墳付近で永谷川に合流する。11 号墳は緩傾斜面に立地するが、現況は宅地開発による削平を大きく受けおり平坦面である。

(2) 墳形と規模

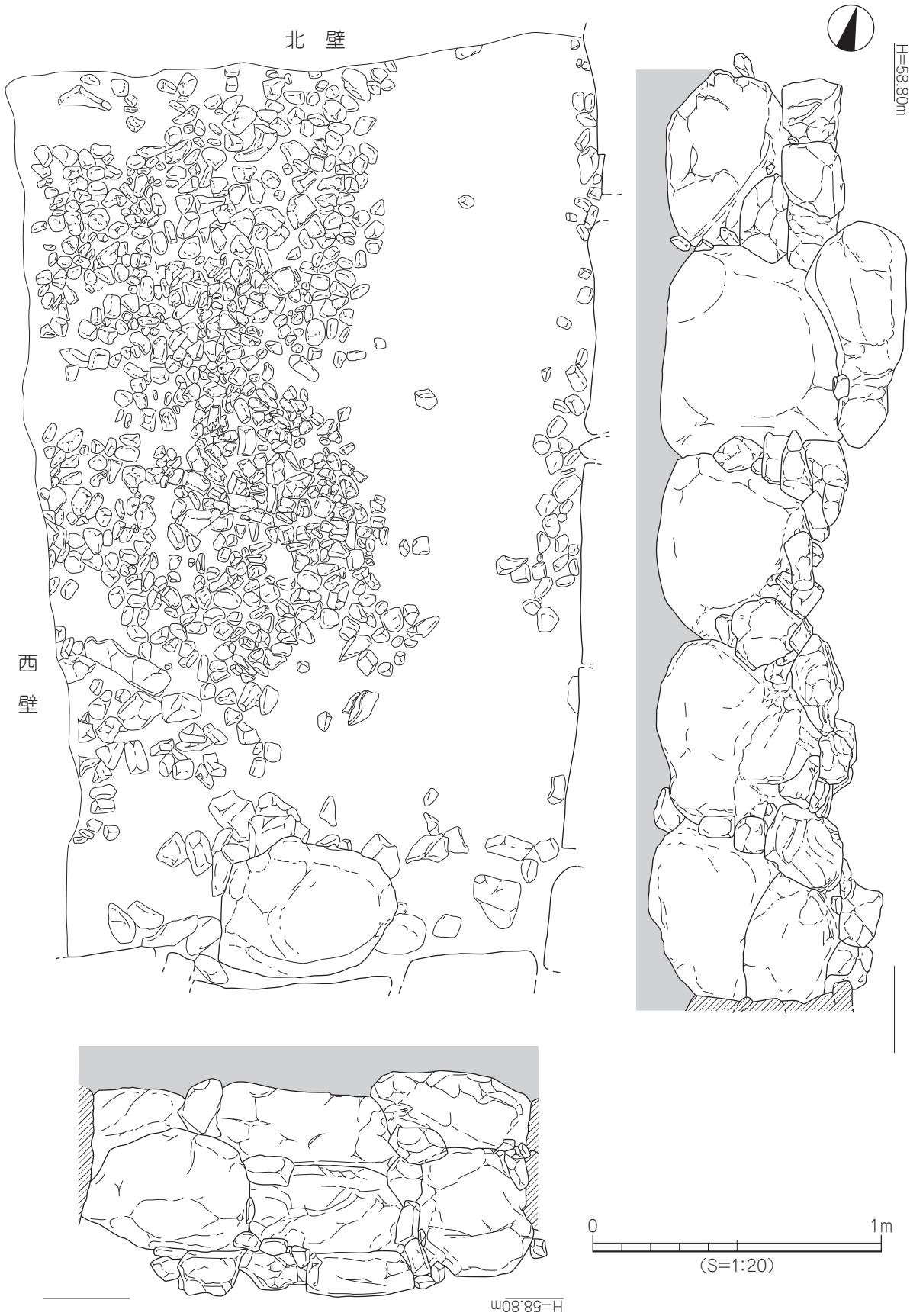
11 号墳の墳丘盛土は宅地開発による地山層まで及ぶ削平を受け全く遺存していない。2 基の横穴式石室を確認し、主体部はいずれも南北軸で南向きに開口する。石室の南東において周溝の一部を検出した。この周溝は両石室玄門から 7 ~ 8m の距離を測り、石室との相対的な位置関係から、円墳あるいは橍円墳になるものと推測する。

(3) 1号石室 (第46~49図、図版8~11・15)

1号石室は調査区西北端のA4~C7区で検出し、西側の側壁や奥壁は調査区外に延びており全容は不明であるが、南側に開口する横穴式石室で、主軸方位はE74°Sを測る。墓道は墓坑南辺中央部付近から石室主軸と同じ方向を指向し、西側や南端は調査区外に延びる。規模は検出長2.6m、幅0.8mで地山を溝状に掘削しており、基底部はほぼ平坦な面をなす。墓擴は西側側壁や奥壁が調査区外に広



第46図 1号石室平面図

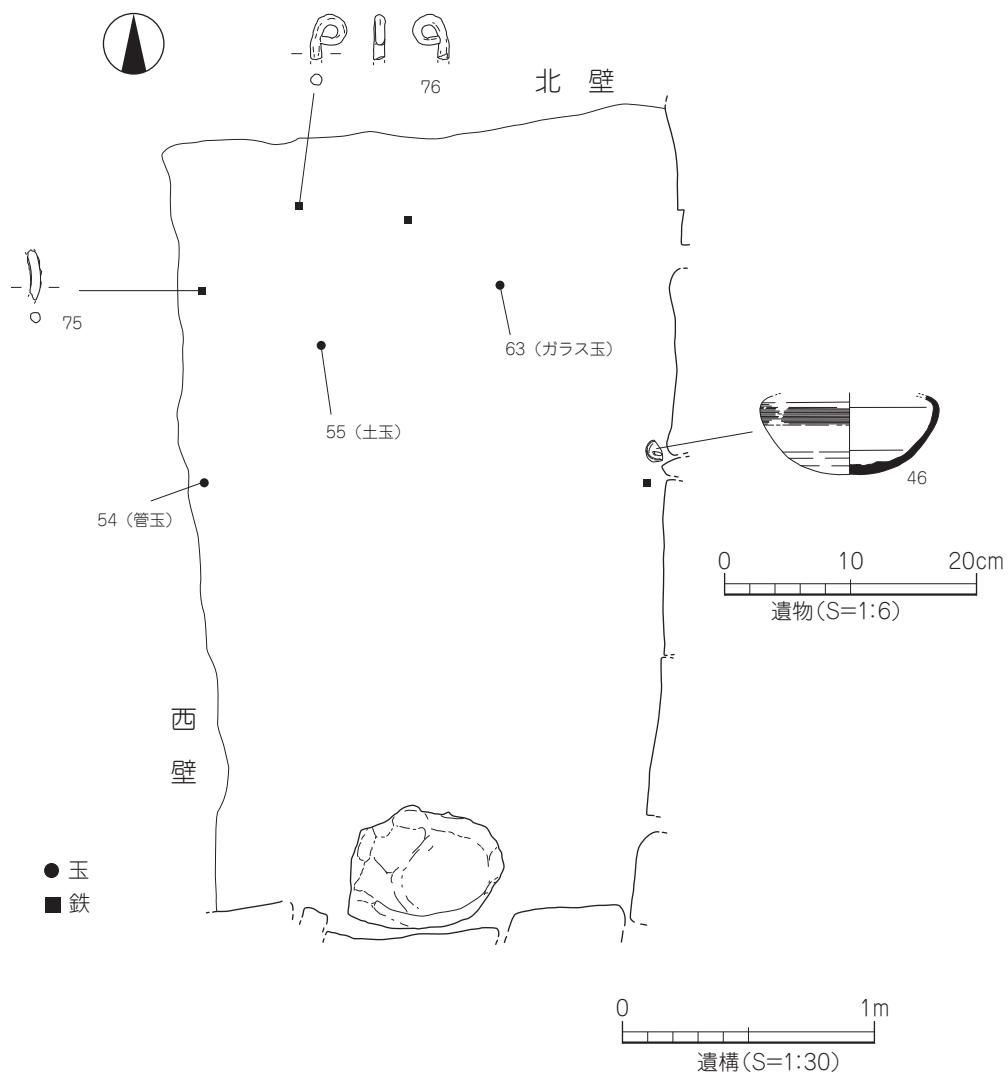


第47図 1号石室展開図



第48図 1号石室床面状況図

がっているため全容は不明であるが、平面形は隅丸長方形が想定される。検出規模は長軸(南北)5.1m、短軸(東西)2.8m、深さ0.86mを測る。墳丘の盛土は後世の削平により消失しており、玄室の遺存状況は、後世の搅乱の影響で側壁、南側の小口部の基底部の1~2段を残すのみである。玄室内の奥壁側には検出面から床面付近まで人頭大~80cmの大石が崩落した状態で密集するが、天井石の玄室内への落下は見られない。側壁の基底石は上部の石材より大形の石を使用しており、袖部の形態は玄門の両側に袖石が見られる両袖の石室である。また、閉塞石が2段残り、玄室内入口には踏み石が1段置かれ、玄室へは段を降りる構造をもつ。玄室床面は、2~13cmの大河原石が敷かれているが、東側の側壁部分は搅乱を受け未検出であった。遺物は須恵器、鉄製品、装身具が玉石上面から出土した。

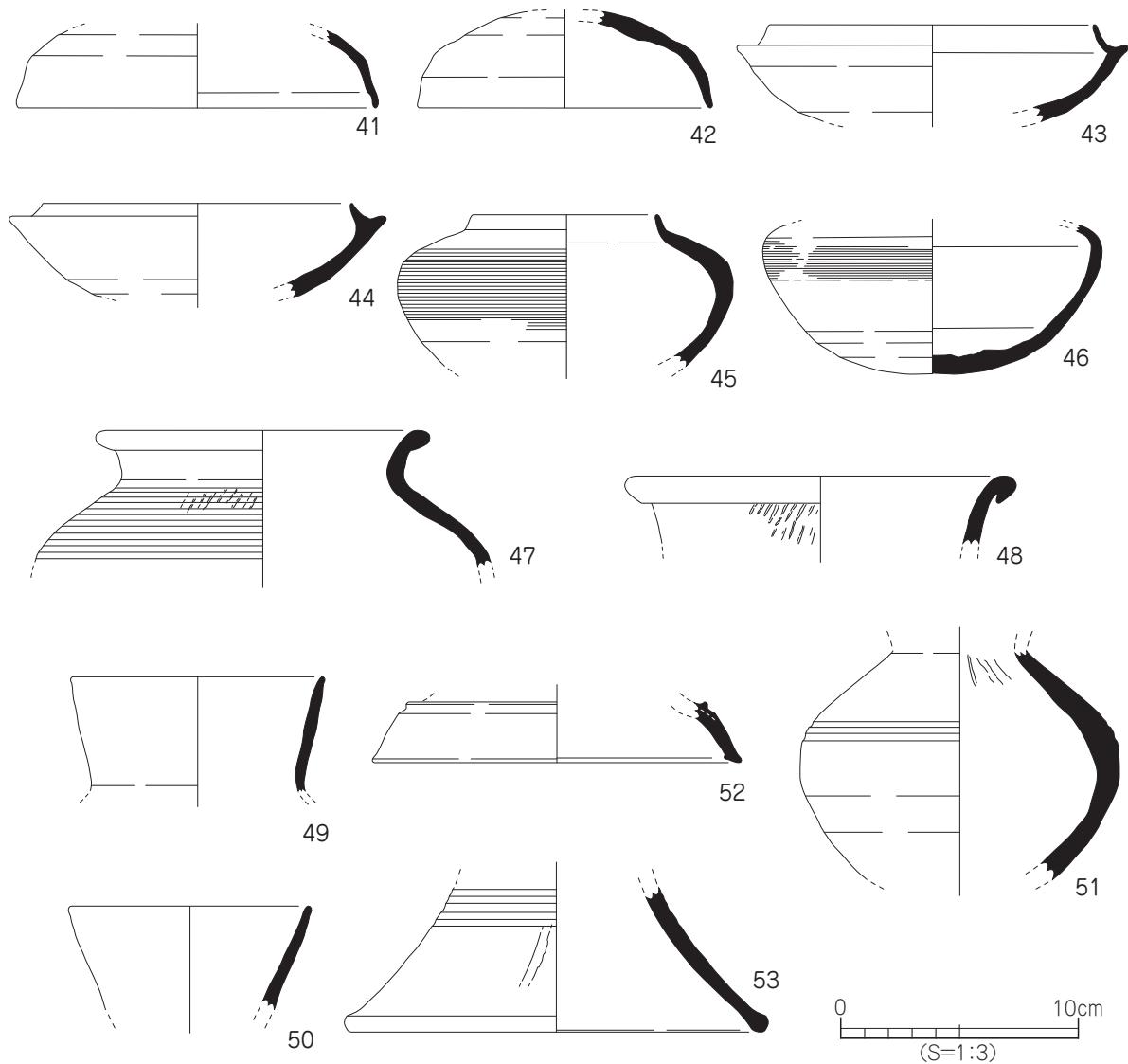


第49図 1号石室遺物出土状況図

出土遺物（第 50 図、図版 22・23）

須恵器（41～53）

41・42 は壺蓋で、天井部と口縁部境に稜をもち、口縁端部内面に段をもつ。42 は天井部と口縁部境の稜は丸みをもち、口縁端部は丸くおさめる。43・44 は壺身で、口縁部は内傾して立ち上がり、受部内面に沈線をもつ。45・46 は短頸壺である。45 は張り気味の肩部から口縁部は内傾して短く立ち上がる。肩部から胴中部にかけて回転カキ目調整を施す。46 は張りの強い肩部付近に回転カキ目調整を施す。47・48 は広口壺である。47 は外反する頸部に口縁端部は丸くおさまり、肩部に回転カキ目調整を施す。48 は口縁部は外反し端部を下方に折り曲げる。49～51 は直口壺で、49 は外反気味の口縁部に端部は丸くおさまる。50 は外反する口縁部に端部は丸くおさまる。51 は肩部に 2 条の凹線文が巡る。52 は脚付壺の脚部で、脚外面に 1 条の凹線文を巡らし、脚端部は平らな面をなし接地する。53 は高壺の脚部で、外反する底部付近に長方形の透かしをもつ。



第 50 図 1 号石室出土遺物実測図 (1)

装身具 (54 ~ 64)

54 は碧玉製の管玉で、長さ 2.4cm、外径 0.9cm、孔径 0.1 ~ 0.3cm、重さ 4.36g を測る。55 ~ 60 は土玉で、外径 0.54 ~ 0.85cm、厚さ 0.42 ~ 0.60cm、孔径 0.17 ~ 0.20cm、重さ 0.124 ~ 0.384g を測る。61 ~ 64 はガラス玉。外径 0.45 ~ 0.80cm、厚さ 0.26 ~ 0.54cm、孔径 0.10 ~ 0.20cm、重さ 0.073 ~ 0.521g を測る。色調は黄色、緑色、濃紺色の 3 色に分けられる。

鉄製品 (65 ~ 78)**刀 (65・66)**

65 は身部片で木質が残存する。66 は茎部片で木質が残存する。

鉄鎌 (67 ~ 74)

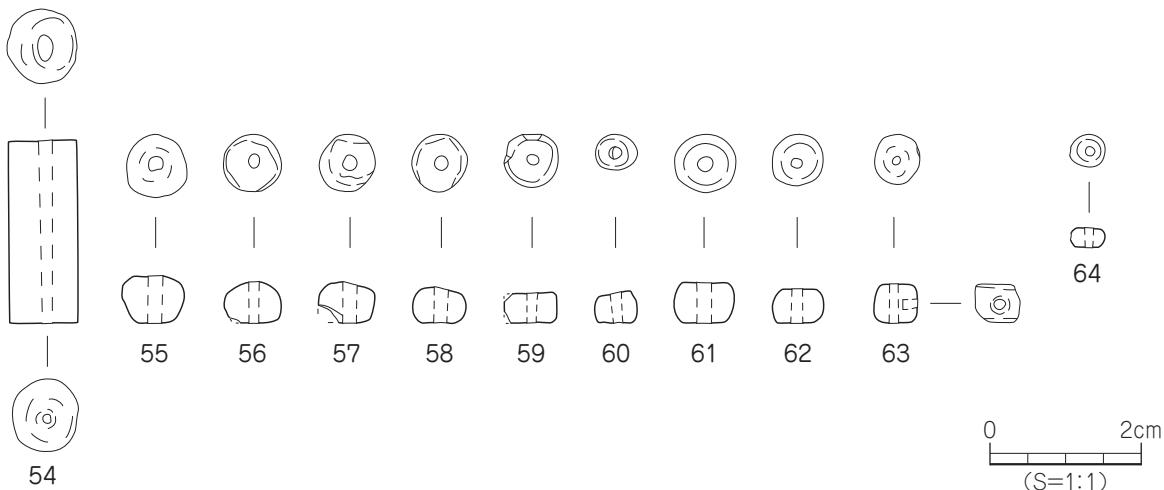
67・68 は平根鎌で、67 は鎌身外形が三角形で鎌身部は片丸造、鎌身関と頸関は角関である。68 は鎌身関が腸抉形で鎌身部は平造である。69 は鎌身外形が圭頭形で鎌身部は平造である。70 は鎌身外形が方頭形の平造である。71 ~ 74 は長頸鎌で、71 は鎌身外形が片刃形で鎌身部は片丸造、鎌身関部は角関である。72 は鋒が欠失していて鎌身外形は不明。鎌身部は片丸造である。73 は鎌身部片で外形は不明。74 は茎部片で矢竹の内面や下巻きの痕跡が残る。

馬具 (75 ~ 77)

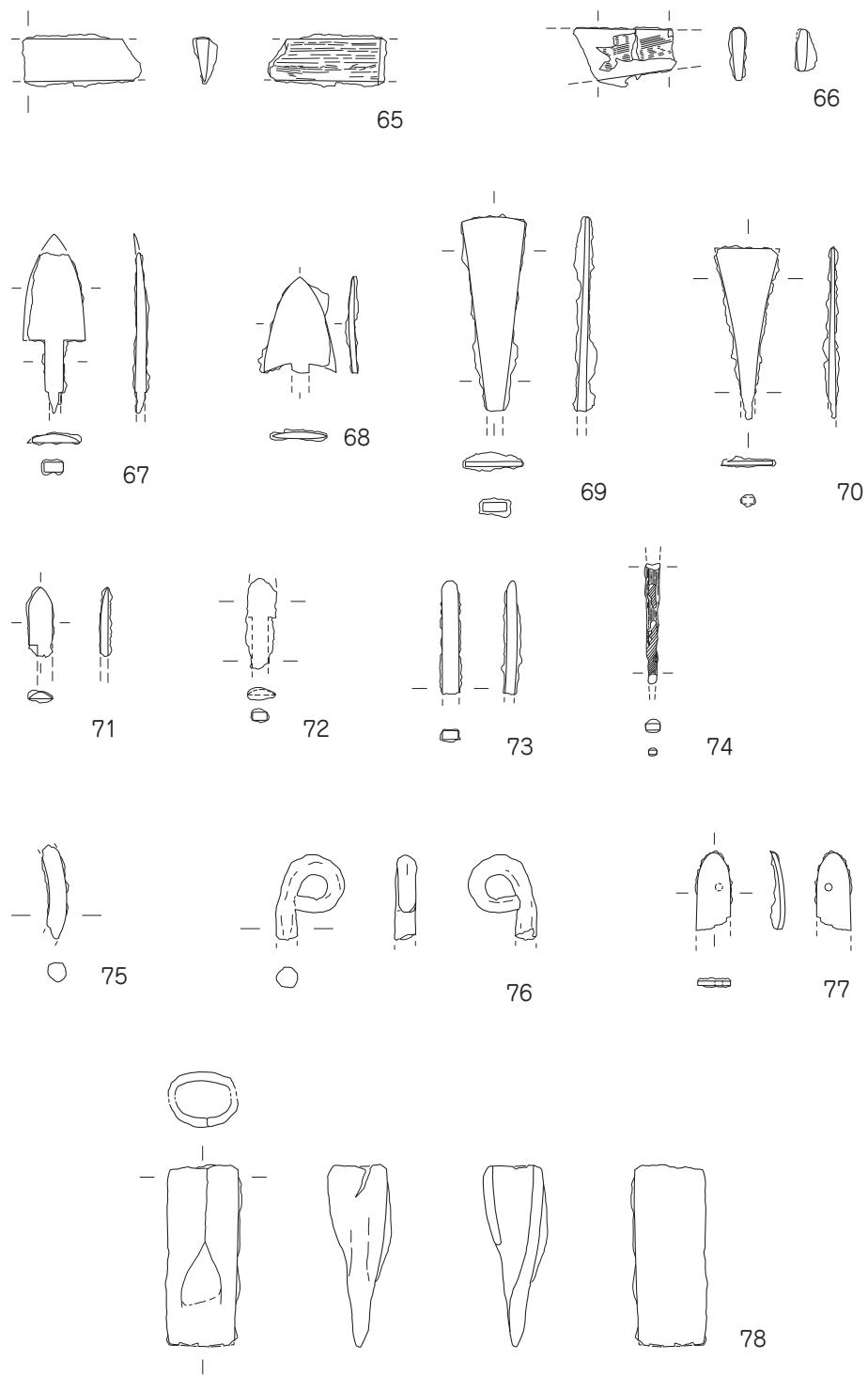
75 は轡の環状鏡板片と思われる。76 は引手の破片である。77 は雲珠又は辻金具の脚部片で鉢孔がある。

伐採具 (78)

78 は鉄斧の完存品で、断面楕円形の柄受け部をもち無肩で袋部折り曲げが丁寧につき合わされる。全長 7.7cm、刃幅 2.9cm、基部幅 2.9cm、基部厚 2.6cm、重さ 75.313g を測る。



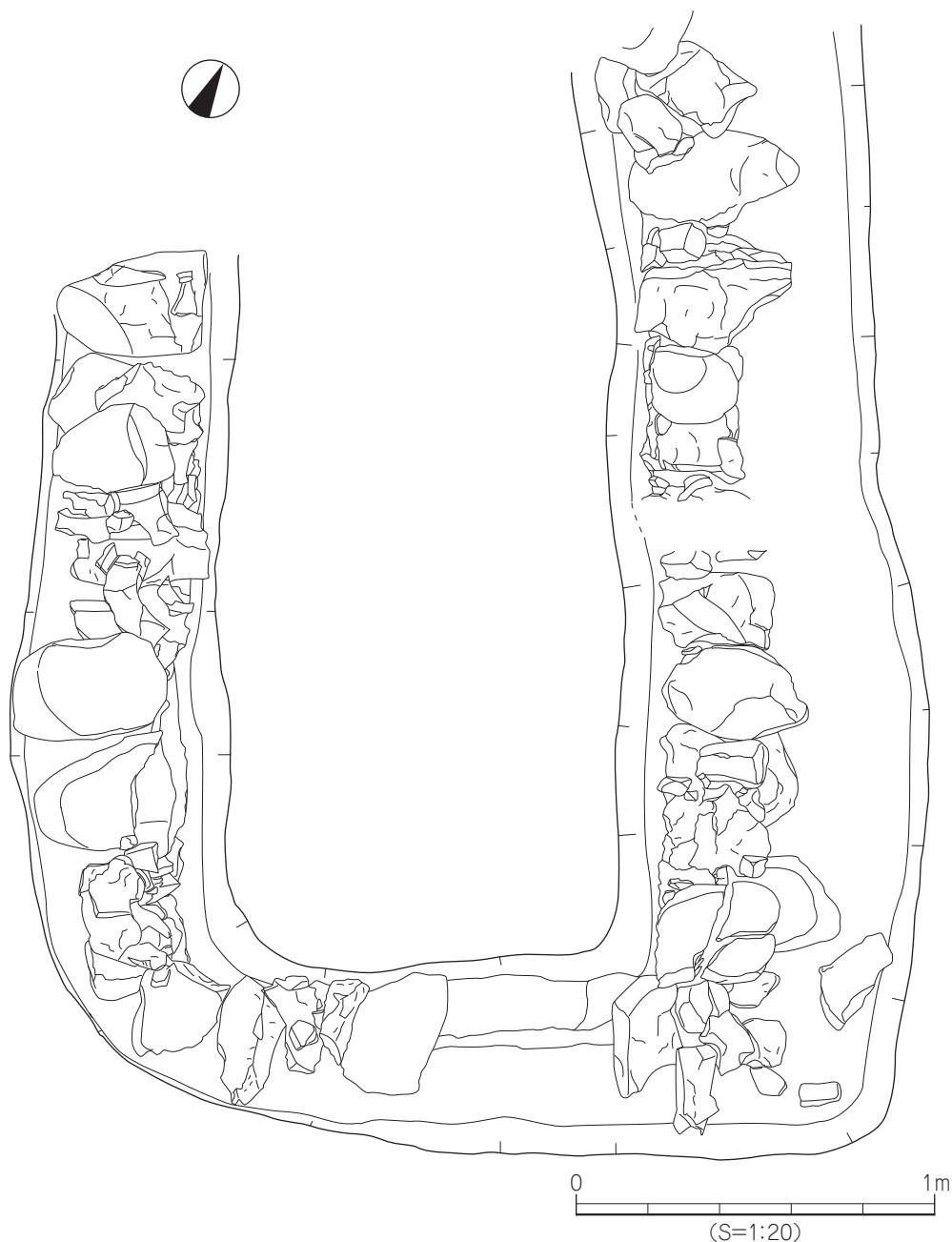
第 51 図 1 号石室出土遺物実測図 (2)



第 52 図 1 号石室出土遺物実測図 (3)

(4) 2号石室（第 53～56 図、図版 15・16）

2号石室は調査区北端のC2～D4区で検出し、奥壁は調査区外に延びる。墳丘の盛土は後世の削平により消失しており、残存状況から南方向に開口する片袖式の横穴式石室と想定する。石室の遺存状況は、側壁、奥壁とも、基底部の1段～2段を残すのみであった。玄室の床全面は小さな河原石による礫床で、その上面では西北部からは人骨、中央部付近には土玉やガラス小玉などの装身具、南壁付近には須恵器の壺や鉄鏃などが比較的多く出土した。



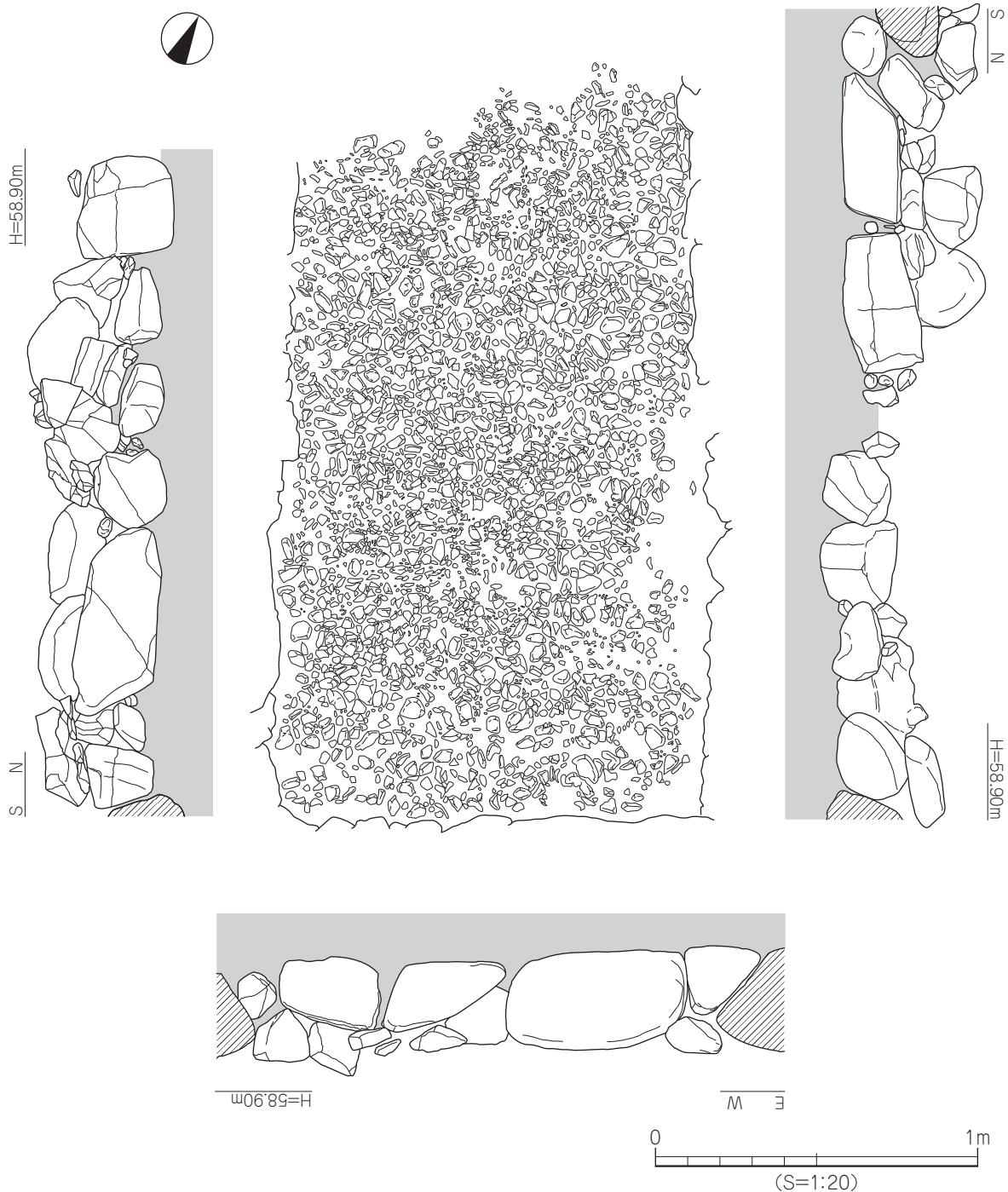
第 53 図 2号石室平面図



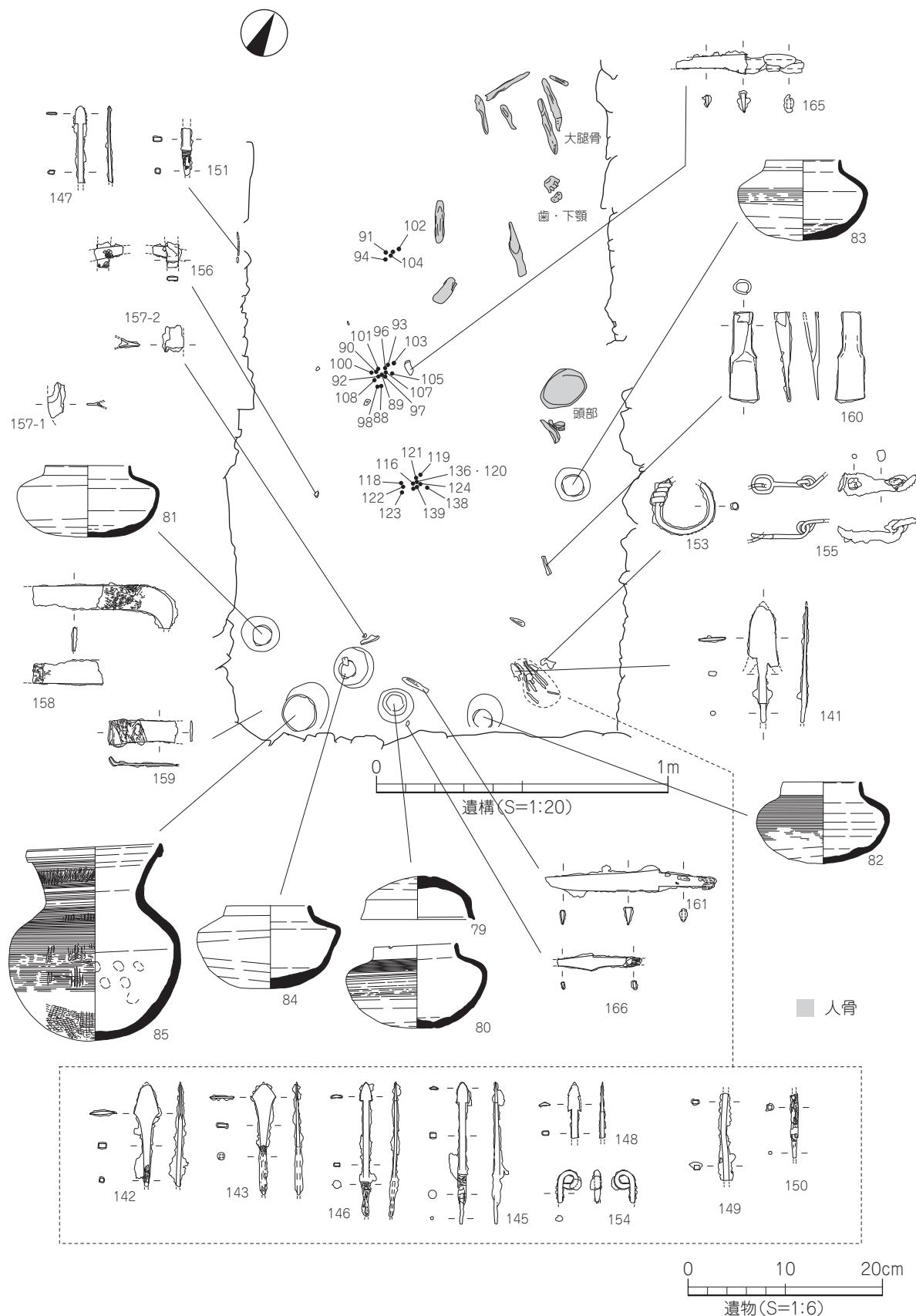
第 54 図 2 号石室床面状況図

被葬者と遺物の出土状況（第 56 図、図版 11～13）

石室床面の礫床上面からは須恵器や鉄製品、装飾品や人骨が検出された。人骨は頭部と下肢部が僅かに見つかり、頭部には下顎骨に歯が釘着していた。頭蓋骨や下顎骨は石室中央部の東側側壁付近で見つかり、大腿骨が石室東北部に集中した状況である。須恵器や鉄製品などの副葬品は玄室南端に置かれた状態で検出した。なかには蓋を伴う短頸壺があるが容器内の内容物はない状態であった。装飾品は玄室中央部付近に集中しており馬具や刀子は石室南側に散在する。鉄鏃は長頸鏃を中心に南東隅に纏った状態で出土した。



第 55 図 2 号石室展開図

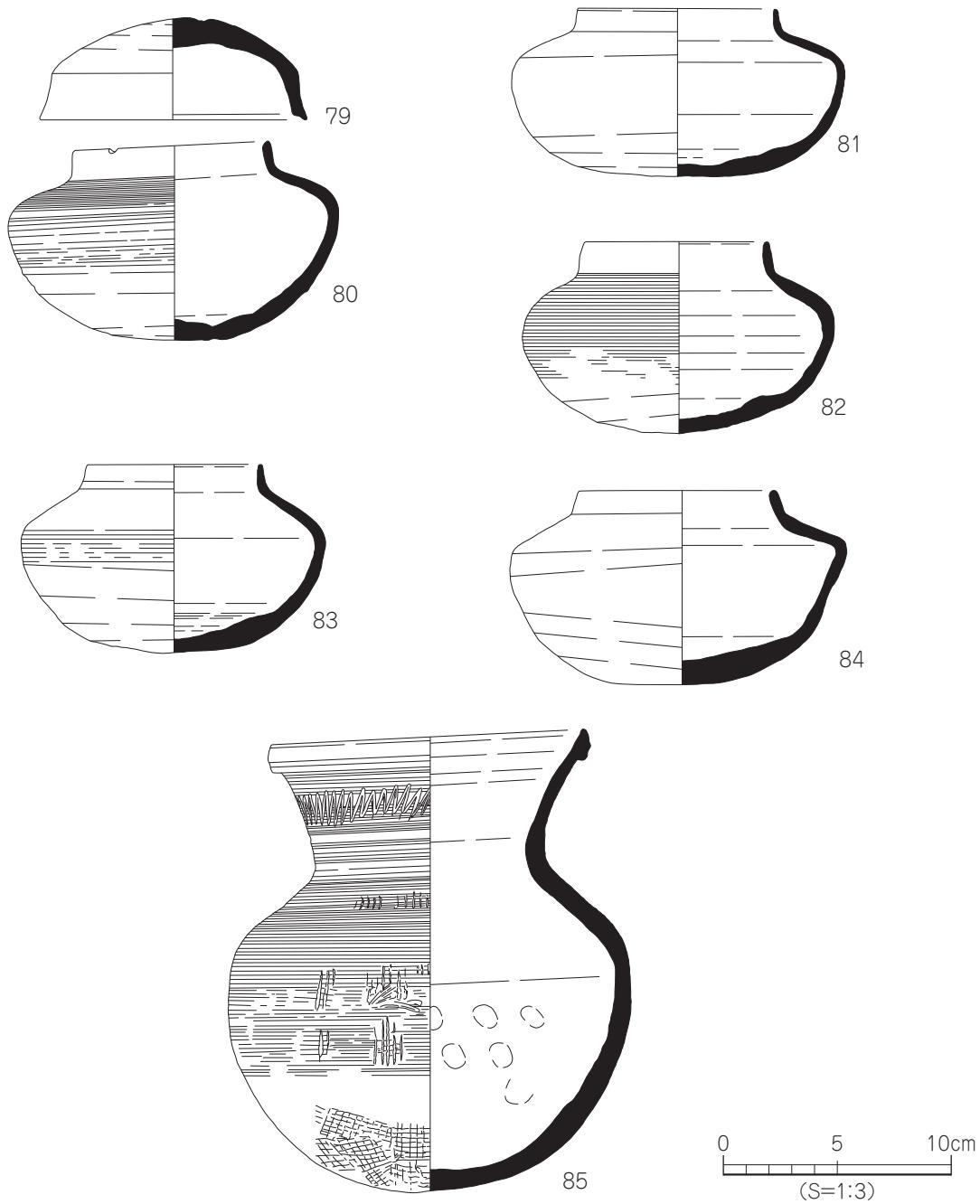


第 56 図 2号石室出土遺物・埋葬者配置状況図

出土遺物（第 57～61 図、図版 24～26）

須恵器（79～85）

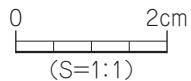
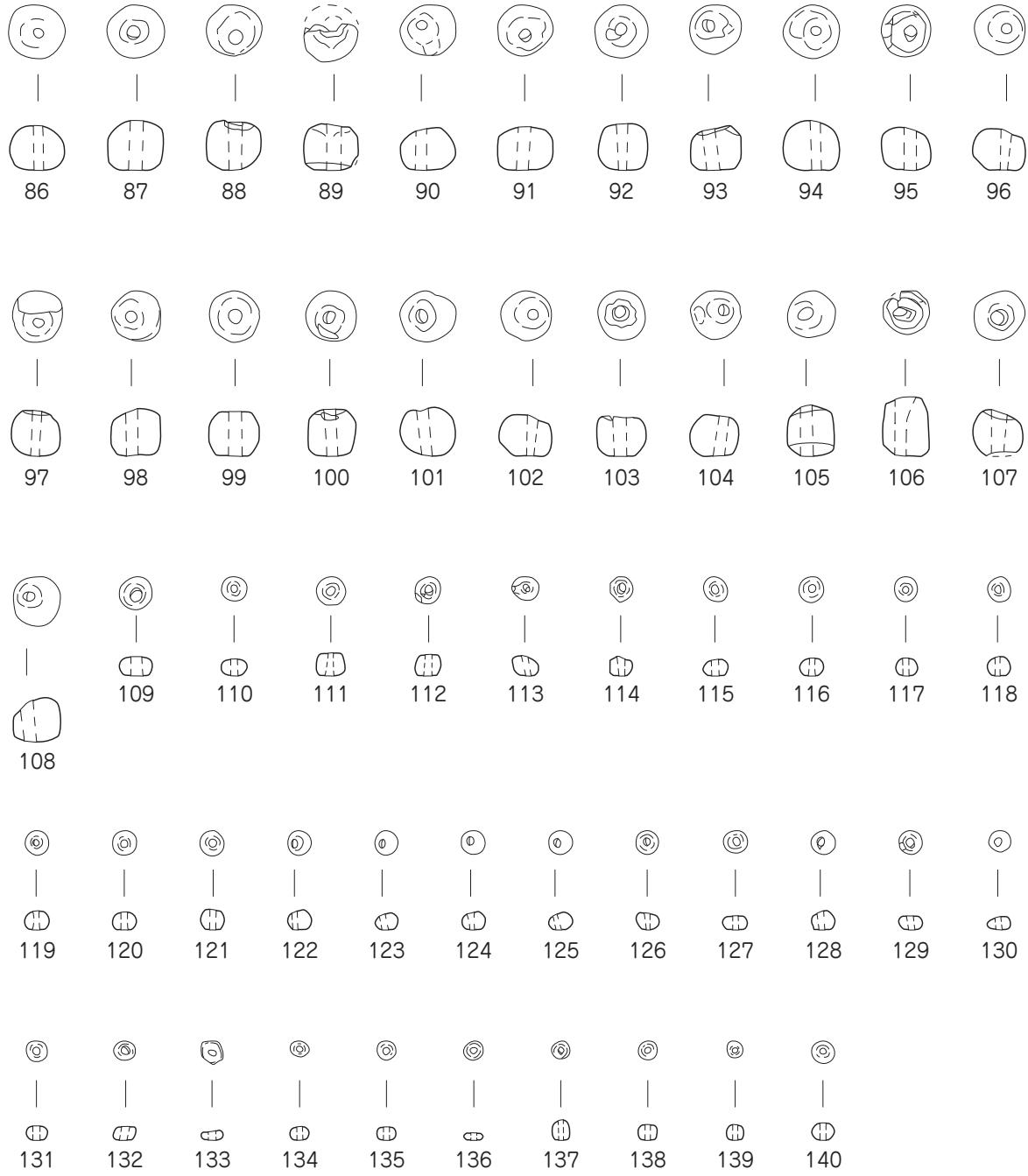
79 は蓋で、短頸壺 80 に被さった状態で出土した。天井部境に稜をもち、やや外反する口縁部の端部に不明瞭な段をもつ。80～84 は短頸壺で、肩部に張りをもち、80～83 は口縁部が直立気味に短くのび、外面にカキ目調整を施す。84 は内傾気味の口縁部をもつ。85 は広口壺である。球状の胴部から口縁部は緩やかに外反し、端部は肥厚し 1 条の沈線文、頸部に 1 条の波状文が巡る。



第 57 図 2 号石室出土遺物実測図（1）

装身具 (86 ~ 140)

86 ~ 108 は土玉で、外径 0.70 ~ 0.87cm、厚さ 0.63 ~ 0.75cm、孔径 0.10 ~ 0.25cm、重さ 0.381 ~ 0.564g を測る。109 ~ 140 はガラス玉で、外径 0.27 ~ 0.50cm、厚さ 0.12 ~ 0.35cm、孔径 0.09 ~ 0.15cm、重さ 0.014 ~ 0.103g を測る。色調は緑色、水色、青色、濃青色の 4 色に分けられる。

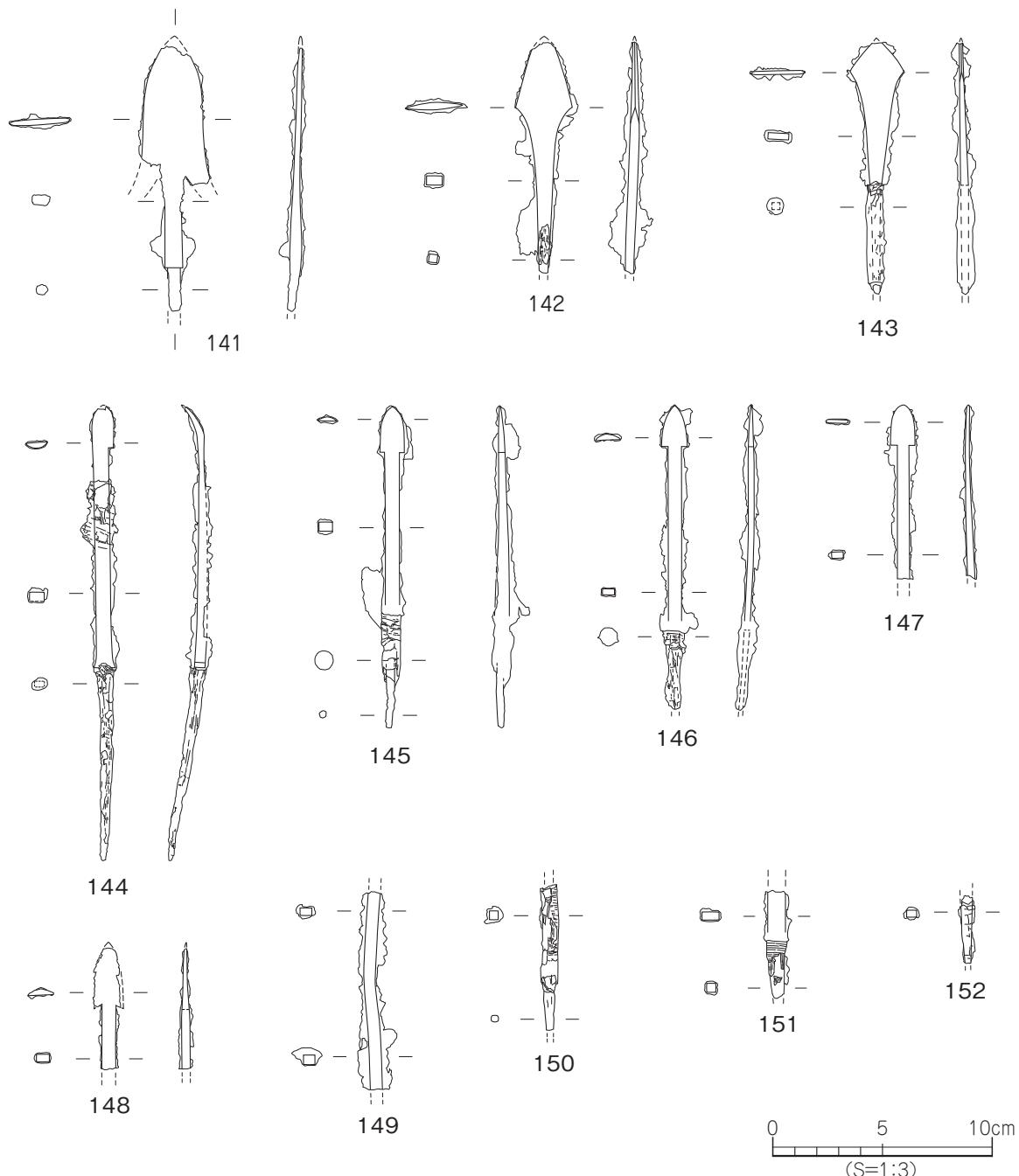


第 58 図 2 号石室出土遺物実測図 (2)

鉄製品 (141 ~ 167)

鉄鎌 (141 ~ 152)

141 は平根鎌で鎌身外形が長三角形の平造、鎌身関の腸抉は欠失する。142・143 は鎌身関にナデ関をもち、142 の鎌身外形は長三角形の両丸造、143 は三角形の平造で茎部に矢柄が残存する。144 ~ 152 は長頸鎌で、144 の鎌身外形は柳葉形の片丸造で鎌身関部は片刃である。長さ 20.6cm、幅 1.7cm、厚さ 0.8cm、重さ 18.262g を測る。範被関部は台形関で茎部に矢柄が僅かに残存する。146 は鎌身外形が三角形の片丸造で、鎌身関は角関である。茎部に矢柄が僅かに、茎関部分には樹皮様上巻きが



第 59 図 2 号石室出土遺物実測図 (3)

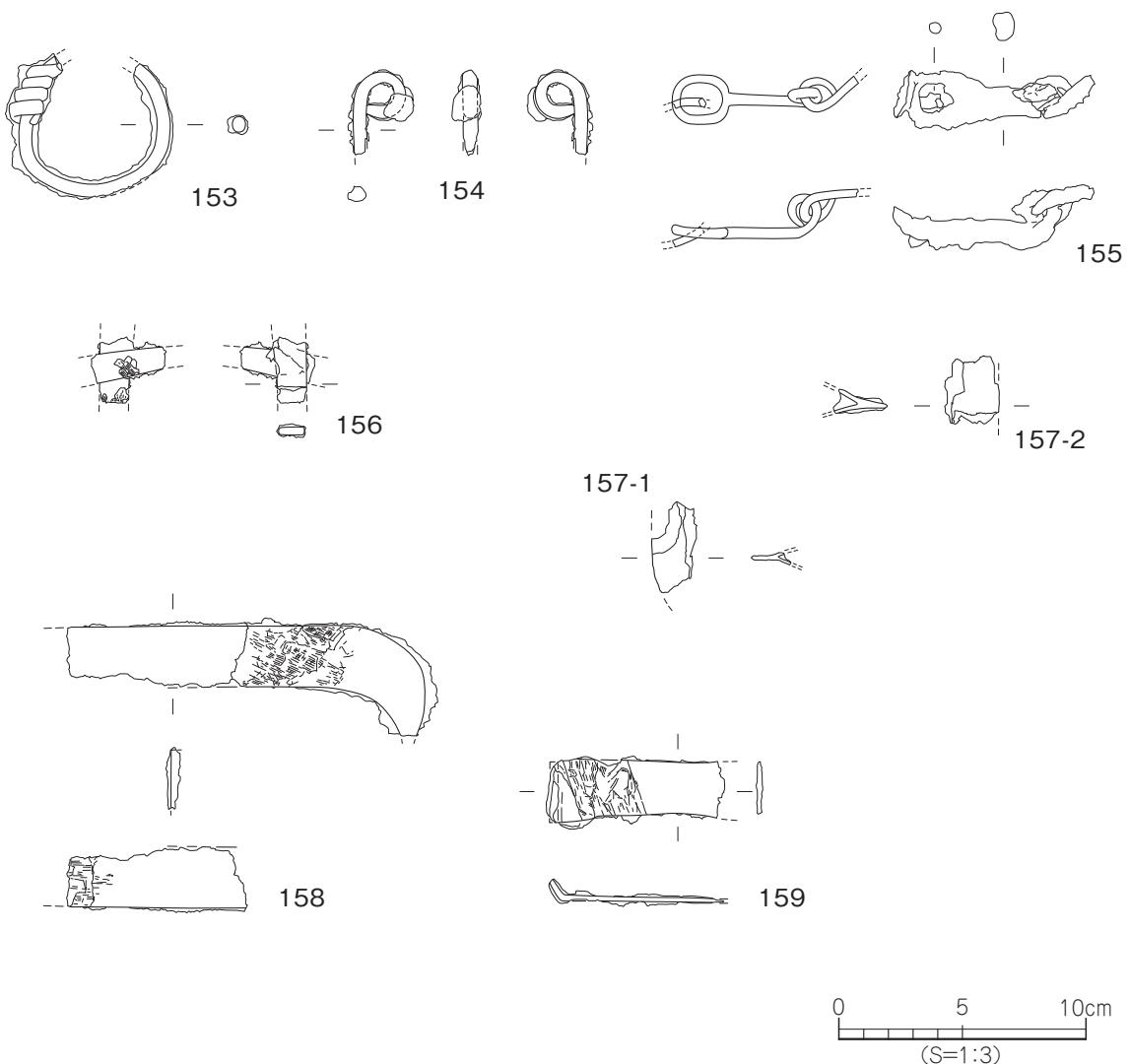
残存する。145～148の鎌身外形は三角形で、145・147の鎌身関は角関、148は鎌身に刺逆をもつ。145・148は片丸造りで、147は平造である。149は頸部、150は頸部から茎部片で、頸部に矢竹と樹皮様上巻きが残存する。151は茎関部片で、樹皮様上巻きが残存する。152は茎部片で矢柄が僅かに残存する。

馬具 (153～156)

153～154は轡である。153は鏡板で外径5.9cmの素環で、素環に鉄線4条の巻きがある。154は引手である。155は銜で2本が連結する。156は縦横に断面長方形状の鉄板が鋲着している。表面には布目が残存する。形状などから鞍橋の一部と考える。

農工具 (157～159)

157はU字形鋤鍬先の刃部片である。158・159は鉄鎌で、158は曲刃鎌で先端部が緩く刃側に湾曲する。基部を短く直角に折り曲げている。刃部に布目、東柄部に木質が残存する。159は基部に短い折り返しをもち、基部隅が四角形である。東柄部に斜め方向の木質が残存する。



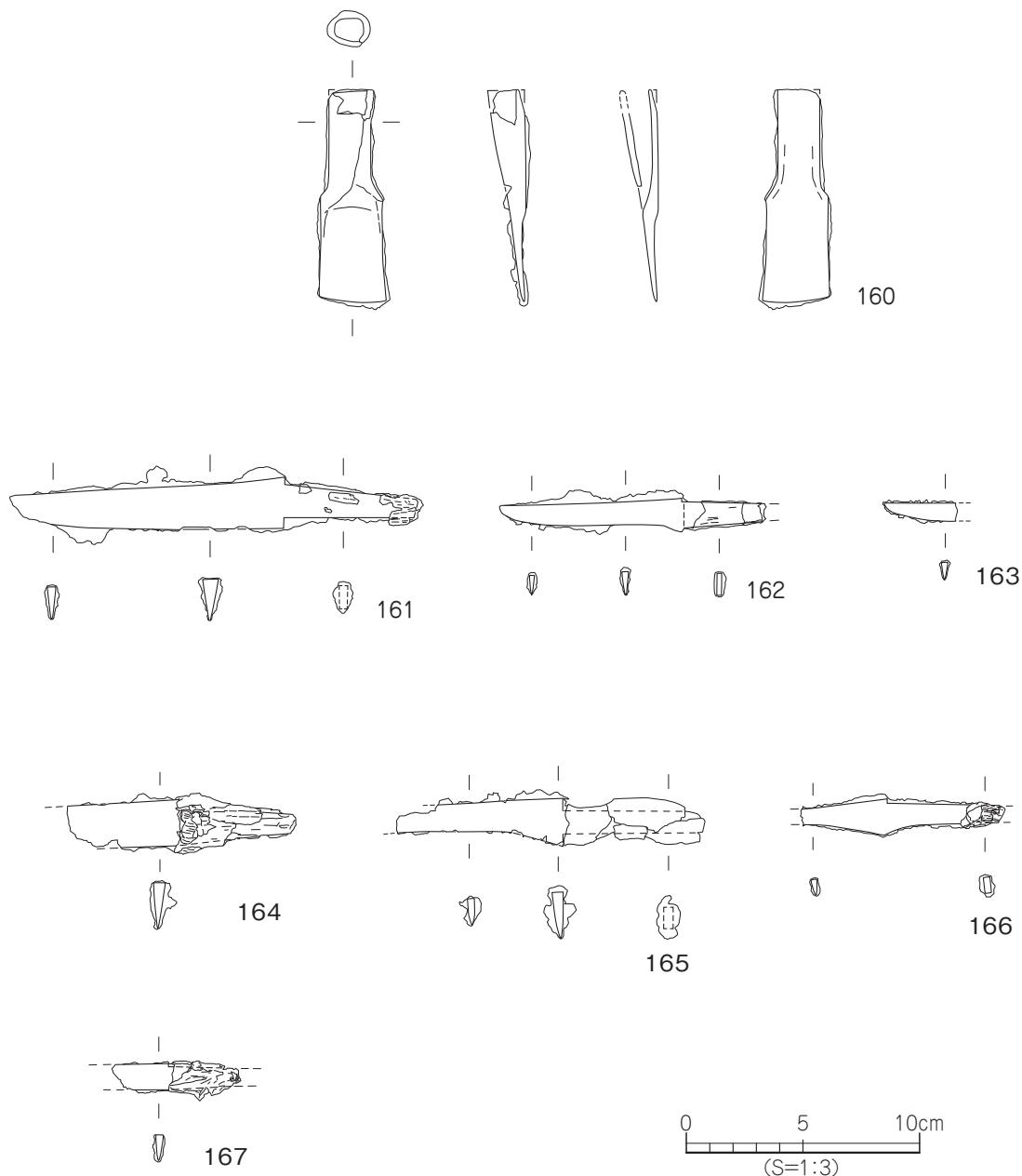
第60図 2号石室出土遺物実測図 (4)

伐採具 (160)

160 は鉄斧で断面楕円形の袋状受け部をもち、袋部と刃部の境界部分の両肩は明瞭な段を有する。全長 9.4cm、刃幅 3.1cm、基部幅 1.9cm、基部厚 1.6cm、重さ 40.252g を測る。

刀子 (161 ~ 167)

161 は長さ 17.6cm で、鹿角の柄部をもつ。162 は残存長 11.4cm で柄部に木質が残存する。163 は刀身の鋒部である。164 は木柄が残存する。165・166・167 は鹿角の柄部をもつ。



第 61 図 2 号石室出土遺物実測図 (5)

第4節 小 結

今回の調査は、弥生時代の集落範囲や構造の解明を主目的として行った。調査の結果、弥生時代から古墳時代の遺構や遺物を確認した。以下、内容を説明する。

(1) 地形

祝谷大地ヶ田遺跡の地形は開析谷を中心に南流する永谷川で東西に分かれる。右岸域は急傾斜面であり、左岸域は東から西へ延びる小起伏丘陵先端部の緩傾斜面である。本調査地は、西方から南方に広がる祝谷大地ヶ田遺跡3～7次調査地を見下せる位置にあり、その標高差は9mをもち西方にある永谷川に向けての緩傾斜面に遺跡が存在している。

(2) 繩文時代

遺構は未検出であるが、土坑や柱穴内から弥生土器に混じり縄文土器の浅鉢と深鉢の破片9点が出土した。縄文時代晩期のものが殆どであるが、中には後期のものも含まれる。小片ではあるがローリングは殆ど受けとらず内外面の調整痕は顕著に残っており、本調査地周辺における縄文時代の痕跡を追う資料となる。

(3) 弥生時代

14基検出された土坑の殆どが中期に属するものである。形状や規模・埋土などからSK1・2・5～9・11・12の9基は貯蔵穴と考える。平面形態が橢円形のものが多く断面形態は袋状や逆台形、直径0.94～1.76m、深さ0.16～1.3m、平面形態が隅丸方形のものは断面形態が逆台形で長軸2.2mの規模で橢円形のものより規模が大きい特徴をもつ。埋土の堆積状況は単一層で埋没するものが殆どであるが、複数層で傾斜堆積をするものもある。土坑内から出土した遺物は土器片ばかりであり、弥生時代中期中葉の土坑に混じり、前期末から中期初頭のものが含まれる。土坑のほかに柱穴数基を検出したが、その他の遺構は皆無であることから、周辺遺跡に広がる貯蔵穴群の範囲が本調査地まで及ぶことが確認できた。

(4) 古墳時代

祝谷11号墳は2基の埋葬施設をもつ一墳丘2石室である。墳丘は後世の開発により削平されており、石室の遺存状況も悪く、基底部の1～2石しか残存していない状況であったが、両石室とも南へ開口する横穴式石室であることが分かった。周溝は地山を掘り込んだ状態で両端は調査区外に延びるため全容は不明ではあるが、両石室主体部から南方に5～7mの地点を北東から南北方向に延びる。1号石室は玄室と墓道を検出したが、玄室内は近現代の搅乱により遺存状況が悪く、僅かな副葬品が床面直上で検出されただけであった。2号石室の副葬品は玄室内の玄門付近に須恵器や鉄製品があり、装身具は中央部付近に集中しており、人骨片や歯牙は東北部に散乱した状態である。この状況から遺骸は腐敗後に移動されたことも考えられる。2基の石室は副葬された須恵器から6世紀後半から7世紀初頭頃の築造期間の後期古墳と考えるが、盛土が削平され切り合いが確認できないことから、詳細な前後関係は不明である。

今回の調査は狭小な範囲ではあるが、弥生時代中期頃の貯蔵穴や古墳時代後期頃の石室が確認でき、祝谷大地ヶ田遺跡の集落や墳墓の広がりを考えるうえで貴重な資料となった。

遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(1) 遺構一覧表

地 区 欄 グリッド名を記載。

規 模 欄 () は現存値を示す。

出土遺物欄 遺物名称を略記した。

例) 繩→縄文土器、弥→弥生土器、須→須恵器、土→土師器、石→石製品

(2) 遺物観察表

法 量 欄 () : 復元推定値

胎 土 欄 胎土欄は混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、赤色土粒→赤色酸化土粒、黒色土粒→黒色酸化土粒

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~2) → 「1~2mm大の石英・長石を含む」である。

焼 成 欄 焼成欄の略記について

◎→ 良好

表 11 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	時 期
1	D5・6	楕円形	袋状	1.28 × 0.95 × 1.25	淡黄色砂質土 [7.5Y8/3] 他	縩・弥	弥生時代中期 中葉
2	D4 ~ E4	楕円形	逆台形状	1.74 × 1.34 × 0.55	褐色シルト [7.5YR4/3] 他	弥	弥生時代中期 中葉
3	D4 ~ E4	楕円形	レンズ状	0.99 × 0.86 × 0.10	褐色シルト [7.5YR4/3]	弥	弥生時代中期 中葉以降
4	E4 ~ F4	楕円形	レンズ状	1.03 × 0.83 × 0.07	褐色シルト [7.5YR4/3]	弥	弥生時代前期 末~中期初頭
5	D7 ~ E7	楕円形	逆台形状	1.02 × (0.90) × 0.33	褐色シルト [7.5YR4/3]	弥・石	弥生時代中期 中葉
6	E3 ~ F4	楕円形	逆台形状	1.67 × (1.56) × 0.41	淡黄色砂質土 [7.5Y8/3] ・褐色シルト [7.5YR4/3]	弥	弥生時代中期 中葉
7	D5 ~ E5	楕円形	皿状	1.32 × (1.05) × 0.10	褐色シルト [7.5YR4/3]	弥	弥生時代中期 中葉以前
8	C6 ~ C7	隅丸方形	皿状	(1.45) × 1.11 × 0.22	暗灰色土 [N3/0] 他	弥・石	弥生時代中期 中葉
9	C6 ~ C7	楕円形	逆台形状	(1.05) × 0.94 × 0.23	暗灰色土 [N3/0]	弥	弥生時代中期 中葉以前
10	C7	楕円形	皿状	(1.02) × (0.98) × 0.14	暗褐色土 [10YR3/4]	弥・石	弥生時代
11	E2 ~ E3	楕円形	逆台形状	1.32 × 1.04 × 0.30	にぶい赤褐色土 [5YR5/3]	弥	弥生時代中期 中葉
12	E2 ~ F3	長方形	皿状	2.20 × (1.05) × 0.20	黒褐色土 [10YR3/1]	縩・弥	弥生時代中期 中葉
13	C5 ~ C6	楕円形	逆台形状	(0.94) × (0.52) × 0.17	暗褐色土 [10YR3/4]	—	弥生時代
14	B6 ~ B7	楕円形	レンズ状	1.18 × (0.51) × 0.15	黒褐色土 [10YR3/1]	弥	弥生時代中期 後半

遺物観察表

表 12 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口径 (24.4) 残高 2.6	逆L字形の口縁。端部は「コ」字状をなす。	ハケ→ミガキ	指頭痕	乳白褐色 乳灰褐色	石・長 (1~2) ○		20
2	甕	口径 (21.8) 残高 1.0	大きく外反する折り曲げ口縁。端部は丸みをもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) ○		
3	甕	口径 (24.2) 残高 6.7	「く」字状の口縁部。端部は丸みをもつ。	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ	明茶色 明茶色	石・長 (1) ○		20
4	甕	口径 (28.5) 残高 1.6	大きく外反する折り曲げ口縁。端部は丸みをもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ・ ヘラミガキ	茶色 茶色	石・長 (1~2) ○		
5	甕	底径 (6.9) 残高 3.4	平底の底部。	ハケ→ミガキ ナデ・指頭痕	ナデ・ミガキ	乳白褐色 乳白褐色	石・長 (1~3) ○		
6	壺	口径 (11.1) 残高 2.9	逆L字形の口縁。端部は丸く納まり、端部よりやや下方に断面三角形状の貼付凸帯をもつ。	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	淡茶色 明茶色	石・長 (1~3) ○		20
7	壺	口径 (15.6) 残高 7.3	外反する口縁。端部は貝殻腹縁による斜格子文。頸部の貼付凸帯には指頭圧痕がある。	ハケ(10本/cm) ・ナデ	マメツ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1~3) ○		20
8	壺	口径 (19.3) 残高 4.4	外反する口縁。端部は平らな面をなし、下方にやや肥厚する。	ハケ→ヨコナデ ハケ→ナデ	ハケ→ミガキ ヨコナデ	乳橙色 乳橙色	石・長 (1~2) ○		20
9	壺	残高 4.4	内湾する肩部付近に12条の沈線文とその下方に竹管文。頸部の貼付凸帯には刺突文がある。	ナデ	ナデ	明茶色 明茶色	石・長 (1~2) ○		20
10	深鉢	残高 4.9	やや内湾気味に立ち上がる胴部片。	ケズリ	ミガキ・ナデ	黄褐色 黒褐色	石・長 (1~3) 金 ○		
11	深鉢	残高 4.0	緩やかに外反する頸部付近。	マメツ	ナデ・ミガキ	黒灰色 黄褐色	石・長 (1~3) ○		

表 13 SK2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
12	甕	口径 (20.4) 残高 5.1	内傾する口縁部。断面三角形状の貼付口縁をもつ。	ハケ・ミガキ・ ナデ	ミガキ (マメツ)	橙色 橙色	石・長 (1~2) 赤色土粒 ○		
13	甕	口径 (22.1) 残高 10.1	逆L字形の口縁。端部は丸味をもち、上胴部はやや内傾する。	ハケ(12本/cm) →ミガキ ・ヨコナデ	ミガキ・ナデ (指頭痕)	灰橙褐色 灰褐色	石・長 (1~3) ○	黒斑 煤付着	20
14	壺	残高 12.0	やや内湾する上胴部に4条の沈線文。その一部は綫に沈線文を施し、格子状となる。	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長 (1~3) ○	黒斑?	20
15	壺	残高 5.4	内湾する肩部と頸部の境付近に断面三角形上の貼付凸帯をもち、その一部には押圧痕がある。	ハケ(6~7本/cm) ・ヨコナデ	ハケ(6~7本/cm) →ミガキ	褐色 淡茶色	石・長 (1~3) ○	黒斑	20
16	壺	底径 (6.4) 残高 2.5	平底の底部から内湾気味に立ち上がる。	ハケ→ナデ	マメツ	灰褐色 茶色	石・長 (1~3) ○	黒斑	
17	鉢	口径 (21.2) 残高 9.5	内湾する上胴部に逆L字形の口縁。口縁端部は「コ」字状をなす。	ナデ	ヨコナデ	赤褐色 橙色	石・長 (1~3) ○		20

表 14 SK4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
18	甕	口径 (19.2) 底径 (6.8) 器高 23.2	平底の底部から内湾して立ち上がる。逆L字形の口縁。端部は丸みをもつ。上胴部に刺突文がある。	ハケ (5本/cm) ・ヘラミガキ	ナデ・ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) 赤色土粒 ○	黒斑	21

表 15 SK6 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
19	甕	口径 (19.2) 残高 3.9	逆L字形の口縁。端部は「コ」字状をなす。	ハケ (9本/cm) ・ヨコナデ	ハケ・ミガキ・ ナデ・指頭痕	橙褐色 橙褐色	石・長 (1~2) ◎		21
20	壺	口径 (15.4) 残高 3.7	内湾気味の頸部。外反する口縁部は端部が下方にやや肥厚する。	ヨコナデ	ミガキ	褐色 褐色	密 ◎		21
21	壺	底径 (8.0) 器高 5.1	平底の底部付近はややくびれ、内湾気味に立ち上がる。	ハケ→ミガキ ・ナデ	ミガキ・指頭痕	乳灰褐色 乳白褐色	石・長 (1~3) ◎		21
22	壺	底径 (9.2) 残高 3.3	平底の底部。	ミガキ・指頭痕	マメツ	乳褐色 灰褐色	石・長 (1~2) ◎		21

表 16 SK8 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
23	壺	口径 (16.8) 残高 2.7	逆L字形の口縁。端部は「コ」字状をなす。	ミガキ ・ヨコナデ	ハケ→ミガキ ヨコナデ	褐色 茶褐色	石・長 (1~4) ◎		21

表 17 SK8 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
24	砥石	完存品	石英粗面岩	13.8	6.6	5.0	916.73		21

表 18 SK11 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
25	壺	口径 (36.2) 残高 5.6	外反する口縁部。端部は下方に肥厚し端面に「ハ」字状文。口縁内面には渦巻状や2条の貼付凸帯に刻目をもつ。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石・長 (1~2) 金 ◎		21

表 19 SK12 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
26	甕	口径 (24.5) 残高 2.7	逆L字形の口縁。端部は丸みをもつ。	ヨコナデ	ミガキ・ナデ	乳灰褐色 橙褐色	石・長 (1~3) ◎		21
27	甕	口径 (22.5) 残高 1.7	外反する口縁端部は丸みをもつ。	ミガキ・ヨコナデ	ミガキ→ナデ ハケ→ミガキ	乳褐色 乳褐色	石・長 (1~3) ◎		21
28	甕	口径 (19.0) 残高 1.3	「コ」字状の口縁端部に刻目がある。	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ	暗茶色 茶色	石・長 (1~2) ◎		21
29	壺	口径 (18.0) 残高 2.6	外反する口縁端部は下方に肥厚する。	ハケ (6本/cm) →ナデ ヨコナデ	ミガキ・ヨコナデ	乳茶褐色 茶褐色	石・長 (1~3) ◎		21
30	壺	残高 3.1	頸部の貼付凸帯に押圧痕がある。	ミガキ	ミガキ・ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) ◎		21
31	壺	底径 (6.0) 残高 10.3	平底の底部からやや内湾気味に立ち上がる。	ハケ・ナデ	工具ナデ	茶色 茶色	石・長 (1~3) 赤色土粒 ◎	黒斑	

表 20 SK14 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
32	甕	口径 (20.2) 残高 16.6	逆L字形の口縁。端部は「コ」字状をなす。	ハケ (7本/cm) ミガキ	ナデ	明茶色 明茶色	石・長 (1~3) ◎	黒斑	21
33	甕	底径 6.2 残高 4.0	小さくくびれる上げ底である。	ナデ	ナデ	茶色 暗茶色	石・長 (1~3) ◎		21

遺物観察表

表 21 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) (内面) 色調	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
34	深鉢	残高 5.6	外反気味の口縁部端部に押圧痕、口縁外面に刺突文がある。	繩文	繩文	赤茶褐色 赤茶褐色	石・長 (1~2) 金 ○	SK1	22
35	甕	口径 (19.1) 残高 2.1	「く」字状の口縁。端部は「コ」字状をなす。	ハケ→ミガキ ・ナデ	ハケ→ミガキ →ナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	石・長 (1~4) ○	SP1	
36	甕	残高 1.5	内湾気味の口縁。端部は外方に延びる。	ハケ→ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	橙褐色 橙褐色	石・長 (1~2) ○	SP1	
37	甕	残高 3.7	直立気味の口縁部。端部は外方に延びる。	マメツ	ハケ→ミガキ →ナデ	淡黄褐色 明褐色	石・長 (1~2) ○	SP2	
38	壺	口径 (19.3) 残高 3.9	外反する口縁部。端部は下方に粘土紐を貼付け肥厚する。	マメツ	ミガキ・ナデ	淡橙褐色 淡黄褐色	石・長 (1~4) ○	SP8 黒斑	22
39	壺	口径 (14.2) 残高 1.1	大きく外反する口縁。端部は下方に肥厚する。	ハケ→ヨコナデ	ミガキ	橙褐色 橙褐色	石・長 (1) ○	SP2	
40	壺	残高 5.1	内湾する上胴部から外反する頸部をもつ。	ハケ(7~8本/cm) →ミガキ	ハケ(10本/cm) →ナデ→ミガキ	乳橙褐色 淡黄褐色	石・長 (1) ○	SP1	

表 22 1号石室出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) (内面) 色調	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
41	坏蓋	口径 (15.0) 残高 3.2	天井部と口縁部境に稜をもち、口縁端部内面に段をもつ。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密、石・長 (1) ○		22
42	坏蓋	口径 (12.2) 残高 4.0	天井部と口縁部境の稜は丸みをもち、口縁端部は丸くおさめる。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 暗灰色	密、石・長 (1~3) ○		22
43	坏身	口径 (13.6) 残高 4.0	口縁部は内傾して立ち上がり、受部内面に沈線をもつ。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰オリーブ色	密、石・長 (1~2) ○		22
44	坏身	口径 (12.9) 残高 3.9	口縁部は内傾して立ち上がり、受部内面に沈線をもつ。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ○		22
45	壺	口径 (7.6) 残高 6.3	肩の張る体部。口縁部は内傾して短く延び、端部は丸くおさめる。短頸壺。	回転ヘラケズリ カキメ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密、石・長 (1~2) ○		
46	壺	残高 6.2	扁平な胴部に肩部が張る。短頸壺。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長 (1~2) ○		22
47	壺	口径 (13.9) 残高 5.7	外反する頸部に口縁端部は外方に丸くおさめる。	回転ナデ 平行叩き→回転カキ目	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○	自然釉	22
48	壺	口径 (15.7) 残高 2.8	口縁部は外反して立ち上がり、端部を下方に折り曲げる。	平行叩き→ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		22
49	壺	口径 (10.5) 残高 4.7	口縁部は外反気味で、端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密、石・長 (1) ○		22
50	壺	口径 (10.0) 残高 4.3	口縁部は外反して立ち上がり、端部は丸くおさめる。直口壺。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ○		22
51	壺	残高 9.5	肩部に2条の凹線をもつ。直口壺。	回転ナデ 回転ヘラケズリ 回転ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ○		22
52	壺	底径 (15.3) 残高 3.0	脚外面に1条の凹線を巡らし、脚端は平らな面をなし接地する。脚付壺。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 黒色土粒 ○		
53	高坏	底径 (17.1) 残高 6.0	外反する底部付近に長方形の透かしをもつ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		

祝谷大地ヶ田遺跡 8次調査

表23 1号石室出土遺物観察表 装身具

番号	器種	残存	材質	色	法量				備考	図版
					長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
54	管玉	完形	碧玉	緑	2.40	0.8~0.9	0.1~0.3	4.360		23
55	土玉	完形	土	黒褐色	0.60	0.85	0.20	0.384		23
56	土玉	ほぼ完形	土	黒色	0.55	0.78	0.15	0.378		23
57	土玉	ほぼ完形	土	黒色	0.54	0.78	0.20	0.299		23
58	土玉	完形	土	黒色	0.49	0.75	0.18	0.297		23
59	土玉	ほぼ完形	土	黒褐色	0.42	0.74	0.18	0.267		23
60	土玉	完形	土	黒褐色	0.43	0.54	0.17	0.124		23
61	丸玉	完形	ガラス	濃紺	0.54	0.80	0.20	0.521		23
62	丸玉	完形	ガラス	濃紺	0.47	0.72	0.15	0.376		23
63	ガラス玉	完形	ガラス	緑	0.50	0.60	0.10	0.269	側面に穿孔あり	23
64	ガラス玉	完形	ガラス	黄色	0.26	0.45	0.13	0.073		23

表24 1号石室出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
65	刀	刀身部一部	鉄	6.0	2.2	1.1	17.14	木質が残存	23
66	刀	茎部の一部	鉄	4.4	2.5	0.9	12.80	木質が残存	23
67	鎌	身部・茎の一部欠損	鉄	6.8	4.8	2.4	10.65	平根	23
68	鎌	刀身部一部	鉄	4.1	2.6	0.4	5.71	平根	23
69	鎌	鎌身部のみ	鉄	8.3	2.8	1.0	24.81		23
70	鎌	鎌身部	鉄	7.3	2.7	0.7	9.94		23
71	鎌	鎌身部のみ	鉄	2.9	1.1	0.5	2.66	長頸	23
72	鎌	鎌身部	鉄	3.8	1.2	0.6	4.80	長頸	23
73	鎌	身部片	鉄	4.8	0.8	0.5	5.57	長頸	23
74	鎌	茎のみ	鉄	5.2	0.6	0.5	1.91	長頸	23
75	轡	環状鏡板の一部	鉄	4.0	0.9	0.8	6.85		
76	引手	一部のみ	鉄	3.6	2.7	0.9	10.70		23
77	雲珠又は辻金具	脚部の一部	鉄	3.4	1.4	0.6	4.47		23
78	斧	完存品	鉄	7.7	3.2	0.6	75.31	袋状	23

遺物観察表

表25 2号石室出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土焼成	備考	図版
				外面	内面				
79	蓋	口径 器高	11.6 4.4	やや扁平な天井部に口縁下部は外反し、端部は不明瞭な段がある。短頸壺の蓋。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色 青灰色	密 ○	24
80	壺	口径 器高	8.7 7.4	肩の張る上胴部に口縁部は直立して短くのび、口縁端部は丸くおさめる。短頸壺。	カキメ→ナデ 回転ヘラケズリ →ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密、石・長(1~3) ○	24
81	壺	口径 器高	8.4 8.5	肩の張る上胴部に口縁部は直立して短くのび、口縁端部は丸くおさめる。短頸壺。	カキメ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 ○	24
82	壺	口径 器高	8.0 8.4	扁平な底部から肩部がやや張り、口縁部は直立して短くのびる。短頸壺。	カキメ(7本/cm) 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 青灰色	密、長(1~2) 自然釉	24
83	壺	口径 器高	7.7 8.3	扁平な底部から肩部がやや張り、口縁部は直立して短くのびる。短頸壺。	カキメ(5本/cm) 回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密、長(1~4) ○	24
84	壺	口径 器高	8.5 8.5	肩の張る上胴部に口縁部はやや内傾して短くのびる。短頸壺。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密、長(1~2) ○ 自然釉	24
85	壺	口径 器高	13.8 19.9	球状の胴部から口縁部は緩やかに外反し、端部は肥厚する。頸部に波状文が1条巡る。	カキメ(7本/cm) 叩き	ナデ 指頭痕	黄灰色 黄灰色	長(1) ○ 自然釉	24

表26 2号石室出土遺物観察表 装身具

(1)

番号	器種	残存	材質	色	法量				備考	図版
					長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
86	土玉	完形	土	黒褐色	0.68	0.87	0.18	0.433		25
87	土玉	完形	土	黒灰色	0.75	0.85	0.20	0.507		25
88	土玉	完形	土	黒灰色	0.75	0.83	0.20	0.564		25
89	土玉	1/2	土	黒灰色	0.70	0.83	(0.25)	0.292		
90	土玉	完形	土	黒灰色	0.64	0.83	0.17	0.413		25
91	土玉	完形	土	黒灰色	0.63	0.82	0.20	0.428		25
92	土玉	完形	土	黒灰色	0.70	0.80	0.20	0.500		25
93	土玉	完形	土	黒灰色	0.65	0.79	0.20	0.418		25
94	土玉	完形	土	黒灰色	0.71	0.79	0.19	0.524		25
95	土玉	完形	土	黒色	0.70	0.78	0.10	0.446		25
96	土玉	完形	土	黒褐色	0.67	0.77	0.17	0.418		25
97	土玉	2/3	土	黒灰色	0.69	0.76	0.15	0.381		
98	土玉	完形	土	黒灰色	0.71	0.76	0.19	0.465		25
99	土玉	完形	土	黒褐色	0.64	0.76	0.15	0.382		25
100	土玉	完形	土	黒灰色	0.70	0.75	0.20	0.461		25
101	土玉	完形	土	黒灰色	0.70	0.75	0.15	0.484		25

祝谷大地ヶ田遺跡 8次調査

2号石室出土遺物観察表 装身具

(2)

番号	器種	残存	材質	色	法量				備考	図版
					長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
102	土玉	ほぼ完形	土	黒褐色	0.64	0.75	0.15	0.382		25
103	土玉	完形	土	黒灰色	0.60	0.75	0.20	0.356		25
104	土玉	完形	土	黒灰色	0.64	0.74	0.20	0.372		25
105	土玉	完形	土	黒灰色	0.75	0.72	0.20	0.468		25
106	土玉	5/6	土	黒色	0.90	0.70	0.15	0.437		
107	土玉	ほぼ完形	土	黒灰色	0.70	0.70	0.25	0.358		25
108	土玉	完形	土	黒灰色	0.65	0.70	0.20	0.381		25
109	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.28	0.50	0.15	0.085		25
110	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.25	0.50	0.10	0.045		25
111	ガラス玉	完形	ガラス	濃青色	0.35	0.43	0.15	0.103		25
112	ガラス玉	ほぼ完形	ガラス	緑色	0.31	0.40	0.15	0.074		25
113	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.30	0.40	0.10	0.062		25
114	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.29	0.39	0.15	0.052		25
115	ガラス玉	完形	ガラス	水色	0.24	0.39	0.13	0.041		25
116	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.28	0.38	0.10	0.057		25
117	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.28	0.38	0.10	0.052		25
118	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.30	0.37	0.10	0.054		25
119	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.28	0.37	0.10	0.054		25
120	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.25	0.37	0.10	0.047		25
121	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.31	0.36	0.10	0.057		25
122	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.29	0.36	0.10	0.048		25
123	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.29	0.36	0.10	0.045		25
124	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.27	0.36	0.10	0.047		25
125	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.27	0.36	0.10	0.046		25
126	ガラス玉	完形	ガラス	水色	0.25	0.36	0.10	0.043		25
127	ガラス玉	完形	ガラス	水色	0.20	0.36	0.10	0.035		25
128	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.29	0.35	0.10	0.047		25

遺物観察表

2号石室出土遺物観察表 装身具

(3)

番号	器種	残存	材質	色	法量				備考	図版
					長さ(cm)	径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
129	ガラス玉	ほぼ完形	ガラス	青色	0.20	0.35	0.15	0.035		25
130	ガラス玉	完形	ガラス	緑色	0.20	0.34	0.12	0.026		25
131	ガラス玉	完形	ガラス	緑色	0.20	0.33	0.12	0.028		25
132	ガラス玉	完形	ガラス	緑色	0.20	0.33	0.15	0.027		25
133	ガラス玉	完形	ガラス	水色	0.14	0.33	0.15	0.023		25
134	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.19	0.29	0.10	0.019		25
135	ガラス玉	完形	ガラス	水色	0.18	0.29	0.10	0.021		25
136	ガラス玉	完形	ガラス	緑色	0.12	0.29	0.10	0.014		25
137	ガラス玉	完形	ガラス	緑色	0.29	0.27	0.10	0.026		25
138	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.23	0.30	0.10	0.029		25
139	ガラス玉	完形	ガラス	水色	0.22	0.27	0.09	0.025		25
140	ガラス玉	完形	ガラス	青色	0.26	0.35	0.10	0.049		25

表27 2号石室出土遺物観察表 金属製品

(1)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
141	鎌	逆刺を欠く	鉄	12.0	3.1	0.7	26.72	平根	25
142	鎌	ほぼ完形	鉄	10.5	2.9	0.7	25.47		25
143	鎌	ほぼ完形	鉄	11.4	2.4	0.8	17.50	茎部に矢柄が残存	25
144	鎌	ほぼ完形	鉄	20.6	1.7	0.8	18.26	長頸	25
145	鎌	ほぼ完形	鉄	14.6	1.4	0.9	18.79	長頸	25
146	鎌	ほぼ完形	鉄	13.8	1.4	0.8	14.86	長頸	25
147	鎌	鎌身～頸部	鉄	7.9	1.4	0.7	7.66	長頸	25
148	鎌	鎌身～頸部	鉄	5.5	1.2	0.5	5.31	長頸	25
149	鎌	頸部	鉄	9.0	1.7	0.8	14.19	長頸	25
150	鎌	頸～茎部	鉄	6.6	0.9	0.7	5.02	長頸	
151	鎌	茎関節部	鉄	4.9	1.1	0.6	6.07	長頸	25
152	鎌	茎部片	鉄	3.1	0.8	0.6	1.39	長頸	
153	轡	鏡板4/5残	鉄	5.9	6.7	1.3	27.39	素環に鉄線4条	

祝谷大地ヶ田遺跡 8次調査

2号石室出土遺物観察表 金属製品

(2)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
154	轡	銜	鉄	3.5	2.8	0.7	6.74		26
155	轡	銜	鉄	8.1	2.4	0.8	22.41		26
156	鞍橋	一部	鉄	2.7	3.0	0.5	5.22		26
157 -1	鋤先	刃部小片	鉄	3.7	1.8	0.3	2.89	U字刃先	
157 -2				2.7	2.2	0.8	3.90		
158	鎌	基部端部を欠く	鉄	15.0	2.9	0.5	46.15	曲刃先	26
159	鎌	基部から刃部	鉄	7.2	2.8	0.5	14.36		26
160	斧	ほぼ完形	鉄	9.4	3.1	1.6	40.25		26
161	刀子	ほぼ完形	鉄	17.6	2.7	0.9	59.70		26
162	刀子	ほぼ完形	鉄	11.4	1.7	0.5	13.34		26
163	刀子	刀身・鋒	鉄	3.2	0.9	0.4	1.64		26
164	刀子	刀身～茎部	鉄	9.8	2.5	1.7	33.16		26
165	刀子	刀身鋒を欠く 柄部約1/2残	鉄	13.2	2.3	1.4	27.07		26
166	刀子	刃部鋒を欠く	鉄	8.7	1.8	0.7	12.83		26
167	刀子	刀身～茎部	鉄	5.5	1.4	1.0	7.49		26

第5章 祝谷大地ヶ田遺跡8次調査出土の古墳人骨

松下真実*・松下孝幸**

【キーワード】：愛媛県、古墳人骨、横穴式石室、男性大腿骨

はじめに

愛媛県松山市祝谷六丁目1024番3外に所在する祝谷大地ヶ田遺跡8次調査の発掘調査が住宅建設に伴い、2018（平成30）年2月におこなわれた。この調査で古墳1基（祝谷11号墳）から2基の石室と溝1条が検出され、2号石室の床面から人骨が出土した。

2号石室は調査区の北端で検出されたが、奥壁は調査区域外に延びている。墳丘は後世の削平で消失しているが、石室は片袖式の横穴式石室と想定されている。石室の遺存状況は、側壁と奥壁とも基底部の1段～2段を残すのみであったが、床全面には小さな河原石が敷かれており、東北部から人骨が、中央部付近では土玉やガラス小玉が、南壁付近で



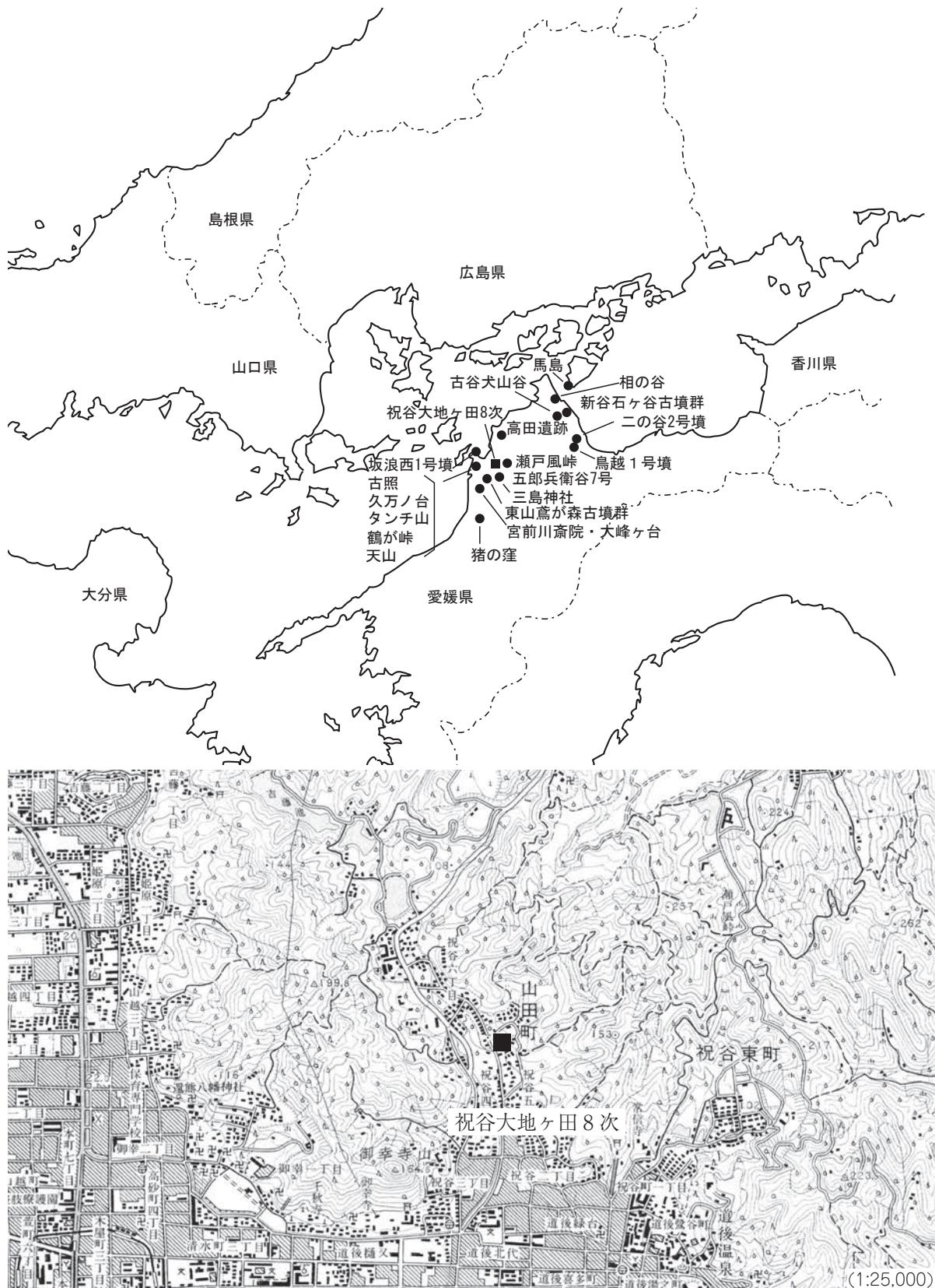
写真1 調査区全景

は須恵器の壺や鉄鏃が検出されている（祝谷大地ヶ田遺跡8次調査調査概要報告書、2018）。

なお、調査地周辺の丘陵部には、弥生時代の集落跡や古墳が多数検出されている。弥生時代の遺物としては、祝谷六丁場遺跡から弥生時代後期の平形銅剣が埋納された状態でみつかっており、西隣の祝谷大地ヶ田遺跡（3次調査区～7次調査区）では弥生時代中期頃の貯蔵穴が約400基も検出されている。古墳時代では、祝谷6号墳1号石室内からは珠文鏡が、2号石室からは円頭太刀柄頭などが出でている。また、祝谷9号墳は馬蹄形の周濠を持つ前方後円墳で、首長クラスの墳墓と推測されている（祝谷大地ヶ田遺跡8次調査調査概要報告書、2018）。

愛媛県から出土した古墳人骨のうち筆者らが調査や研究にかかわったものは、今治市相の谷古墳群（松下・他 1995）、二の谷2号墳（松下、2000）、馬島長山1号墳、鳥越1号墳（松下・他、2017）、古谷犬山谷古墳（松下真実・他、2013）、^{にやいし}新谷石ヶ谷古墳群（松下真実・他、2021）のほかに松山市の宮前川北斎院遺跡（松下、1998a）、客谷古墳（松下、2006a）、三味線山古墳（松下真実・他、2014）、瀬戸風峠遺跡、御産所11号墳、東山鳶が森古墳群（1次・2次）（松下・他、2017）、久万ノ台古墳、久米タンチ山1号墳、天山2号墳、古照遺跡、鶴が峠遺跡（松下真実・他、2018）、三島神社古墳（松下真実・他、2020）、五郎兵衛谷7号墳（松下真実・他、2021）、大峰ヶ台遺跡5次（客谷古墳B地区）、高田遺跡（椋之原14号墳）、坂浪西1号墳、伊予市の猪の窓古墳（松下、2006c）から出土した人骨がある。また、弥生時代から古墳時代にかけての人骨としては伊予市の原池遺跡の石棺出土の熟年の女性骨があるが（松下、1998b）、遺存状態が良好な古墳人骨の出土例は少なく、まだ愛媛県内の古墳人の特徴を明確にできない状況である。

祝谷大地ヶ田遺跡 8次調査出土の古墳人骨



第62図 遺跡の位置 (1/25,000)

(Fig.1 Location of the place 8th excavation,Iwaidaniochigata site, Matsuyama City, Ehime Prefecture)

今回報告する古墳人骨の保存状態は良好なものではなかったが、人骨を解剖学的に精査し、人類学的観察をおこなったので、その結果を報告しておきたい。

資料

実測図によれば、人骨のうち四肢骨は2号石室の北側の墓道部に近い場所から、頭蓋は南側の奥壁に近い場所から検出されている。土玉やガラス小玉などの装身具類が中央部から検出されていることから遺体は石室の中央部に横たえてあったものと推測される。

取り上げられていた人骨を解剖学的に精査したところ、1体分の人骨であった。下記の所見からこの人骨は男性骨と推測される。年齢は不明である（表28、29）が、参考までに表30に年齢区分を示した。

この人骨は、考古学的所見より、6世紀中頃の古墳時代後期に属する人骨である。

表28 資料数 (Table 1. Number of materials)

成人			幼少児	合計
男性	女性	不明		
1	0	0	0	1

表29 出土人骨一覧 (Table 2. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	備考
11号墳2号石室	男性	不明	

表30 年齢区分 (Table 3. Division of age)

年齢区分	年	齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(松下、1996)を参照されたい。

所見

各人骨の残存部は第63図に示すとおりである。

11号墳2号石室(男性・年齢不明)

保管されていた人骨を精査したところ、頭蓋の一部(左側錐体)、下顎骨、歯、大腿骨が確認できた。

1. 頭蓋

同定できたのは左側錐体のみであった。保存状態は悪く、外耳道の観察はできなかった。

2. 下顎骨

下顎体が残存していた。保存状態は悪い。下顎体は大きくて、高径は高そうである。また、オトガイ棘の発達は良好である。

3. 齒

下顎骨には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/	7	6	/	/	/	2	/	/	/	/	/	6	7	/
//	6	5	4	3	2	①	①	2	3	4	5	6	7	8

[○:歯槽開存 /:不明(破損)、番号は歯種]

[1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小白歯、5:第二小白歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯]

咬耗度は Broca の 1 度 (咬耗がエナメル質のみ) で、咬耗は弱い。歯の咬合形式は不明である。

4. 四肢骨

①大腿骨

左右の骨体の一部が残存していた。保存状態は悪い。骨体は大きく、粗線は明瞭で隆起している。計測はできなかった。

5. 性別・年齢

性別は、大腿骨の骨体が大きく、粗線も明瞭で隆起していることから男性と推定した。年齢は、推定する部位が残存していないので不明であるが、歯の咬耗が弱いことからそれほど高齢ではなさそうである。



写真 2 11号墳 2号石室出土状況

要 約

愛媛県松山市祝谷六丁目 1024 番 3 外に所在する祝谷大地ヶ田遺跡 8 次調査の発掘調査が 2018 (平成 30) 年 2 月におこなわれ、祝谷 11 号墳の 2 号石室から人骨が出土した。人骨の残存量は少なかつたが、人骨を解剖学的に精査し、人類学的観察や計測をおこない、以下の結果を得た。

1. 2号石室の床面から検出された人骨は 1 体分で、年齢不明の男性骨と推測される。
2. 本人骨は、考古学的所見より、6 世紀中頃の古墳時代後期に属する人骨である。
3. 残存していたのは、頭蓋の一部 (左側錐体)、下顎骨、歯、大腿骨である。頭型や顔面の特徴は不明であるが、下顎骨は大きく、高径は高そうである。また、歯の咬耗度は Broca の 1 度 (咬耗がエナメル質のみ) で、咬耗は弱い。
4. 大腿骨は骨体の一部が残存していた。骨体は大きく、粗線は明瞭で隆起している。
5. 本古墳人は、下顎骨が大きく、高径も高そうで、大腿骨も大きいという特徴が得られた。古墳人の形質的特徴がわかるものの例数が少ないので、松山市域での古墳人の特徴を把握するまでには至っていない。例数の増加を待ちたい。

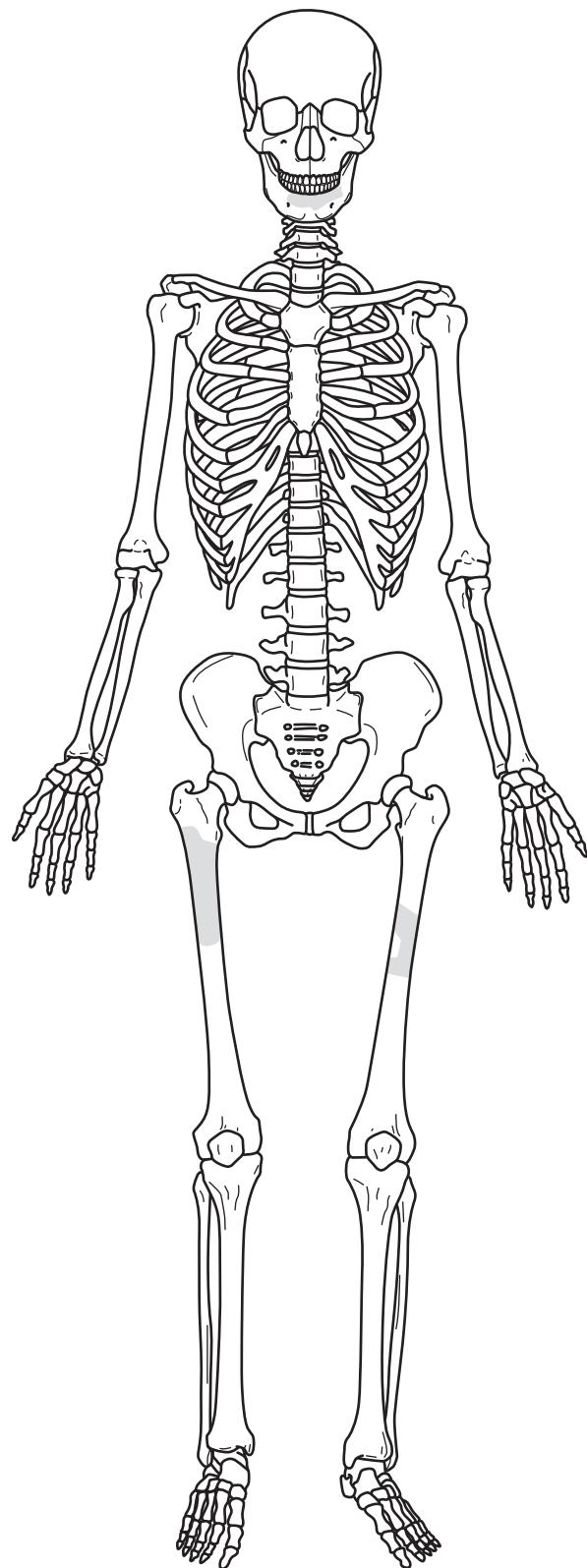
《参考文献》

1. 松下真実・他、2013：愛媛県今治市古谷犬山谷古墳出土の古墳人骨。古谷犬山谷古墳（埋蔵文化財発掘調査報告書第175）：26-31。
2. 松下真実・他、2014：愛媛県松山市三味線山古墳出土人骨。三味線山古墳・船ヶ谷向山古墳（松山市文化財調査報告書168）：80-91。
3. 松下真実・他、2017：愛媛県松山市東山鳶が森古墳群2次調査出土の古墳・近世人骨。松山市埋蔵文化財調査年報29：61-72。
4. 松下真実・他、2018：鶴が峠遺跡出土の古墳人骨。松山市埋蔵文化財調査年報30：59-68。
5. 松下真実・他、2020：保存処理・三島神社古墳出土の人骨。松山市埋蔵文化財調査年報32：65-69。
6. 松下真実・他、2021：愛媛県松山市五郎兵衛谷7号墳出土の古墳人骨。五郎兵衛谷7号墳（松山市文化財調査報告書201）：27-34。
7. 松下真実・他、2021：愛媛県今治市新谷石ヶ谷古墳群出土の古墳人骨 新谷石ヶ谷古墳群（4号墳-7号墳）（愛媛県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第200集）：137-157。
8. 松下真実・他、愛媛県松山市瀬戸風峠出土の古墳人骨。（投稿中）
9. 松下真実・他、愛媛県松山市御産所11号墳出土の古墳人骨。（投稿中）
10. 松下真実・他、愛媛県松山市東山鳶が森古墳群1次調査出土の古墳・近世人骨。（投稿中）
11. 松下真実・他、愛媛県松山市古照遺跡出土の古墳人骨。（投稿中）
12. 松下真実・他、愛媛県松山市久万ノ台古墳出土の人骨。（投稿中）
13. 松下真実・他、愛媛県松山市天山2号墳出土の古墳人骨。（投稿中）
14. 松下真実・他、愛媛県松山市久米タンチ山1号墳出土の古墳人骨。（投稿中）
15. 松下真実・他、愛媛県松山市三島神社古墳出土の人骨。（投稿中）
16. 松下真実・他、愛媛県松山市大峰ヶ台遺跡第5次調査（客谷古墳B地区）出土の古墳人骨。（投稿中）
17. 松下真実・他、愛媛県松山市高田遺跡（椋之原14号墳）出土の古墳人骨。（投稿中）
18. 松下真実・他、愛媛県松山市坂浪西1号墳出土の古墳人骨。（投稿中）
19. 松下孝幸・他、1995：愛媛県今治市相の谷古墳群出土の古墳時代人骨。相の谷古墳群杉谷支群埋蔵文化財発掘調査報告書（埋蔵文化財発掘調査報告書第57集）：41-54。
20. 松下孝幸、1996：土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査出土の中世・弥生時代人骨。土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書（山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第12集）：24-50。
21. 松下孝幸、1998a：愛媛県松山市宮前川北斎院遺跡出土の古墳時代人骨。斎院・古照・新松山空港道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書（遺物編）：525-531。
22. 松下孝幸、1998b：愛媛県伊予市原池遺跡出土の人骨。四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書XⅡ伊予市編：175-180。
23. 松下孝幸、2000：愛媛県今治市二の谷2号墳出土の古墳時代人骨。旦遺跡・宮之前遺跡・長沢石打遺跡・長沢1号墳・長沢6号墳・二の谷2号墳・鋸又古墳群・郷桜井西塚古墳（一般国道196号今治バイパス埋蔵文化財調査報告書IV）（埋蔵文化財発掘調査報告書第87集）：232-249。
24. 松下孝幸、2001：香川県坂出市鶴ヶ峯古墳出土の人骨。坂出市内遺跡発掘調査報告書（平成12年度国庫補助事業報告書 鶴ヶ峰古墳、讃岐国府跡（開法寺遺跡）、讃岐国府跡）：27-48。
25. 松下孝幸、2006a：松山市客谷古墳群出土の古墳人骨。大峰ヶ台遺跡Ⅲ（松山市文化財調査報告110）：143-150。

26. 松下孝幸、2006b：香川県善通寺市樽池西手山頂墳3号出土の古墳人骨。善通寺市内発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ：64-71.
 27. 松下孝幸、2006c：猪の窪古墳人骨。伊予市の歴史文化、第54号：18-27.（伊豫市歴史文化の会編集発行）
 28. 松下孝幸・他、2017：愛媛県今治市鳥越1号墳出土の古墳人骨。鳥越1号墳（埋蔵文化財発掘調査報告書第191集）：66-68.
 29. 松下孝幸・他、愛媛県今治市馬島長山1号墳出土の古墳人骨。（投稿中）
 30. 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター、2018：平成29年度埋蔵文化財発掘調査補助事業 祝谷大地ヶ田遺跡8次調査 調査概要報告書
-

* Masami MATSUSHITA、** Takayuki MATSUSHITA

The Organization of Anthropological Research [特定非営利活動法人 人類学研究機構]



祝谷大地ヶ田 8 次 11 号墳 2 号石室 (男性・年齢不明)

第 63 図 人骨の残存図 (アミかけ部分)

(Fig.2 Regions of preservasion of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



写真3 下顎骨 (The mandible)

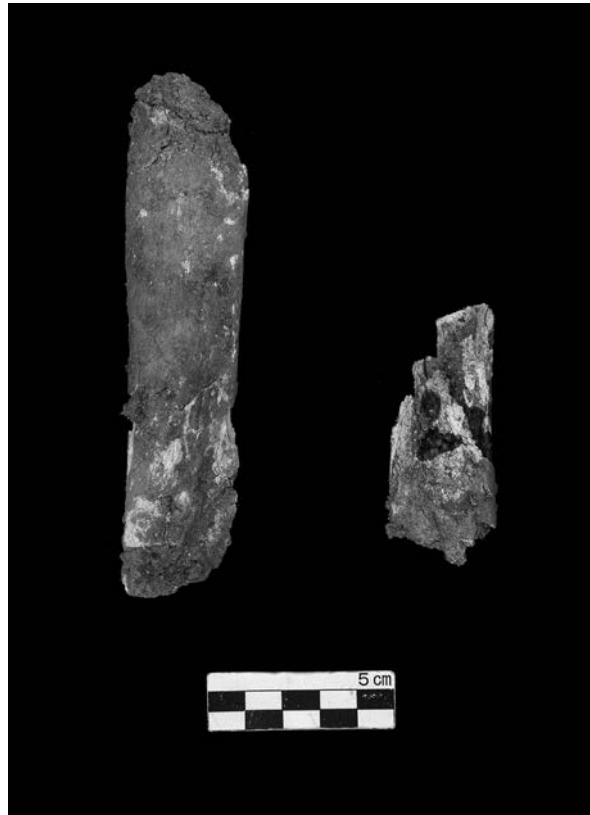


写真4 大腿骨 (The Femur)

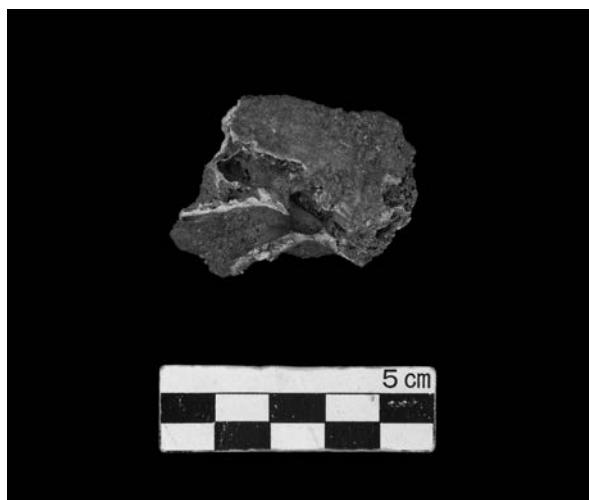


写真5 頭蓋側面 (Lateral view of the skull)



写真6 歯 (The teeth)

祝谷大地ヶ田 8 次 11 号墳 2 号石室 (男性・年齢不明)

(The skeleton 11-2 from the 8th excavation of the Iwaidaniochigata site, male unknown age)

第6章 調査の成果と課題

本書掲載の祝谷畠中遺跡3次調査と祝谷大地ヶ田遺跡8次調査は、道後城北遺跡群内における弥生時代の集落や古墳時代の墳墓の範囲や構造解明を主目的として本発掘調査を実施したものである。

両遺跡が所在する祝谷地区は、道後城北遺跡群北端の一角にあり、周辺の遺跡からは弥生時代を中心とした集落や古墳時代の墳墓など松山平野でも有数の遺跡地帯として知られている。

祝谷畠中遺跡3次調査では、弥生時代や中世の遺構や遺物を確認した。本調査地の東方80mに位置する祝谷畠中遺跡には弥生時代前期末に発生し、弥生時代中期中葉頃に埋没した幅12mの大溝があり、この範囲は東西約120m、南北約100mの楕円形状が推定され、大溝に囲まれた東端付近には竪穴住居や土坑・柱穴などが配置されている。本遺跡はその大溝に囲まれた集落推定エリアの南端にあたり、弥生時代中期中葉頃の竪穴建物SB1を確認できたことは、大溝が埋没する頃の集落内の建物配置のわかる資料である。また、SB1内の北端には焼土や炭化材が堆積しており、建物の一部が焼失したことも考えられる。中世においては鋤跡や溝などを検出しており、緩傾斜面を利用した耕作地であることがわかった。

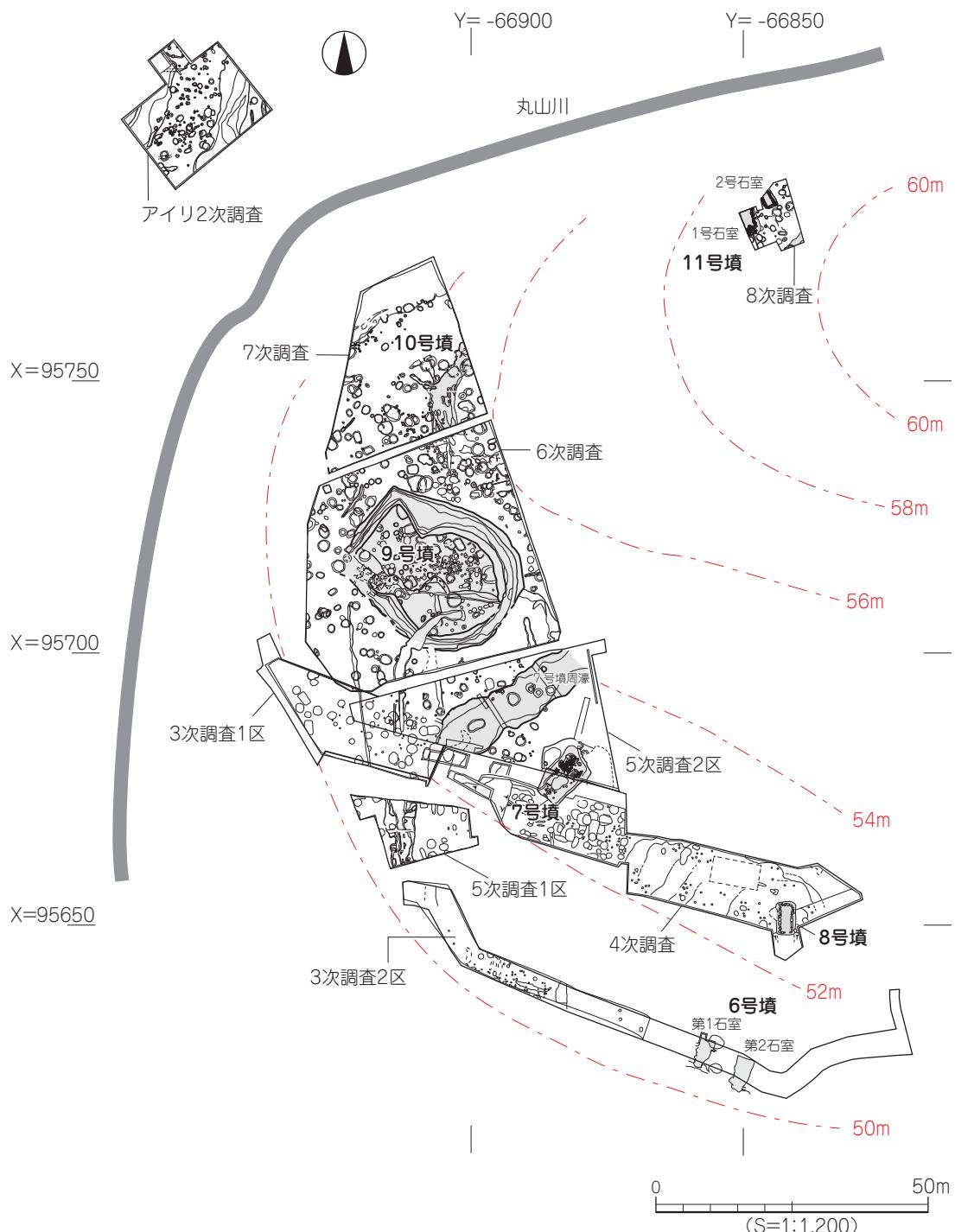
祝谷大地ヶ田遺跡8次調査は、南端を西流する市の谷川、北端を西流する丸山川、西端を南流する永谷川に挟まれた東西600m、南北360mの祝谷大地ヶ田遺跡内の北端にあたり、丸山川に近い後背に丘陵をもつ裾付近の緩傾斜上の標高59mに立地し、南方の扇状地上に広がる道後城北地区の一部を見下ろせる。とくに弥生時代中期の貯蔵穴群は本調査地近隣の西方から南方にかけて広がる祝谷大地ヶ田遺跡3～7次調査や祝谷アイリ遺跡2次調査においては、400基を超える貯蔵穴群が検出されており、これは西日本でも有数の規模をもつものである。また、古墳時代後期を主体とした墳墓が密集しており、本調査によりエリアの東北部である祝谷大地ヶ田遺跡8次調査において弥生時代中期の土坑や古墳時代後期の墳墓を検出した。弥生時代の遺構は弥生時代中期中葉段階の土坑が大半で、そのなかでも貯蔵穴と判断する土坑が9基含まれており、松山平野内における貯蔵穴の形態・変遷や集落構造を解明するうえで貴重な資料といえる。

古墳時代では、祝谷11号墳を検出した。遺存状況は、後世の削平で墳丘盛土は失われており、地山面までも削平され、地山整形の痕跡は確認することはできなかった。また周溝は調査区外に延びているため東南部の一部だけの検出で墳丘の形状は不明であるが、共有する墳丘に2基の横穴式石室が南に開口し構築された一墳丘2石室の古墳である。墳丘盛土や石室上部は後世の削平を受けて遺存していないため、詳しい上部構造は不明であり、出土した須恵器から両石室ともに6世紀後半から7世紀初頭に築造されたものであるが、南方150mの祝谷6号墳も一墳丘2石室をもつ同時期の横穴式石室である。床面の遺存状況が比較的良好な2号石室は、玄室内から須恵器の壺や鉄製品の馬具、武具、農工具、装身具の玉類が出土しているが、須恵器は壺のみが出土し、短頸壺が殆どを占める特徴をもつ。鉄製品は玄門付近から側壁付近、装飾品は玄室中央部付近にあり、人骨は東側壁付近にある状況から遺骸は移動されていたことがわかった。また、この人骨は鑑定により1体の被葬者が埋葬されていたことが確認できた。本古墳を含む祝谷6～11号墳は丸山川左岸の平野を見下ろす丘陵上の東西100m、南北180mのエリアに築かれており、後期古墳群の様相が徐々に解明しつつある。

本書掲載の調査では、道後城北遺跡群内における弥生時代の小規模単位の集落や古墳時代の墳墓の

調査の成果と課題

様相が明らかとなった。平野部に位置する祝谷畠中遺跡3次調査と丘陵部に位置する祝谷大地ヶ田遺跡8次調査において主に弥生時代と古墳時代の遺構・遺物を確認したことで、その範囲がさらに広がることが確認できた。こうした調査成果をもとに今後も大溝で囲まれた集落や丘陵部に広がる貯蔵穴群、古墳群の範囲やその構造について詳しく追求していく必要があろう。



第64図 祝谷大地ヶ田遺跡3～8次調査区配置図

写真図版

写真図版 1～6：祝谷畑中遺跡 3次調査

写真図版 7～26：祝谷大地ヶ田遺跡 8次調査

写真図版データ

1. 遺構は、デジタルカメラで撮影した。

使用機材：デジタルカメラ Nikon D90 AF-S DX18～140mm

2. 遺物は、デジタルカメラで撮影した。

使用機材：

デジタルカメラ Nikon D610 マイクロニッコール 105mm・AF-S ニッコール 28～70mm

ストロボ コメット /CA32・CB2400

スタンド等 トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド 101

3. 製 版：写真図版 175 線

印 刷：オフセット印刷

用 紙：マットコート 76.5kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1～21・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』vol.1～6

祝谷畠中遺跡 3 次調査

図
版
1



1. 調査地全景
(西より)



2. 遺構検出状況
(西より)



3. 1 区遺構検出状況
(北より)

祝谷畠中遺跡 3 次調査

図版
2



1. 2区遺構検出状況（北東より）



2. 1区東壁土層（西より）



3. 2区東壁土層（西より）



1. SB101 燃土検出状況
(南より)



2. SB101 遺物出土状況
(北西より)



3. SK101 完掘・ベルト土層
堆積状況 (南西より)

祝谷畠中遺跡 3 次調査

図版
4



1. 1区・2区完掘状況
(東より)



2. 1区完掘状況
(北より)



3. SB101 完掘状況
(北より)

祝谷畠中遺跡 3 次調査

図
版
5



1. 2区完掘状況
(北東より)



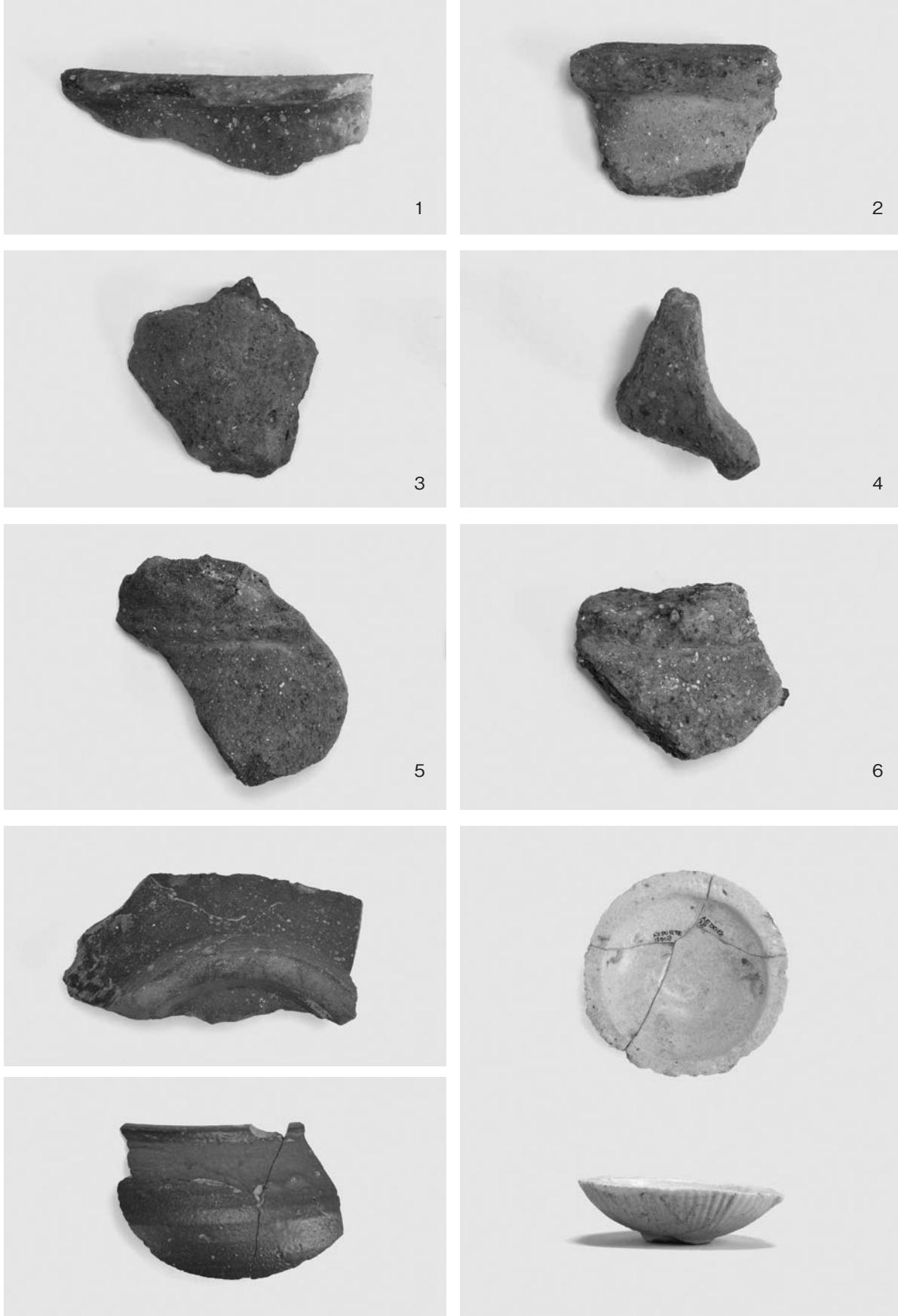
2. SD202 完掘状況
(北東より)



3. 調査後全景
(南東より)

祝谷畑中遺跡 3 次調査

図
版
6



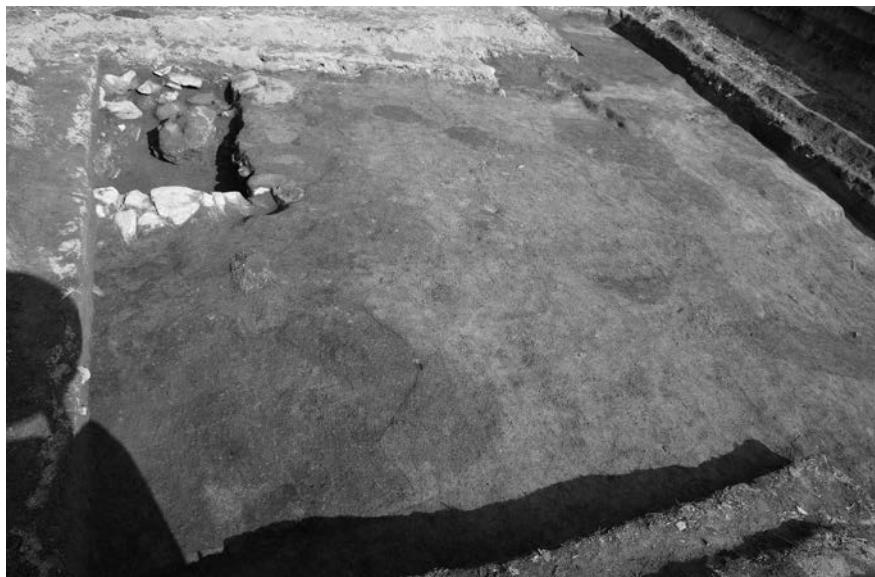
1. 出土遺物 (SB101:1~6、SK101:8~10)



1. 調査前全景
(西より)



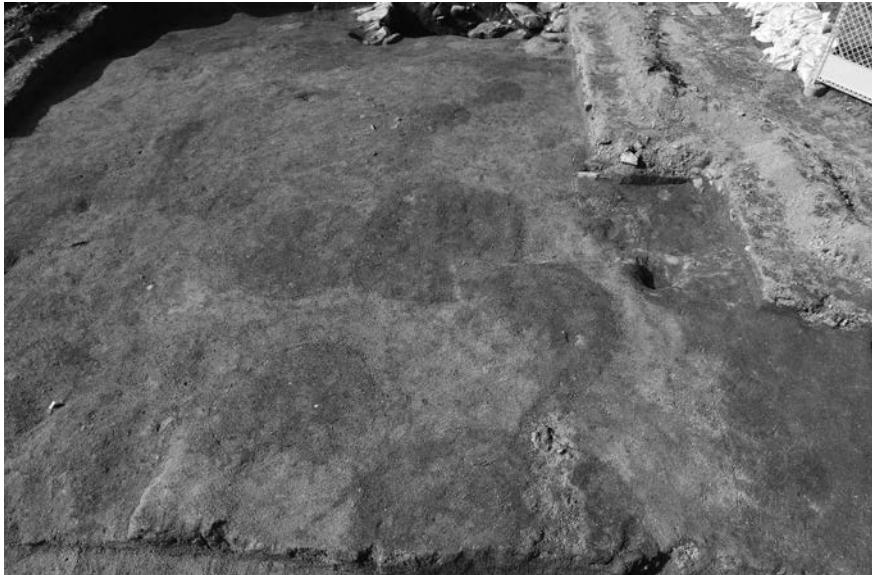
2. 遺構検出状況
(西より)



3. 遺構検出状況
(南より)

祝谷大地ヶ田遺跡 8次調査

図版
8



1. 遺構検出状況
(東より)



2. 1号石室検出状況
(西より)



3. 1区・2区完掘状況
(東より)



1. 調査風景
(北より)



2. 1号石室堆積土層
(東より)



3. 1号石室床面検出状況
(西より)

祝谷大地ヶ田遺跡 8 次調査

図版
10



1. 1号石室遺物出土状況
(西より)



2. 1号石室玉出土状況
(北西より)



3. 1号石室基底面検出状況
(北西より)



1. 1号石室玄門部の内側
(北より)



2. 1号石室墓道部半掘状況
(南より)



3. 2号石室遺物出土状況
(西より)

祝谷大地ヶ田遺跡 8 次調査

図版
12



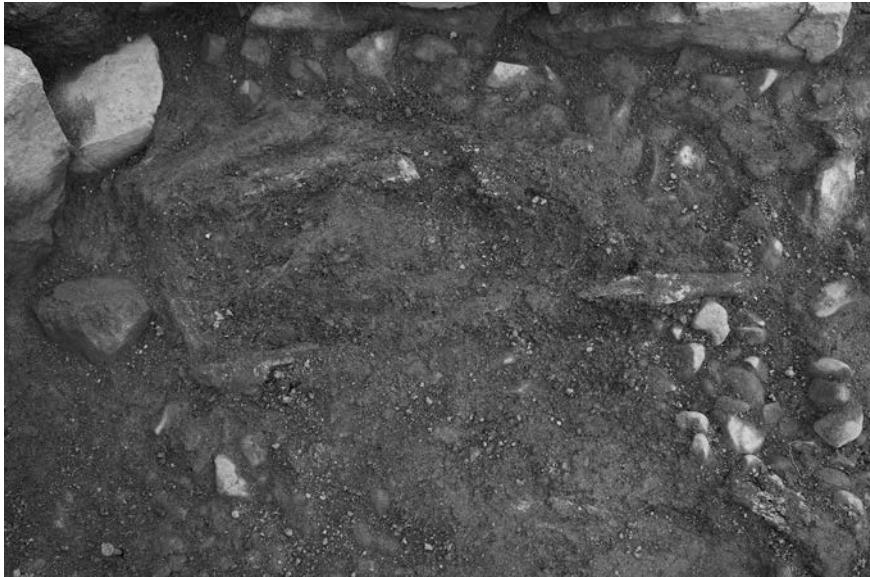
1. 2号石室遺物出土状況
(北より)



2. 金属製品出土状況
(北西より)



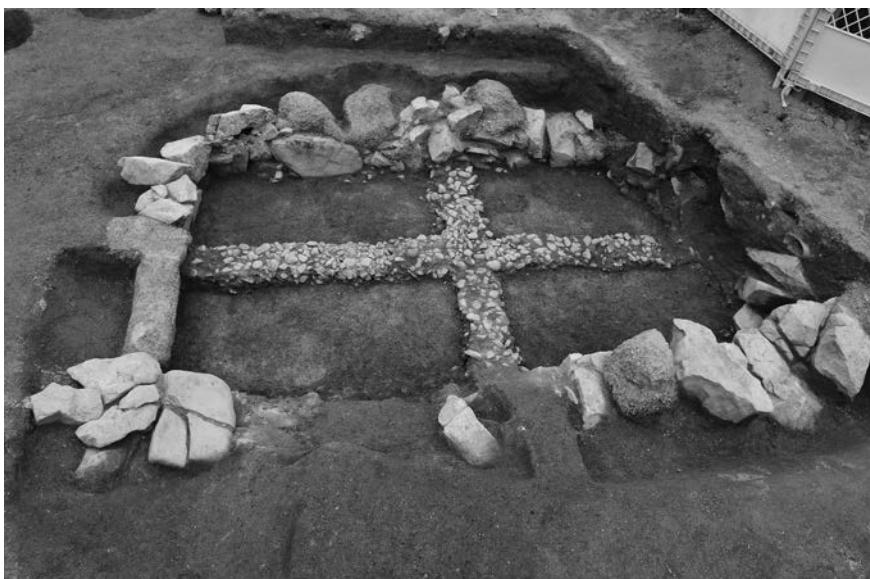
3. 2号下顎付近検出状況
(西より)



1. 2号石室人骨検出状況
(西より)



2. 2号石室床面検出状況
(北より)



3. 2号石室基底面検出状況
(東より)

祝谷大地ヶ田遺跡 8 次調査

図版
14



1. 遺構完掘状況
(西より)



2. 遺構完掘状況
(南東より)



3. 遺構完掘状況
(北東より)



1. 1号石室完掘状況
(西より)



2. 1号石室完掘状況
(北より)



3. 2号石室完掘状況
(西より)



1. 周溝遺構完掘状況
(西より)



2. 2号石室完掘状況
(北東より)



3. 2号石室完掘状況
(南西より)



1. SK1 完掘状況
(南東より)



2. 周溝・SK5 完掘状況
(北より)



3. SK2 完掘状況
(北より)



1. SK5 遺構完掘状況
(東より)



2. SK6 遺構完掘状況
(北より)



3. SK8 遺物出土状況
(南西より)



1. SK11・12、SP6
完掘状況（南西より）

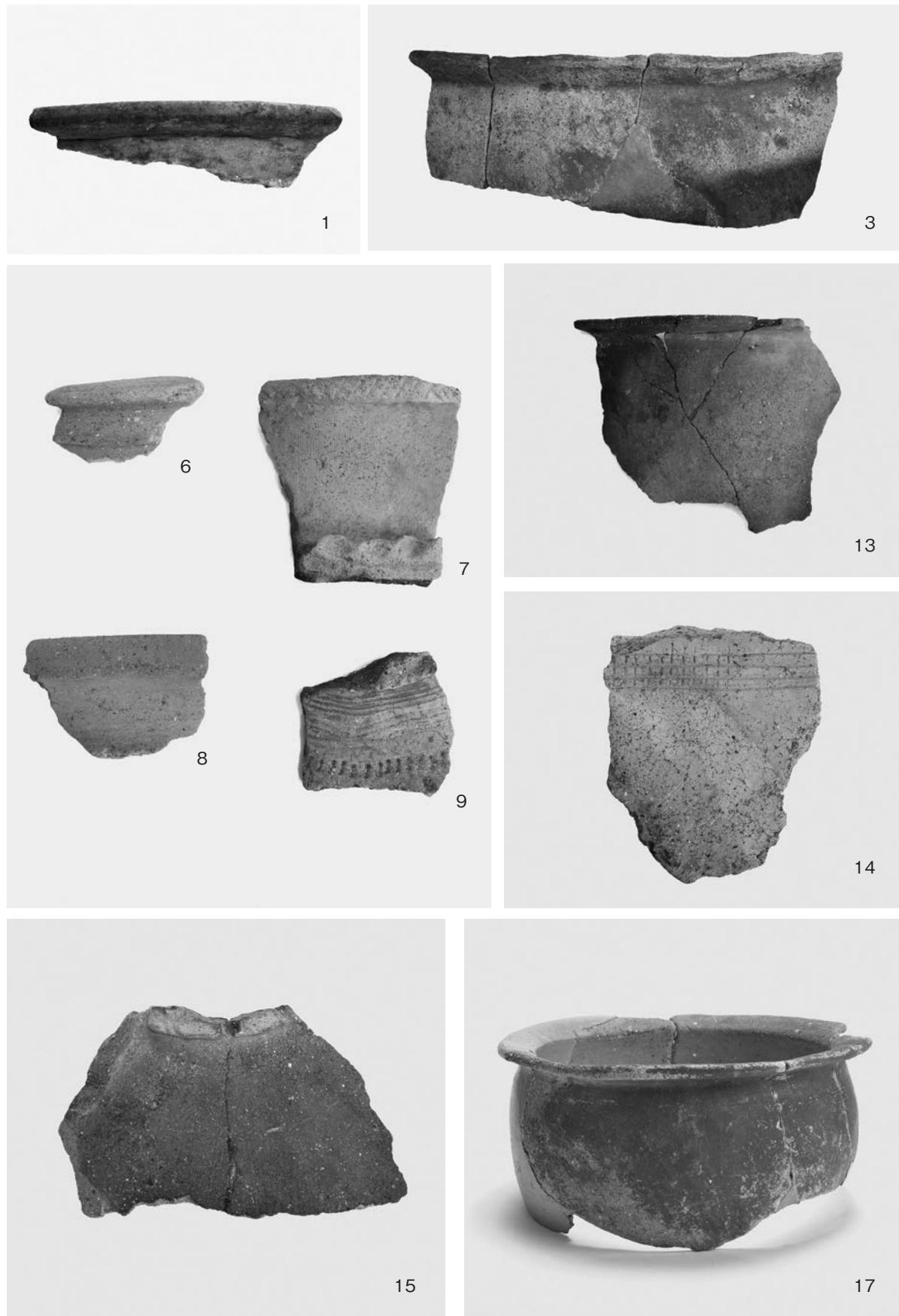


2. 調査地と尾根部
(北西より)



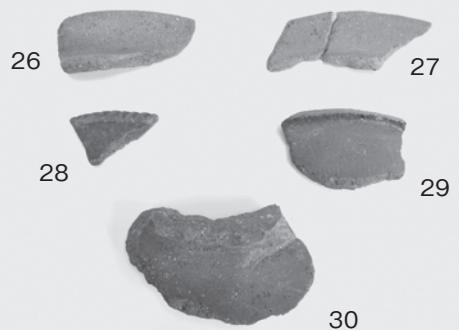
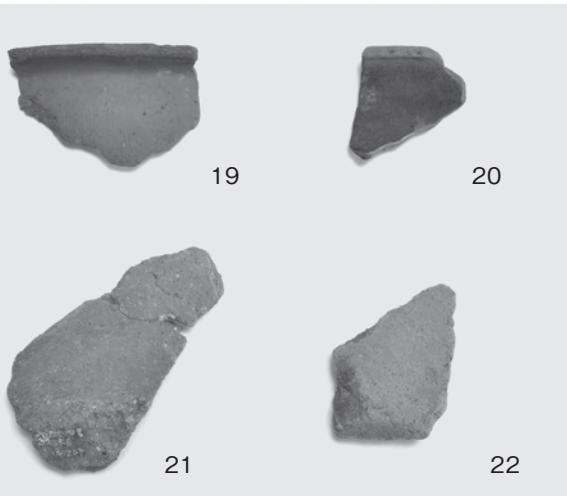
3. 調査後全景
(南西より)

図
版
20



1. 出土遺物 (SK1 : 1・3・6~9、SK2 : 13~15・17)

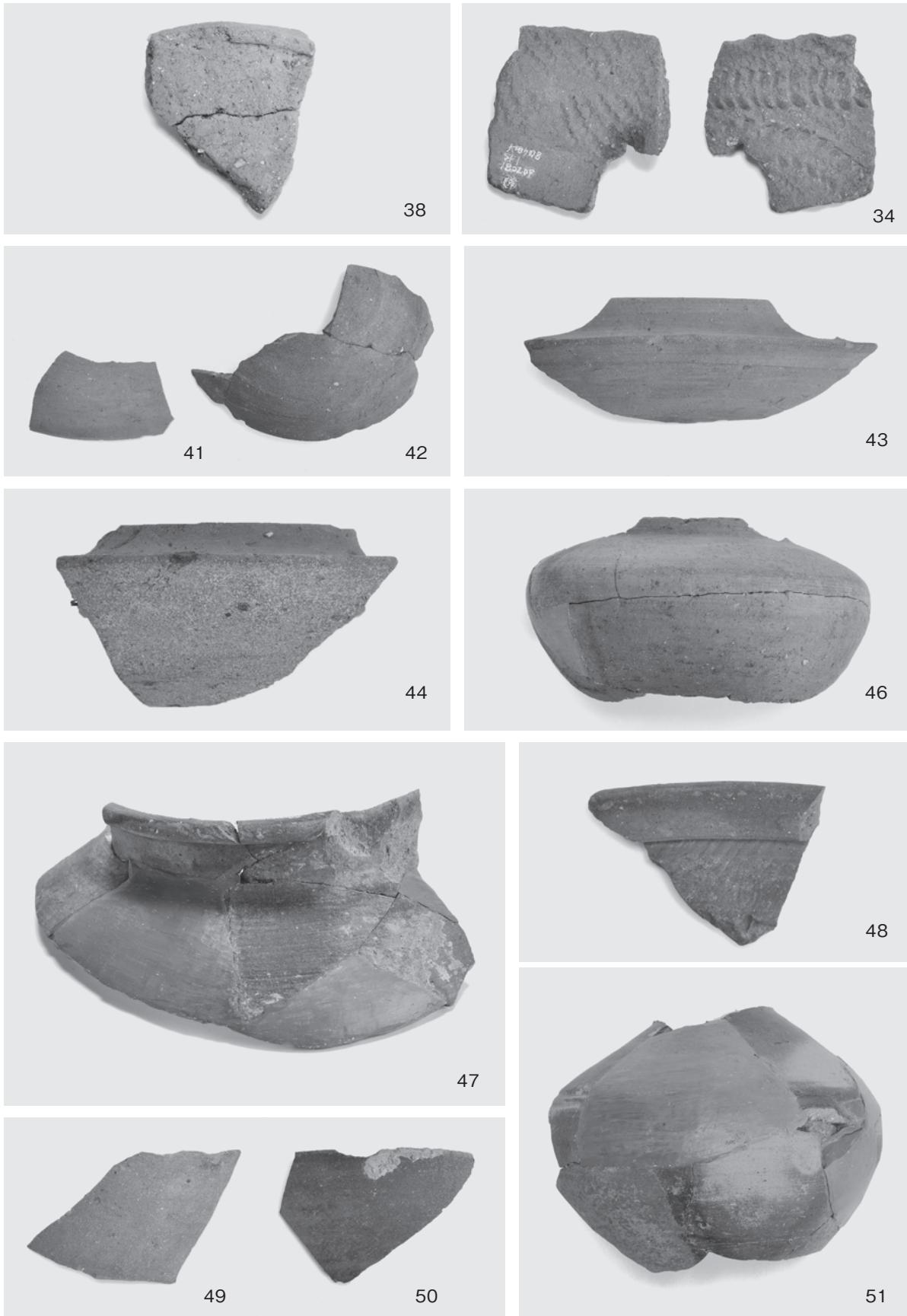
図
版
21



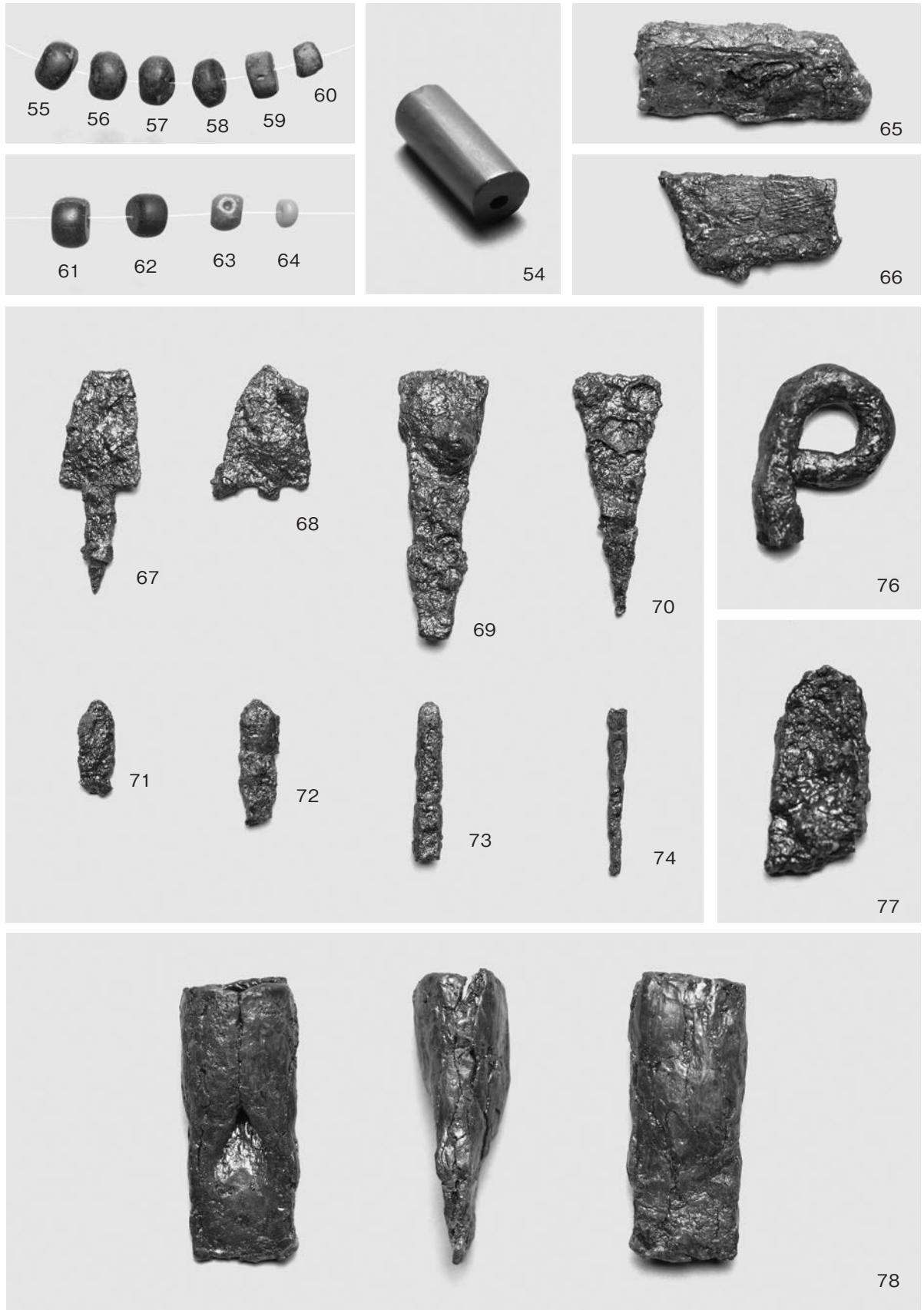
1. 出土遺物 (SK4: 18、SK6: 19~22、SK8: 23・24、SK11: 25、SK12: 26~30、SK14: 32・33)

祝谷大地ヶ田遺跡 8 次調査

図版
22



1. 出土遺物（柱穴：34・38、1号石室：41～43・44・46～51）



1. 出土遺物（1号石室）

図
版
24



79



80



81



82



83

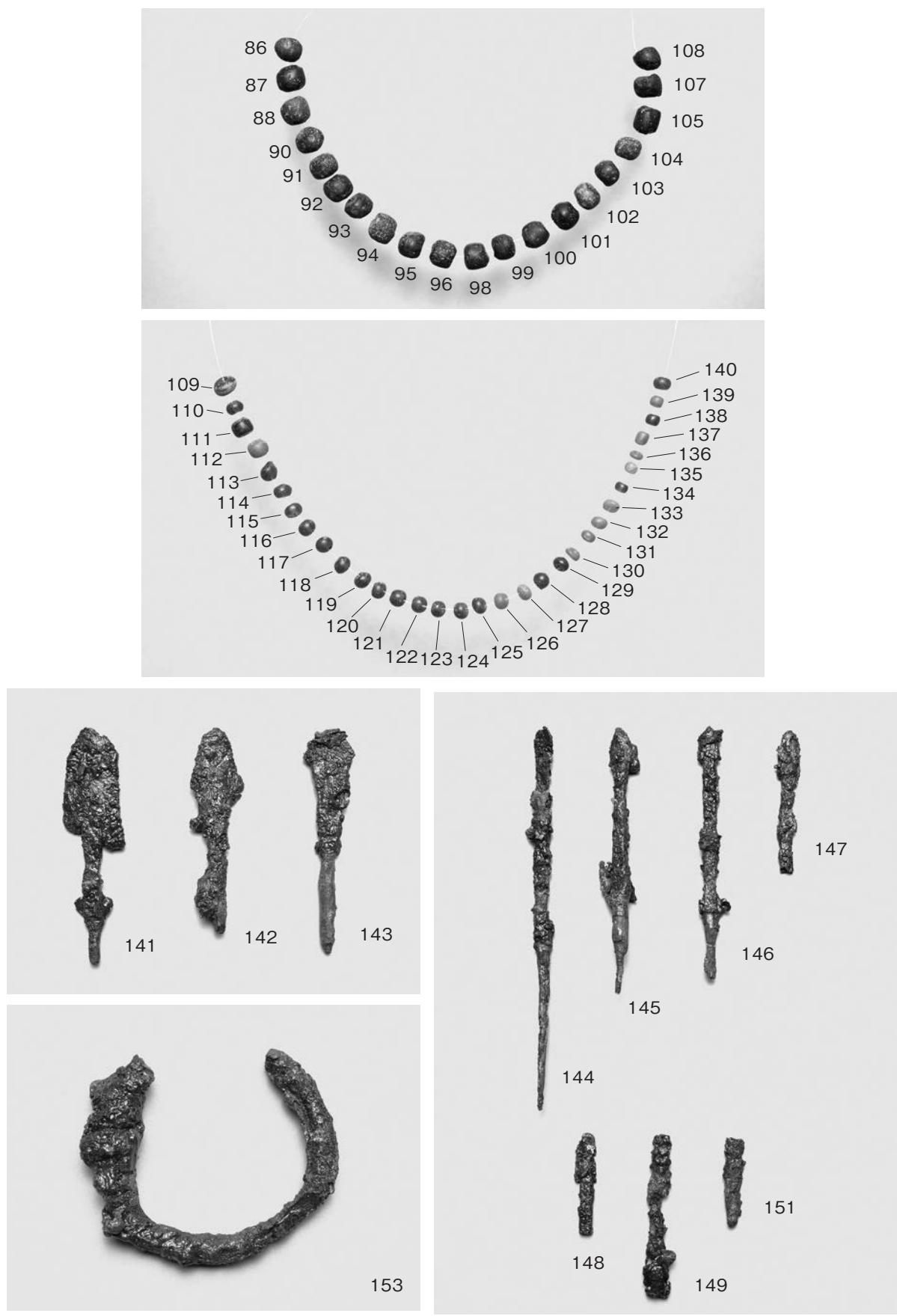


84



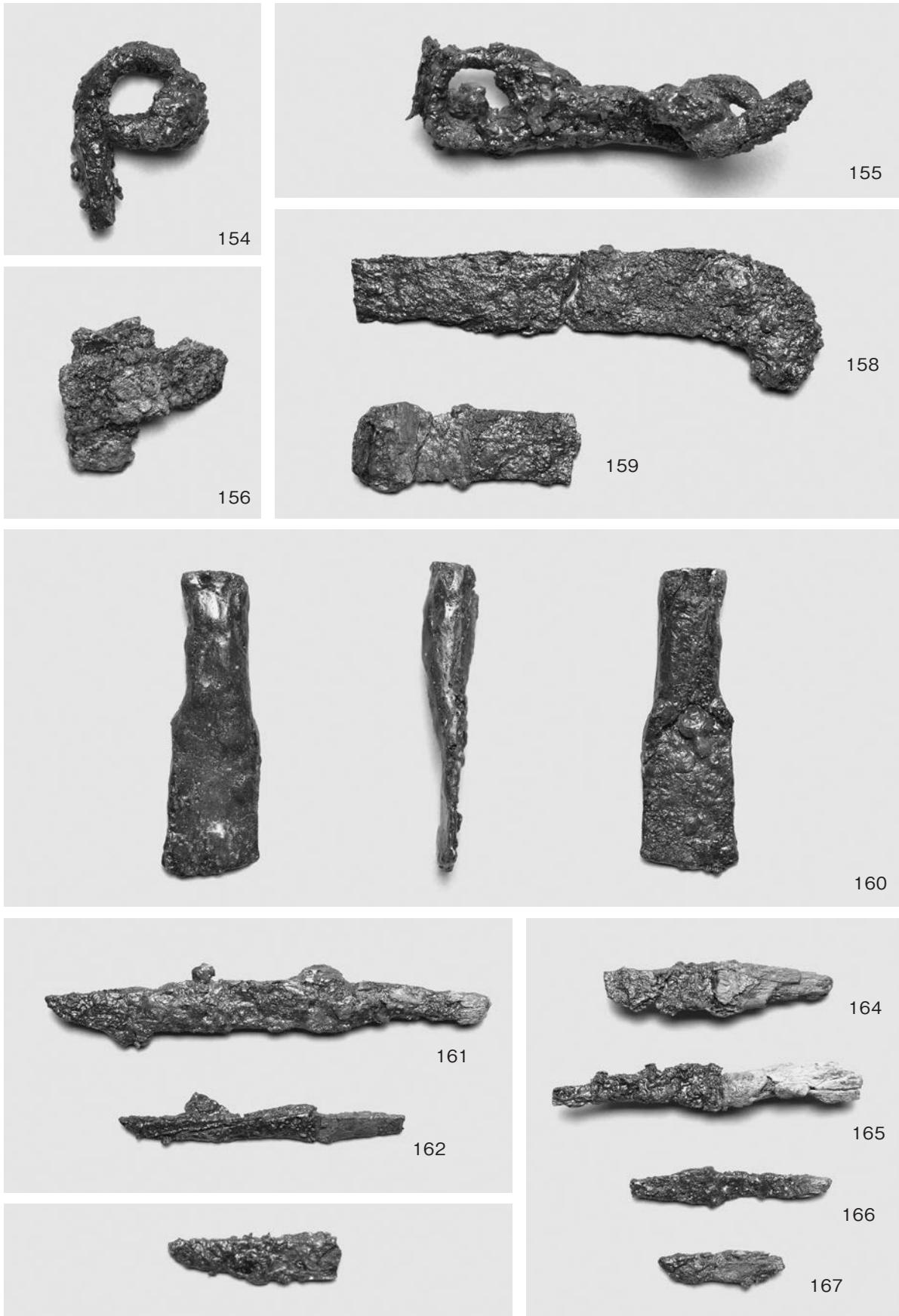
85

1. 出土遺物 (2 号石室)



1. 出土遺物（2号石室）

図版
26



1. 出土遺物（2号石室）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	いわいだにはたけなかいせき・いわいだにおおちがたいせき
書名	祝谷畠中遺跡3次調査・祝谷大地ヶ田遺跡8次調査
副書名	国庫補助市内遺跡発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第216集
編著者名	河野 史知
編集機関	公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67番地6 TEL089-923-6363
発行年月日	西暦2025(令和7)年3月7日

松山市文化財調査報告書 第216集

祝谷畠中遺跡3次調査 祝谷大地ヶ田遺跡8次調査

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

令和7年3月7日 発行

編 集 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋 藏 文 化 財 セ ン タ 一
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

発 行 松 山 市 教 育 委 員 会
〒790-0003 松山市三番町六丁目6番地1
TEL (089) 948-6605

印 刷 岡田印刷株式会社
〒790-0012 松山市湊町七丁目1番地8
TEL (089) 941-9111
